

令和7年度

報告書

国際キャリア 教育プログラム

UTSUNOMIYA UNIVERSITY

国際キャリア教育セミナー

国際キャリア教育

International Career Seminar

国際キャリア実習

主催：大学コンソーシアムとちぎ・宇都宮大学

開催趣旨

宇都宮大学、大学コンソーシアムとちぎ、そして全国の大学生、社会人の皆さん、国際交流に関心がある高校生の皆さんも、国際キャリアについて考えたことがありますか。

大学時代に、就職活動に入る前に、国際キャリアのプログラムに参加してみたい、国際的な問題に対応する職場や海外で国際インターンをしてみたい、あるいは今、政府、企業、大学で叫ばれている、「グローバル人材」の育成のためのプログラムに参加してみたいと思う方がいるかもしれません。



そのように考えている皆さんのニーズに応えるのが、グローバルマインドを養う「国際キャリア教育プログラム」です。本プログラムは、宇都宮大学国際学部や栃木県の大学が中心になって2004年から毎年実施され、参加者数は過去22年間で合計2451名（宇都宮大学1585名、外部参加者866名）となっています。2020年より、新型コロナウイルス感染症流行への対応のためのオンライン化によって、海外からの参加も可能になり、ペラデニヤ大学(スリランカ)、ケラニヤ大学(スリランカ)、サラワク大学(マレーシア)、タマサート大学(タイ)、および王立プノンペン大学(カンボジア)など、本学交流協定校を中心に多数の学生の参加があり、国際交流実体験の場としての学修効果を生んでいます。

このプログラムの科目は、学生が生きることや働くことの意味について考えるという点で共通の「国際キャリア教育」（日本語によるセミナー）と、「International Career Seminar」（英語によるセミナー）、そして、国内や海外の企業、公的機関、NGO・NPOで実習体験を行う「国際キャリア実習」の3科目、6単位で構成されています。いずれも夏季と春季の休業期間に行われます。2つのセミナーはどちらも3日間の集中講義形式で、共通テーマを「グローバル化時代の地域とキャリア」とし、「地域からのグローバル化（Globalization）」、「地域のグローバル化（Glocalization）」の2つの柱を立て、国際ビジネス、国際協力・国際貢献、多文化共生と日本、異文化理解・コミュニケーションの4つのテーマで分科会を構成します。各分科会のためには、その道のプロの専門家や講師を揃えています。一方、総時間数80時間で行われる「国際キャリア実習」のためには、国内・海外の魅力的で個性的な実習先を用意しています。3科目すべての履修を勧めますが、1つか2つを選択して受講することも可能です。

「国際キャリア教育プログラム」は、毎年宇都宮市や栃木県内だけでなく、全国から優秀な大学生、社会人が多数参加します。皆さんもこのプログラムに参加して、国際キャリアについて一緒に学び、国際社会や地域社会への「キャリアパス」の可能性を探っていきましょう。

最後に、本プログラムは、栃木県からの支援を受けて、大学コンソーシアムとちぎとの共同事業として企画しましたが、その実施に際しましては、（公社）栃木県経済同友会、（公財）栃木県国際交流協会、NPO法人宇都宮市国際交流協会、そして、JICA 筑波センターからご後援をいただきました。また、（公財）あしぎん国際交流財団からはご協賛、宇都宮市創造都市研究センターからは特別協力をいただきました。ご関係の皆様からの多大なご理解とご支援に対し、主催者を代表して、厚くお礼申し上げます。

令和8（2026）年3月

国際キャリア教育プログラム委員会 委員長
宇都宮大学 国際学部 教授
吉田 一彦

目次

開催趣旨	1
------------	---

第1部 国際キャリア教育セミナー

1. 目標とルール	3
-----------------	---

国際キャリア教育

1. 概要	4
2. 開催日程	5
3. 全体講義	6
4. 分科会・講師及び講義概要	13
5. パネルトーク	41

International Career Seminar

1. 概要	44
2. 開催日程	45
3. 全体講義	46
4. 分科会・講師及び講義概要	52
5. パネルトーク	78

附 表

1. 修了者名簿	81
2. 参加者全体コメント	83

第2部 国際キャリア実習

1. 実施要項	85
2. 令和6年度春期・令和7年度夏期受入団体および実習概要一覧.....	89
3. これまでの受入団体および実習概要一覧.....	89
4. 実習生からの報告	92

第1部

国際キャリア教育セミナー

国際キャリア教育セミナー

目標とルール

目標

- 「働く」とはどのようなことなのかについて考える。
- 自分と地域社会や世界とのつながりについて考える。
- 主体的に関わりたい分野を見つけ、今後の学びに向けた“きっかけ”を得る。

ルール

- どんな意見も臆せず、積極的に発言しよう。
- 一人ひとりが参加者の自覚をもとう。
- 異なる意見を尊重するとともに自分の意見をもとう。
- 自分独自の意見を述べよう。
- 多様な発想を生み出す雰囲気をつくろう。
- 時間厳守で行動しよう！
- 安全、健康に注意をしよう。

AIM

- Engage with those who wish to work on the world stage.
- Grasp the image of “working in society with motivation.”
- Provide opportunities to think about your roles in local and global societies.
- Find motivation to actively pursue your career.

RULES

- Speak out! Share your opinions freely.
- Make sure that we are all participants.
- Have your own ideas as well as respecting different ideas of others.
- Express your own opinion.
- Try to make a congenial atmosphere to encourage interest and creativity.
- Always be punctual.
- Pay attention to safety and to your health.

2. 開催日程

1日目(9月13日 土曜日)

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
9:00 9:30	受付	13:00	パネルトーク 「グローバル時代におけるキャリア形成について」
9:30 9:50	開講式 オリエンテーション	15:10 15:30	趣旨説明 分科会・プレゼン方法説明
9:50 12:00	全体講義 グループディスカッション	15:50 17:50	分科会 I (分科会講師による講義等)
12:00 12:50	昼食		

2日目(9月14日 日曜日)

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
8:30 12:00	分科会Ⅱ グループディスカッション 発表準備等	15:30 16:30	まとめ・発表準備
12:00 12:50	昼食	16:30 17:30	中間発表
13:00 15:30	分科会Ⅲ	17:30 18:30	発表準備

3日目(9月15日 月曜日)

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
8:30 10:00	発表準備	12:40 13:30	昼食
10:00 12:40	全体発表	13:30 14:40	ふりかえり・意見交換・全体総括 閉講式

3. 全体講義



今が「事を起こす」時かも！？

—自分らしく国際的に活動するためのヒント—

吉田 一彦（よしだ かずひこ）

宇都宮大学 国際学部 教授／国際キャリア教育運営委員会委員長

略 歴：

日本国、本州の北、太平洋岸出身のエミシとヤマトの後裔。東京外国語大学大学院地域文化研究科修了。博士（言語学）。ベアシスト。大学院在学中に国際交流基金日本語教育専門家として派遣され、在カラチ総領事館（パキスタン）とチュラーロンコーン大学（タイ）にて客員講師。学位取得後の2002年に宇都宮大学留学生・国際交流センターに着任。2017年より国際学部教授。2007年よりJICA 青年海外協力隊事務局技術専門委員（日本語教育）。

🌐 全体講義の概要

この講義は、参加する皆さんが自分自身の国際キャリアの一步目を踏み出すきっかけになるかもしれません。また、セミナー全体への入り口に位置するものです。

皆さんにとって「キャリア」とは何でしょうか？この質問にまず自分で答えてみましょう。英語の単語ですから、辞書で確認してみましょう。よく使われているオンラインの辞書によると the part of your life that you spend working (Collins English Dictionary) と定義されています。working は、職業的な活動よりも意味が広く、作品を

作ることや、個人的、あるいは、共同の作業なども意味します。となると、単に職業人として働くということに止まらず、自分以外の他者や、その他者と共有するコミュニティを意識した活動全般のこととも捉えられます。講義では、このような、キャリアとは何かについて考え、理解を深める活動をまず行います。

次に、「国際」が付いていますので、自分自身が生まれた国の国境を踏み越えて外へ出ていくことや、国境から外に出てきた人を迎え入れたり、その人と伝え合ったり付き合ったりすることが、必然的に関わってきます。それは、1つの国の中に留まり、同じ国に生まれた人とだけ関わるということと、本質的に何が違うのか、社会的・文化的・歴史的背景が異なる人たちに接して、その人たちに自分は何を提供できるのか、その人たちからどんなことを学べるのか、共同作業を通して何を作り出せるのか、こうしたことについて考えてみるための活動をします。

3つ目に、皆さんがこのセミナーに参加することにどんな意義があるのか考え、同じようにこのセミナーに参加している人々と考えを交換し、そして、ひとりひとりが自分なりの国際キャリアってこんなものであり得るのではないかと、というぼんやりとしたイメージが持てるような活動をします。そして、ぼんやりとでも浮かんできたことを手土産に、後に続くパネルトークで人生の先輩たちの話を聞き、分科会で新たな学びを得てほしいと思います。

参考文献

この講義のための決まった参考文献はありません。自分らしさに気づかせくれた本がもし皆さんにあるなら、それが最良の参考文献でしょう。



全体講義:

今が「事を起こす」時かも!?

—自分らしく国際的に活動するためのヒント—



宇都宮大学国際学部教授
吉田 一彦 (Kazuhiro MARCO YOSHIDA)



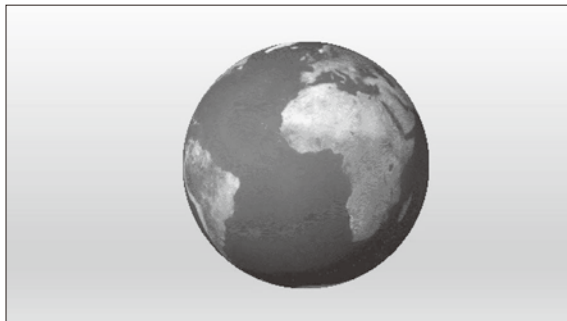
目的:

- 世界のどこに自分がいるか確認する
- 日本語コミュニケーションについて、あらためて考える
- なぜ私たち自身国際キャリアを追い求めるのかを考える

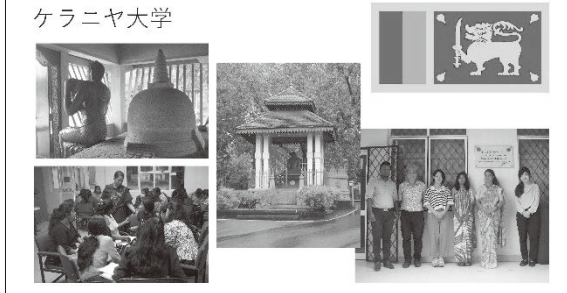

構成:

- プロローグ: 世界の中で自分がいる場所を確認しよう
- 第1部: 私は誰?と自分に尋ねてみよう
- 第2部: 私がこのセミナーに期待するのは何?と自分に尋ねてみよう
- 第3部: 自分の舞台は世界のどこにあるの?行くべきか?それとも、留まるべきか?と自分に尋ねてみよう
- 第4部: 国際キャリアを追い求めて
 - 先人と自分との経験の重ね合わせをしてみよう
- エピローグ: 自分も加わる新しいコミュニティ、分科会に向かう用意はいかが!?

世界の中で 自分がいる場所を確認しよう



ケラニヤ大学

ペラデニヤ大学




サラワク大学




タマサート大学



王立ブノンペン大学




宇都宮大学





より効果的な日本語コミュニケーションのために

言語を科学的に観察すると...
・X人であること(民族・国籍)
・X文化の担い手であること
・X語を母語として話すこと
この3つの間に必然的関係はない

スリランカの憲法第18条
(1) The Official Language of Sri Lanka shall be Sinhala.
(2) Tamil shall also be an official language.
(3) English shall be the link language.
(4) Parliament shall by law provide for the implementation of the provisions of this Chapter.

セミナーで共通言語として日本語を使うことについて考える意義:
◆このセミナーには日本語を母語としない参加者もいるということを心に留める
◆自分が所属するコミュニティには、マイノリティがいるということを心に留める
もちろん、言語的マイノリティだけでなく、あらゆるマイノリティを意識する

話題2
自分自身が普通だと思い込んでいるコミュニケーションのスタイルを疑ってみよう!
(世界はさまざまだから...)

国際的な人の集まりで物静かな人の評価さまざま
「落ち着いていて、いいわ。」
「何考えてるか、わかんない。」
「非協力的でひどい! みんなでいっしょに取り組んでいるのに。」
「頭、悪いんじゃないの。」

話題1
共通言語(link language)は日本語ですが...
◆みんな生まれながらに日本語を話すから、ではない
◆みんな日本人だから、でもない
◆日本語を通して学ぶと決めたから!

例から考えよう!
スリランカの場合:
シンハラ語が人口の70%を占めるシンハラ人によって話される
タミル語が人口の15%にあたる人々によって話される
国内には、それ以外の言語を話す人々もいる



国際キャリアを追い求めるということは、マイノリティを必然的にその一部となっているコミュニティで、自分らしく活動する道を探ること
そのマイノリティをよく理解する
マジョリティの1人として
または、マイノリティとして
自分の立場で、自分だからこそこできることを

ステレオタイプから考えよう!
国際会議の場でよく言われること:
もっともむずかしいのは、インド人を黙らせることと、日本人に話させることだ!

価値観がバラバラでも、話し合いは成り立つか?
成り立ちます! ゴールは1つ
効率的で学ぶことが多く、有意義な機会にしよう!
そのための工夫をしよう!

第1部:
私は誰?と自分に尋ねてみよう

実施:
Zoomのブレイクアウトルームを使って、自動的に誰かとペアになります。自分が見つけて表現できるようにおぼたった特徴を使って、自己紹介をします。お互いに質問をします。このようなセッションを3回します。
2回目と3回目のセッションでは、自己紹介だけでなく、前のセッションで会った人についても、簡単に紹介してください
各セッションの時間は、5分です

第1部:
私は誰?と自分に尋ねてみよう

準備(時間は5分) -1:
自分を特徴づけていること、つまり、他者との違いを形作っているものを3つかそれ以上見つける。そして、それを言い表すための表現を考える

第1部:
私は誰?と自分に尋ねてみよう


ヒント: 自分を特徴づけるために言えることを考える

- 本当の名前を言う必要はありません。自分を特徴づけられるニックネームを作って、名乗ってもかまいません(ニックネームの由来を教えてください)
- 自分が今関心を持っていること、はまっていることについて話すといいでしょう
- 自分の好きさらいについて話すといいでしょう

第1部:
私は誰?と自分に尋ねてみよう

準備-2: 始める前に、言葉にして言う練習をしましょう。自分の中でリハーサルしてください

第1部:
私は誰?と自分に尋ねてみよう



第1部:
私は誰?と自分に尋ねてみよう


それでは、3回のセッションを楽しんでください

※ 前よりもうまく自己表現できるということが感じられるといいと思います。

10分休憩しましょう
11:24(日本)、
9:24(タイ、カンボジア)
8:54(スリランカ)
に、再開します。

第2部:
私がこのセミナーに期待するのは何?と自分に尋ねてみよう

作業1:
ワークブックを確認しよう。
このセミナーの目標を思い出そう。1ページを開けて、見てください。



第2部:
私がこのセミナーに期待するのは何?と自分に尋ねてみよう

1. 「働く」とはどういうことなのかについて考える。

どんなタイプの人々と働きたい?と自分に尋ねてみよう
私の世界舞台はどんなところ?と自分に尋ねてみよう
その舞台はどこにあるの?と自分に尋ねてみよう

第2部:
私がこのセミナーに期待するのは何?と自分に尋ねてみよう

2. 自分と地域社会や世界とのつながりについて考える


もう一度、自分は誰?と自分に尋ねてみよう
自分は何が得意で、何が不得意なの?自分は何が好きで、何がきらいなの?とも自分に尋ねてみよう
1つの大きな仕事を想像してみて、そのどの部分が自分に合っているのかな?と自分に尋ねてみよう
どの部分を引き受けたら、いっしょに働く他者は喜んでくれたり、自分に微笑んでくれるだろうか?と自分に尋ねてみよう

第2部:
私がこのセミナーに期待するのは何?と自分に尋ねてみよう


3. 主体的に関わりた分野を見つけ、今後の学びに向けた“きっかけ”を得る
どんなことが「事を起こす」きっかけになるか?どんなことが、やる気をなくさせるか?と自分に尋ねてみよう

第2部:
私がこのセミナーに期待するのは何?と自分に尋ねてみよう

作業2:
ワークブックを確認しよう。
3ページを開けて、表の「セミナー初日に記載してください」とある欄に、今、記入をします。



第2部:
私がこのセミナーに期待するのは何?と自分に尋ねてみよう



第2部:
私がこのセミナーに期待するのは何?と自分に尋ねてみよう

「セミナー」ワークブック3~4ページ:
セミナーにおける自分の達成目標、それから、将来の目標とそれに向けた道筋に何を書くかを考えてみます。この時間に5分かかります

5分後に、メンバーが4人か5人のブレイクアウトセッションを始めます。そこで、ひとりひとり自分の達成目標について話し、他のメンバーからフィードバックをもらいます (意見や感想を聞きます)

05:00

第2部:
私がこのセミナーに期待するのは何?と自分に尋ねてみよう

では8分のブレイクアウトセッションを始めます。
楽しんでください。
メンバーは4人か5人です。ひとりひとり、自分を特徴づけるものは何かから話し始め、自分の達成目標について話し、他のメンバーからフィードバックをもらいます (意見や感想を聞きます)

第3部:
自分の舞台は世界のどこにあるの?行くべきか?それとも、留まるべきか?と自分に尋ねてみよう

世界へ出ていく自分の動機って何?自分を刺激するものって何?と自分に尋ねてみよう。そんなものが本当に必要か?とも尋ねてみよう
どこで暮らして働こうか?でも、今が「事を起こす」時なのか?とも自分に尋ねてみよう


動機づける“きっかけ”がある:
Dévorer les paysages, c'est donc cela qu'il me faut.
Comme un qui ne serait jamais rassasié de terre, ou de vie, ou de femme, à qu'il en faudrait davantage. Il ne s'agit pas de comprendre, il ne s'agit pas de saisir, il ne s'agit que de vers.

風景をむさぼる。それこそほくに必要なことだ。一度も大地や生活や女に満足しなかった男みたいに。いつでも、より以上のものが必要だった男みたいに。理解することが問題ではない。分析することが問題ではない。みしらぬほうへ自分の重みを運ぶ熱い金属の化けもの、エンジンにしてしまうのが大切なのだ。

le livre de fuites - J.-M.-G. le Clézio (『逃亡の書-冒険小説』ル・クレジオ)

もちろん、自分を今いるところに踏みとどまらせるかもしれないこともある。たとえば:

自分にとってかけがえのない存在の人とか...



第4部:
国際キャリアを追い求めて

さて、このへんで「キャリア」とはどんなことだったか、おさらいをしようと思います。このセミナーの名前の中に出てくる「キャリア」です。

第4部:
国際キャリアを追い求めて

ひとつの答え:
キャリアとは、単に個人がどう職を変えてきたかとか、どう技能を身に付けて経験を積んできたかとかだけではない。そうではなくて、個人がどう自分らしく生きられるか、その自分らしい生き方の全体のことだ
なぜなら、より大きなコミュニティの中には、構成するひとりひとりが全体のために、自分ならではの力を発揮する場やタイミングがあり、相手がいるから

第4部:
国際キャリアを追い求めて

もうひとつの問い:
「国際」というけど、国際キャリアであるためには、必ず国境を踏み越えて外へ行かなければいけないのか?
(宇都宮大学国際学部は、「在学中に海外経験をして、報告しなさい」と義務付けているのだが、意味あるの?)

第4部:
国際キャリアを追い求めて

ひとつの答え:
国境を踏み越えて外へ行くこと自体に意味があるわけじゃない。外へ出なければ絶対に経験できないことが経験できてるこそ、国境を踏み越えたことが意味を持つ。たとえば、
(日本に住む何の取り柄のない若者だった自分にとって)それは、絶対的なマイノリティ経験

第4部:
国際キャリアを追い求めて



先人と自分との経験の重ね合わせをしてみよう

参加者のレポートより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 「私は誰？」という当たり前を疑うことから始まり、この国際キャリアセミナーに参加する意義についても見直すことができたおかげで明確な目標をもって取り組めた。
- 国際学部、農学部それぞれで学ぶ上でのメリット、デメリットについて議論できたことが一番印象に残っています。国際学部の方は、国際全体について問題になっていることについて知ることが出来るが、実際に使える技術がない。逆に農学部は、国際的な問題について自分から学びに行かないと知ることができない反面、直接的に人を助けることのできる技術が伴っているという話が出来ました。
- 全体講義でこのプログラムに参加する意義を改めて確認できたと思う。分科会に進む前に、ブレイクアウトセッションで発言する練習ができたのがよかった。回を重ねるにつれて自己紹介しやすくなったのを感じた。
- 経験を重ねることで、自分らしさを構築できるということを学ぶことができ、自分らしさについて考えるきっかけになった。また、この全体講義で学んだことを活かし、その後の分科会では他の人と自分自身を重ね合わせて考えることができた。
- 初めての方とお話しすることが自分は苦手で、意見を持ってそれを伝えることも不得意だったが、克服していきたくて考えていたため、良い機会だった。また、初めて話した方々の意見はどれも興味深く、自分がこれまで考えてこなかった視点からのものも多々あり、良い時間だった。
- 自分の舞台は世界のどこにあって、とどまるべきかどうか考えるという吉田先生のお言葉が印象的で自分のことを考える良い機会になった。
- 自分を伝えるという一見簡単そうなことでも、相手に分かりやすく伝えることは難しいと感じました。とてもいい勉強になりました。
- 自己紹介や意見交換で、すっかり緊張もほぐれ、三日間の活動が始まってすぐであるにもかかわらず、楽しむことができました。
- 自分の身近にも、様々なルーツを持つ人々がいることを改めて実感した。私自身、地元に住んでいた頃にはあまりそのような経験はなかったが、地元を離れ栃木で暮らすようになり、ごく身近なことだと感じるようになった。こうした経験によって、地域によって感じ方に大きな違いがあると気付いた。
- 外に出なければ得られない体験を得るために海外へ行く。絶対的なマイノリティ体験をすることが重要であるというメッセージが印象に残った。そこで得た経験から、マイノリティの人々のために自分自身何が出来るかを考えるためのヒントが得られる。このことは、私が目指すまちづくりの目標にも繋がることだと考えた。
- 改めて自分は誰なのか？と考えてみると、自分に関する特徴や趣味・好きなことが思っていたよりすらすら出てこず、自分のことを理解しているつもりになっていただけなのかもしれないと気付いた。国際キャリアを追い求めるということは、自分らしく活動する道を探るという話があったが、そのためにはまず自分らしさとは何かをきちんと把握することが重要であると感じた。また、自分自身の経験を重ねるということについても、自身の過去を見つめ直すことの大切さを学んだ。相手のことを理解し、納得するキャリアを描くためには、自分について知ることが重要であると感じたため、自分をしっかりと見つめていきたい。
- 他者とのコミュニケーションを重ね自分自身の対話力が上がっていくのを実感できた。また、自分とは異なる背景を持つ相手との関わりから、その差異や共通点を見つけていくことが面白いと感じた。これは、自分と共通項があった場合は単純に嬉しく感じ、自分と異なる場合は理解に努めようと興味を持って質問したり話をよく聴いたりしたからである。自分と異なる視点を見つけることは自分が知らないことを発見することであると考えたため、このようなでは今後も積極的にコミュニケーションをとっていきたい。
- ○○人だから、○○な文化だからといった偏見が外国人を身近な存在として理解しようとしにくい姿勢に大きく関わっていると考えた。制度を充実させることは重要だが、その制度を扱う人間の理解がなければ形骸化してしまう。分科会のテーマと関連付けて、偏見を振り払ったコミュニケーションの必要性を改めて認識することができた。
- 全体講義から私が考えたことは、国際キャリアを積むうえで、海外志向になる前に日本の地元での多文化共生についてしっかり理解を深めるべきということである。日本のことをよく理解した上で海外と比較していくことが、より深い学びにつながると考えた。

4. 分科会・講師及び講義概要

分科会 A	グローバルキャリアをデザインする： イノベーションの最前線で『働く』とは？
講師	キム ヒジョン 氏 Google 合同会社 New Business Strategist
分科会 B	自分の強み、個性、ライフステージを見据えた国際協力
講師	カバリエロ 優子 氏 宇都宮大学共同教育学部 准教授
分科会 C	異文化を繋ぎ、価値創造に展開するコーディネーター
講師	岩井 俊宗 氏 認定 NPO 法人とちぎユースサポーターズネットワーク 代表理事
分科会 D	「共感」から考える多文化共生
講師	梁 鎮輝 氏 宇都宮大学国際学部 助教
分科会 E	英語が苦手でも英語で国際交流・国際協力していこう
講師	吉田 一彦 氏 宇都宮大学国際学部 教授 国際キャリア教育運営委員会委員長
分科会 F	多様な集団で交流する能力を身に着けよう
講師	林 明夫 氏 株式会社開倫塾 代表取締役

分科会 A



グローバルキャリアをデザインする： イノベーションの最前線で『働く』とは？

キム ヒジョン (きむ ひじょん)

Google 合同会社 New Business Strategist

略 歴：

東京大学卒業後、東レ株式会社でキャリアをスタートし、その後、ベトナムで事業を立ち上げ、スタートアップを運営。その後、Google Japan へ入社、現在は韓国・日本市場の新規顧客のマーケティングを支援するセールスチームをリードしている。

🎤 講義の概要

1. 仕事の概要

Google で韓国・日本市場における新規顧客のマーケティングを支援するセールスチームを統括しています。具体的には、Google の広告ソリューションを活用して、お客様のビジネス成長を加速させるための戦略立案、実行、チームマネジメントを行っています。この仕事の面白さは、最先端のデジタル技術を活用し、多様な業界の企業様の課題解決に貢献できる点です。また、常に変化する市場環境の中で、新しいマーケティング手法や戦略を開発していくダイナミズムも魅力です。意義としては、Google のサービスを通じて、企業の成長を支援することで、経済全体の活性化に貢献できると考えています。



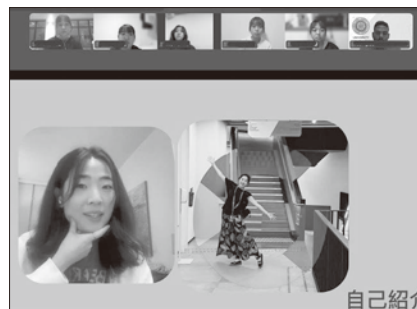
2. キャリアパス

【学生時代】

韓国から 2009 年に日本に渡り、東京大学に入学。大学では社会学を専攻。就活時は、「働く」ことのイメージが漠然とした状態で、とりあえず日系企業で社会人として様々なことを学びたいと考え、メーカーや商社を中心に就職活動を行う。

【東レ株式会社】

入社後、半年間の工場実習を経てグローバルオペレーション部に所属。毎朝 9 時前に出勤し、終電で帰宅するという社会人 1 年目を過ごし、最も体を壊した時期でもあったが、やり甲斐のある仕事で上司や先輩にもめぐまれていた約 3 年間。日系製造業の現場の働き方、生産管理、法人営業について学ぶ。



【スタートアップへ】

2016 年、日本の事業家と知り合い、ベトナムでスタートアップを設立。2 年間、ゼロから事業を立ち上げ、サービスを作り、チームを拡大しながら運営。チャレンジングな日々を送る。

【外資系へ転職、再び日本】

2018年、グーグル合同会社へ入社。日本と韓国の数百社にわたる企業の新規マーケティング施策をコンサルティングする業務に就き、自由で楽しい働き方を体験する。

3. 分科会の内容

本分科会では、講師の経験をもとに、グローバルキャリアの魅力と、異文化コラボレーションやイノベーションを生み出すためのスキルや考え方を皆様と共に探求し、今後のキャリアをデザインします。

学生の皆様が将来、国際的な舞台で活躍するためのキャリアを考える上で、Googleのようなグローバル企業では、どのようなタレントを持った人材が働いていて、どのような働き方をしているのか、様々な働き方・ケーススタディーを通して皆様の仕事に対する視野を広げて、未来に備えていただくために一緒に考えましょう。

4. キーワードリスト

- 職場と職業
- キャリアパス
- ダイバーシティ&インクルージョン
- Googleの企業文化（10X、心理的安全性）



5. 参考資料等

- ワーク・ルールズ! 一君の生き方とリーダーシップを変える (東洋経済新聞社・ラズロ・ブック)
- ニューエリート グーグル流・新しい価値を生み出し世界を変える人たち (大和書房・ピョートル・フレックス・グジバチ)

6. 事前予習用リーディング課題

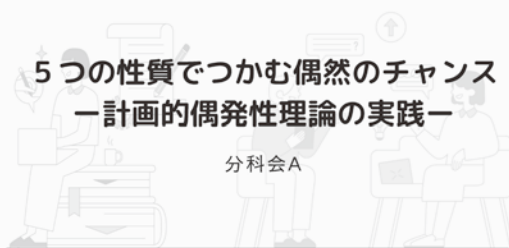
下記のコンテンツを参考に、自分のキャリアについて考えてみましょう。今後3年間、そのキャリア計画のために何を始めてみたいか共有しましょう。

- 計画的偶発性理論・JD クランボルツ
<https://www.youtube.com/shorts/r6AG2NtA0c0>
- その幸運は偶然ではないんです! ——夢の仕事をつかむ心の練習問題 (JD クランボルツ)
- 人生の経営戦略 (山口周)

 参加者による全体発表


**5つの性質でつかむ偶然のチャンス
—計画的偶発性理論の実践—**

分科会A



発表の目標

- ・ 計画的偶発性理論とそれを成り立たせる5つの性質を、Googleの企業文化とともに理解する
- ・ 先生へのインタビューや自分たちの経験をもとに理論がキャリアを築く上でいかに機能しているかを考える



目次

1. 計画的偶発性理論
-必要な5つの性質とは?-
2. 先生方へのインタビュー調査
-学生の経験との共通点-
3. 結論：アクションプラン



01 | 計画的偶発性理論とは

1. 計画的偶発性理論とは-必要な5つの性質とは？-

計画的偶発性理論とは？
ほとんどのキャリアは偶然の出来事によって決定される

→ 実現するために必要なのが 『5つの性質』

出典 John D. Krumboltz, Al S. Levin. (2004) Luck is No Accident: Making the Most of Randomness in Your Life and Career. Impact Publications.

1. 計画的偶発性理論とは-必要な5つの性質とは？-

5つの性質

- 好奇心 (curiosity)
- 持続性 (persistence)
- 柔軟性 (flexibility)
- 楽観性 (optimism)
- Risk-Taking

-Googleの企業文化-

- 社員同士の交流→柔軟性
- 透明性の担保による高いモチベーション→楽観性
- 社内のルール・考え方→楽観性、好奇心、持続性
- その他のユニークな取り組み→楽観性、好奇心

出典 John D. Krumboltz, Al S. Levin. (2004) Luck is No Accident: Making the Most of Randomness in Your Life and Career. Impact Publications.

02 | 先生方へのインタビュー調査

2. 先生方へのインタビュー調査-学生の経験との共通点-

岩井俊宗 先生にインタビュー

- ✓ 『気づく力』
- ✓ 『学生時代に挑戦を繰り返す』

塩崎大希 さんの経験から

失敗を恐れず話しかけ続けたことで言葉の壁で人間関係に苦勞→馴染める居場所に巡り合えた

共通項： **好奇心 (curiosity)** **持続性 (persistence)**

2. 先生方へのインタビュー調査-学生の経験との共通点-

キム ヒジョン 先生にインタビュー

- ✓ 『思い切った挑戦でステップアップへ!』
- ✓ 『様々なコミュニティに入る』

朝夷柊友 さんの経験から

スカウトされて全国大会や海外で練習の機会へ!

スミミングスクールに入る→

共通項： **好奇心 (curiosity)** **柔軟性 (flexibility)** **Risk-Taking**

2. 先生方へのインタビュー調査-学生の経験との共通点-

カバリエロ 優子 先生にインタビュー

- ✓ 『予期せぬ出来事は挑戦・学びのチャンス』
- ✓ 『失敗も自身の宝に!』
- ✓ 『人とのつながりを大切に!』

花塚ひとみ さんの経験から

国際舞台での挑戦を重ねた4年間

- ・失敗の経験→成長の力に!/ 挑戦の過程で、多様な友人との出会い
- ・念願の職場でインターンシップ実現!

共通項： **Risk-Taking** **柔軟性 (flexibility)** **好奇心 (curiosity)**

03 | 結論：アクションプラン

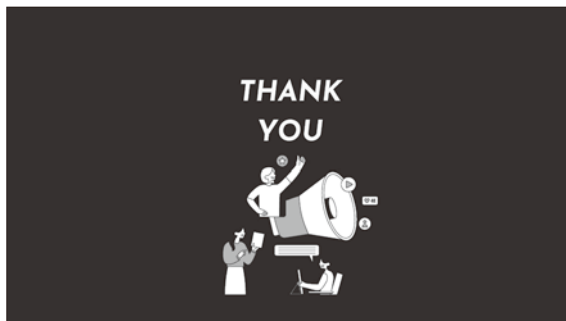
3. 結論：アクションプラン

挑戦し続けることの大切さ
失敗や苦勞もすべてが 『学び』

↓

安全地帯から抜け出すような行動

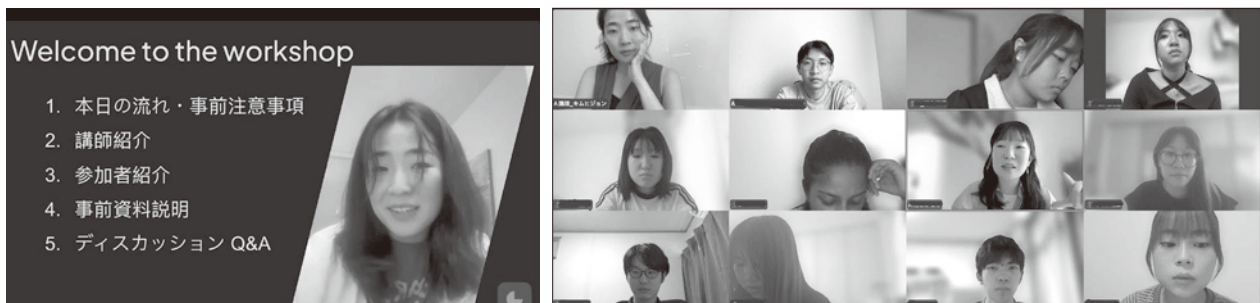
- 他の講義を受ける
- 留学・インターン
- セミナー・バイト
- インタビュー



参加者のレポートより (コメントは原文のまま記載しています。)

- キャリアは偶発的に発生するものごとによって形成される。計画性偶発性理論では、ほとんどのキャリアは偶発の出来事によって決定されることを証明している。実現するためには、好奇心、持続性、柔軟性、楽観性、risk-taking の5つの要素が大切。

- キャリア形成において、自分の好きなこと、やりたいことが無く焦っていたが、それらを探す過程にも意義があり、どう探すべきかを学ぶことができた。(中略)プレゼンは自分が苦手なことの1つだったが、分科会の皆と協力しながら素晴らしい発表をできた過程は自分の自信に繋がると感じた。何より、キム先生にインタビューを取り入れたいと勇気を出して申し出たことで、その回答から多くの学ぶ機会や考えを良い方向へ変える機会が作れたことがこのセミナーでの1番の収穫であった。
- 大学の授業では、多文化共生を軸に展開する授業が多いが、今回のキム先生のような多文化共生というテーマ性を保ちながらキャリアや職業など普段では体験できない授業を受けることができ良かった。
- 今回のセミナーでは、キャリアを築く上で重要な要素である計画的偶発性理論について深く知ることができた。この理論を知ることができたことで日々意識する必要がある5つの性質や心構えについて考えることができた。特にリスクリングの考え方は、運やチャンスをつかむ上で非常に重要であると感じ日頃から安全圏から出る練習をすることは大事だと思った。
- 近頃の自分は、大学生活に慣れてきたこともあり、あまり積極的な挑戦を以前よりしなくなってきている。これは、今回学んだ5つの要素に基づいて言うところの好ましくない状態であるため、この授業を皮切りに何でも挑戦して飛び込んでいく存在になろうと決意しました。まずは明後日に中国に行こうかと思っています。チケットは今から取ります。
- 私も含め日本人の傾向として常にリスクを気にして、あまり積極的に物事を行わないということが挙げられると考える。今回のセミナーを通して、失敗を恐れずに大学生だからこそできることに積極的に挑戦することが重要であり、自分の成長を促すことができるということを学んだ。「好奇心」「持続性」「柔軟性」「楽観性」「リスクテキング」の性質が、今後の活動の上で意識するべきである。
- 安全地帯から抜け出すような行動(他の講義を受ける、留学・インターン、セミナー・バイト、インタビュー)などは、小さな行動からも大きな成長に繋がる可能性があると感じた。偶発的な出来事に対して、積極的な行動の結果であるものとして捉え直していきたい。
- 最終発表では、理論がどういうものか説明し、先生方へのインタビューと学生自身の体験を組み合わせることで発表できて良かった。今回の講義に参加しプレゼンを行ったこと自体が「安全地帯を抜け出す一歩」と言ってくれ嬉しかった。
- キム先生と1対1で話すことができ、私のやりたいこととそのために必要なこと、他に似ていること、関連していること、考え方、ステップなど、色々なことを教えていただいたので、とても勉強になった。(中略)語学のみならず、柔軟な対応や多様な文化への理解が重要だと学んだ。将来の職種は定まっていないが、必要な力や知っておくべきこと、その方法を意識する段階にステップアップできた。
- 分科会で学んだ理論を実践して、大学のサークルやイベントに参加したり、キャリアセンターを利用したり、良い偶然に出会う行動をしていきたいと思う。そして、都度、自己対話を忘れず、自分の立ち位置も意識しながら行動していきたい。
- 分科会を通じて、偶発的なチャンスを掴めるように日々準備しておこうと考えた。また、失敗しても良いので、キャリアデザインを本気で作ろうと強く思った。必ずしも実現に至るとは限らないが、まずは、気楽な気持ちで取り組んでみたいと思った。



分科会 B



自分の強み、個性、ライフステージを見据えた国際協力

カバリエロ 優子 (かばりえろ ゆうこ)

宇都宮大学共同教育学部 准教授

略歴：

学部卒業後パラグアイ共和国で青年海外協力隊家政隊員、日本で家庭科非常勤講師、牧場勤務等を経て大学院に進学。専門は栄養学（博士：学術）。現在、3D 栄養表示システムの開発、お茶の抗酸化作用などを研究中。2025 年から JICA 草の根技術協力事業（支援型）でパラグアイ共和国において栄養改善のための教育活動を実施予定。

講義の概要

1. 仕事の内容

宇都宮大学共同教育学部、家政分野の食生活領域担当の教員として 2020 年に着任しました。大学教員の仕事は、研究、教育、大学運営、社会貢献と多岐にわたっています。専門分野の研究では、肥満や生活習慣病が課題となっているパラグアイ共和国において食事とエネルギー消費量についての現地調査・栄養分析を行い、統計学的手法を用いて食事や生活習慣の課題を明らかにしようとしています。また、緑茶、マテ茶、藍の茎茶などのお茶の研究・開発、アレルギー・ベジタリアン・ハラール対応ビーガン餃子の開発、ユニバーサルな 3D デジタル栄養表示アプリケーションの開発を行っています。教育に関わる研究としては、特別支援学校における衣食連携活動や附属小・中学校との連携プロジェクト研究を行っています。教育活動では、栄養学、調理実習、食生活環境実験、食ゼミ等の授業を担当しつつ、卒論や修士論文の指導を行っています。今年度はアフリカや中国からの留学生、研修生を受け入れており、国際栄養や食文化の違いなどを、ゼミを通して学びあっています。



2. キャリアパス

国際協力を目指そうと思ったきっかけは高校生の時にガールスカウトでネパールのワークキャンプに参加したことです。日本とは全く違う世界に衝撃を受け、国際協力を携わりたいと考え大学で栄養学を専攻しました。卒業後、青年海外協力隊でパラグアイ共和国家政隊員として自給自足を営む中高一貫の国立農業学校に赴任し、栄養と農業が深くつながっていることを再認識しました。また、パラグアイは肥満が課題であり、糖尿病などの生活習慣病で若くして命を落とす多くの方々がいることを知り、自分に何ができるだろうかと考えるようになりました。

帰国後結婚し、育児をしながら印刷会社の多言語翻訳校正のパート、家庭科の非常勤講師、牧場などで働いていましたが、もう一度栄養学を学び直したいと考え、長男の中学入学と同時に大学院に再入学しました。

14 年ぶりの再勉強では、栄養学、化学、数学、英語、スペイン語、PC の操作などをすべて一から学び直す必要があり、挫折しそうになることもありましたが、学生時代に解明されていなかった新しい研究の知見や栄養疫学を学ぶことができる楽しさがありました。大学院在学時は恩師のご指導のもと、ルワンダ共和国の食事に関する現地調査を行ったり、パラグアイ共和国で、5 か月間各家庭を訪問しながら食事調

査を行ったりしました。現地調査は、新しい出会いや、初めて口にする食べ物、日本では得られない経験など楽しいことも多かったですが、先の見えない不安との戦いでもありました。なんとか研究を続けられて卒業できたのは、様々な方々の温かいご協力とアドバイスがあってこそだと感謝しています。

大学院卒業後、宇都宮大学共同教育学部に働かせていただけるようになって、ずっと関心のあった教育に携わることができるようになったことは、新しい楽しみとやりがいにつながっています。高校以来、栄養学を学んで国際協力の仕事に携わりたいと考えていましたが、食の研究と教育という想像もしていなかった形で夢が実現しつつあることに私自身驚いています。今年度からは、JICAの草の根技術協力事業（支援型）でパラグアイの栄養教育活動を行う予定です。

現在、仕事以外の活動として、夜間中学や多様な学び研究会での学習サポートなどを行っており、様々な国籍、職業の方々とのコミュニケーションを楽しみつつ、日々新しいことを学ばせていただいています。

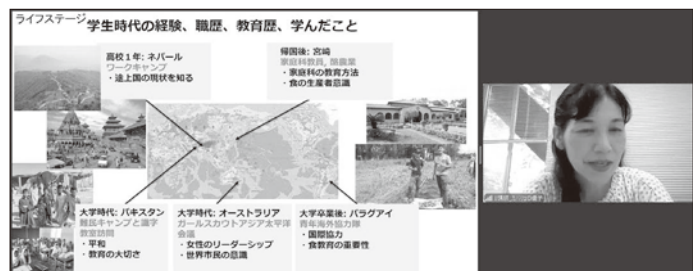
3. 分科会の内容

国際協力の方法や携わり方は、興味や関心、スキル、専門分野等、人それぞれに異なります。さらに、人生100年といわれる時代になり、個人の価値観やライフスタイルも多様化しています。これからのキャリア形成のためには、ライフ・シフトという柔軟な生き方に基づく国際協力の在り方を考えていく必要があるのではないかと考えています。

分科会の前半は、①国際協力の道を歩むために必要な問題意識・職業観、②コミュニケーション等の必要なスキル、③仕事と地域、世界とのつながりについてお話しさせていただきたいと思います。グループディスカッションでは、自分が大事にしている価値観、生き方、人間関係、強みを考えつつ、ライフステージを見据えた国際協力について、参加者一人一人が自分視点で考えていけるような活動にしていきたいと思っています。

4. キーワードリスト

- 国際協力
- ライフステージ
- ライフ・シフト
- 自分の強み
- 価値観



5. 参考資料等

- 2016『LIFE SHIFT (ライフ・シフト): 100年時代の人生戦略』東洋経済新報社.
リンダ・グラットン、アンドリュー・スコット、

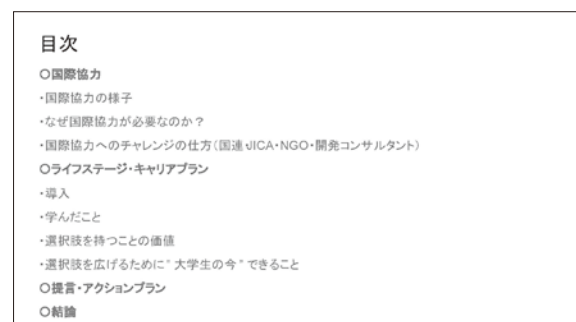
6. 事前予習用課題

About LIFE SHIFT 今こそ、自分の人生を生きよう



<https://str.toyokeizai.net/-/book/life-shift/about/>

5の参考資料は、必須ではないですが推奨課題とします。

参加者による全体発表



国際協力

なぜ国際協力が必要なのか？

分科会B カバリエロ優子 先生より

【組織レベルでの理由】



①我が国と開発途上国との相互依存性は極めて深く、ギブアンドテイクの関係だから。
⇒外交政策上の問題

②人道的動機として、社会的公平性を認識することに基づき思いやりの心があるから。
引用：大平正幸氏「国際協力論」(国際協力・世界平和・国際協力)

【個人レベルでの理由】

各々異なる。

例) マザーテレサ勲章 強い信仰心
シュバイツァー 動機：幸せに過ごしてきた日々を踏まえ、その恩恵を他の人に分ち与えようとしたから。

国際協力の様子




国際協力へのチャレンジの仕方

- ・国際連合職員
- ・JICA職員
- ・NGO職員
- ・開発コンサルタント



国際連合職員

- ・基本的に修士号が必要。
- ・国連公用語を2か国語以上習得している必要がある。
- ・実務経験があることが望ましい。
- ・YPP (Youth Professional Program) やJPO (Junior Professional Officer) などのプログラムを利用して応募可能。狭き門といえる。



多くの場合、任期が決まっているため、度々の就職活動が必要となる。
環境の変化への適応性が高い人や、国籍を超えて中立な立場で国際協力に関わりたい人に向いている。

『国際協力キャリアガイド』国際開発ジャーナル社編、国際開発ジャーナル社(2017)

JICA (Japan International Cooperation Agency)

- ・学士・修士は問わない。
- ・新卒の採用時以外は高度な英語力が必要。
- 入構後1年以内：TOEIC800点、3年以内：860点の取得が求められる。
- ・中途採用には職務経験と国際協力の実務経験が必要

＜特徴＞

- ・日本の立場から国際協力に関わる
- ・幅広い興味関心を持っている人が適正
- 現場と政策、地域や分野を問わない、国内と国外の拠点、多様な関係者との関わりetc



『国際協力キャリアガイド』国際開発ジャーナル社編、国際開発ジャーナル社(2017)

NGO (Non-Governmental Organization)

- ・主に国際協力や人道支援、環境保護などを目的に活動しています。
- AAR Japan (Association for Aid and Relief, Japan) や ADRA Japan (Adventist Development and Relief Agency)
- ・学士・修士は問わないが、即戦力が求められるため、中途採用が多い
- 国際協力業界やNGOでの実務経験3〜4年程度があると良い
- ・アンテナを高く張っておく必要がある。
- ・特定地域や分野で活動が続けたい人に向く
- ・弱者支援・孤立した立場での国際協力に関心がある人

『国際協力キャリアガイド』国際開発ジャーナル社編、国際開発ジャーナル社(2017)

開発コンサルタント

- ・途上国の発展を支援するために、専門知識を活かして国際協力プロジェクトを企画

キャリアの道



大学 → 専門分野を学ぶ → 関連企業や団体に就職 → 開発コンサルタントとして活躍

- ・関わる組織はJICA、国際機関(世界銀行など)、現地政府、民間企業
- ・専門知識、語学力(特に英語)、調整力・コミュニケーション力また海外経験(留学・インターン・ボランティア)、研究や調査の実績は必要です。
- ・さまざまな福利厚生が充実しています。例えば、初任給は22万円以上で、社会保険や終身雇用もあります。

開発コンサルタントは、教育や経済、環境などの課題を解決し、人々の生活をより良くする仕事です。

『国際協力キャリアガイド』国際開発ジャーナル社編、国際開発ジャーナル社(2017)

ライフステージ・キャリアプラン

導入

現在：職種は多様化し、より多くの選択肢を求められる。

Q「今の会社で長く働かない理由」
A「ライフステージに合わせて働き方を変えたいから」(30.8%)



様々なキャリア形成の在り方が問われる

『マイナビ転職』(新入社員)の意識調査(2020) 株式会社マイナビ

＜学んだこと＞「最初のキャリアプランは事故でいい」

- ・失敗してもやり直せる
- ・自分の強みを考えて周りと差別化し、希少価値を高める
- ・キャリアはワクワクする・楽しいと思えることが大切
- ・自分の中の価値観と自分にとって大切なことを明確にしておく

どのような仕事や業務が理想だと感じるか	(複数回答) %
収入が安定している仕事	40.8
私生活とバランスのとれた仕事	54.9
スキルアップが期待できる仕事	53.9
自分の専門知識や能力が活かせる仕事	34.1
健康を気にしない仕事	33.5

https://survey.gvo-online.go.jp/2024/2/06/06_himgaryaku.pdf をもとに作成

＜問題提起＞

自分がやりたいこと、期待することと現実でミスマッチが起きてしまう

※現実(給料・結婚や育児等のライフステージで起こるイベント)

『100万人の一人の存在になる9年1半の道』(著)藤原和博、ダイヤモンド社

選択肢を持つことの価値

- ・人生100年時代
- ・長寿化が進む現代→マルチステージ化
- ＝人生で多くの移行期間を経験する
- (ex. 就職、結婚、子育て、昇進、転職、退職...)
- 出典：LIFE SHIFT(ライフ・シフト) 単行本 - 2019/10/21 | シンダ グラットン(著)、アンドリュー スコット(著)、池村 千秋(翻訳)

↓

選択肢(オプション)を持つことは若者時代だけでなく、人生のあらゆる時期において重要

選択肢を広げるために "大学生の今" できること

- 自分の強みや、やりたいこと、自分の価値観について考える(性格診断テストの活用)。性格診断(心理学分野で有名なビッグ5) <https://big5-basic.com/room/index.php?route=topic/diagnosis>
- 他人に自分の価値観を話し、自分が社会に求められていることに気づく。
- 沢山の挑戦と失敗をして、経験を積んでいく(最初のキャリアプランは事故でいい)。
- 海外の生活や文化を体験する(大学内や国内での機会も積極的に活用する)。
- 何か1万時間取り組み、それをマスターする。 「100万人の一人の存在になる方法—不透明な未来を生き延びるための人生戦略」藤原和博、ダイヤモンド社 <https://gobin.jp/article/6552/>

・分科会を通して国際協力をするうえで自分の強みを理解し、それを活かすことで唯一無二の存在になれるということがわかった。そしてその強みを理解し活かす過程には失敗があってもいいし、長い時間がかかってもいいし、なんでもチャンスはあるということを理解できた。人生100年という長い時間の中で唯一無二な存在として自分ができることを改めて考えるきっかけになった。(周藤)

・自分の強みや価値観、やりたいことを理解したうえで、キャリアプランを描くことが大切だと感じた。また、自分が将来どのような生活を送りたいか、どう幸せでありたいかについても考えて、どのように国際協力に関わることができるか考えていきたいと思った。(小島)

・国際協力は相互理解であり、私たちが学ぶことや得られることが沢山ある。相互理解をすることにより、世界平和につながる。(中村)

・分科会を通して、自分の強みや価値観、やりたいことを改めて理解することができました。職業選択に関する図やグラフ、特に「1万時間の努力」という考え方は大きな刺激になりました。将来のライフステージが変わっても挑戦を続けることや、**選択肢を準備しておくこと**の大切さに気づきました。自分の強みを活かして、人々の役に立つ活動に関わっていきたく感じました。(マタハタイ)

・先生が社会人になってから大学院に進学されたこと、栄養学の観点から国際協力をしたいという思いから色々な挑戦を続けてこられたことが素晴らしいと思いました。

・自分の強みを活かしたライフプランを立てたり、結婚や子育てなどのライフステージと自身のキャリアの両立を図るために**豊富な選択肢**を持っていたり、変化や環境に**柔軟に対応する力**を持っていらっしやっで私も参考にさせていただきたいと思いました。また、失敗してもその後、恐れず挑戦していく姿勢が素晴らしいと思いました。

・多くの**選択肢を用意**することで、**どんな道になっても、自分のキャリアを形成**することはいつでもできることが学びになった。また、先生の学び続ける姿勢は自分も真似していきたいと感じた

結論:アクションプラン

①自分がやりたいこと

> 自分の分析をする

ex)mbti診断、

②自分の強み見出す

③社会で必要とされていることは何かを
考える

> 3つの共通部分が自分のキャリア形成へつながる

①②自分を知る

③社会を知る

この部分

①自分がやりたいこと

③社会で必要とされていること

吉武道子さんの講演より
(物質材料研究機構)

提言・アクションプラン

・分科会を通して、結婚や出産など、**ライフステージ**が変化しても国際協力を含む様々なことにチャレンジし続けることができるということに驚いた。また、夢が実現しなかったときのために**選択肢を用意**しておくことの大切さがわかった。選択肢の準備のために、様々な情報を集めておくこと、自分の興味のある職業にどんなスキルが必要なかを考えて成長することが必要だと感じた。(須田蒼依)

・分科会を通して、自分の価値観を改めて認識することの重要性を感じた。そのうえで、自分が何をすべきなのか、社会から何を求められているのかを考えるきっかけにしようと考えた(早川)

・自身の強みや、価値観・自分の中で大事なことは何かをまず考えること、これからの長い人生において、あらゆる変化に対応したり、**ライフステージ**(結婚・子育てなど)の**変化**に応じて**選択肢を多く持つこと**の重要性を理解した。(入澤)

・どこかで長く働く(少なくとも三年働く)という手もあるが、調査を参照しても**ライフステージに合わせたキャリア**を築いていっても今の時代は問題ないという新しい常識が生まれてきていることにおどろいた。また、人生100年時代ということも踏まえて、カバリエロ先生もお話して下さったようにやり直しをしながら進めていってもいいのではないかと思った。新しい**選択肢を広げる**という観点からして、転職してNGOに入るとするというのは難しいと考えた。気持ちだけではやっていけないし、**即戦力にならない**といけないと考えたと感じた。(横間)

先生のお話を聞いて

・先生が様々な分野のことにチャレンジなさっていて、人生たくさんの方にチャレンジできるんだと気付かされた。自分は無意識のうちに安定した仕事につかないといけない自分の行動範囲を狭めていたことに気付かされた。**たとえ失敗しても、代替案を用意しておくことでキャリアが途切れないようにすること**の重要性がわかった。

・本からいろんな考え方を吸収して、自分の軸(国際協力をしていきたい)を持ちつつ、**柔軟に生きていて**、自分の中にも取り入れていきたいと思いました。また、カバリエロ先生は自分のことをよくわかったうえでいろんなことにチャレンジしてきたように思いました。

・結婚、子育てや第2の学び期などライフシフトに応じ、様々な職種や教育の過程を経て「栄養学の観点から世界の人を救いたい」という1つの大きな目標を持ち続けて人生のキャリアをステップアップさせているのがこれからの自分のキャリアプランを見据えるうえで大きな学びになりました。**その時々に応じた働き方など、ゴールは1つだけではなく選択肢が沢山あることを**気付かされました。

・先生がこれまで様々な仕事にチャレンジしたことを知り、100年もある人生なのだから、私も色々なことに挑戦していこうと思いました。また、先生もこれまで何度も壁にぶつかっていて、それでも他の人から学びを得たり乗り越えていっている姿勢が素晴らしいと感じました。

提言・アクションプラン

<https://lab.fanbright.jp/wordcloud/text>

分科会Bのメンバーがアクションプランを考えた際に多かったコメント

- ・人生100年時代で自分の強みや大事にしたい**価値観**を把握することが重要
- ・「**社会から何を求められているか**」を考える姿勢の大切さ
- ・やり直しや転職も**選択肢**として受け入れる姿勢も必要

先生のお話を聞いた感想で共通している点

- ・生きていく途中で失敗してしまっても、ライフステージに合わせて働き方を変えたいと考えたとしても、いろんなことに**チャレンジ**していけばおのずと**選択肢**は広がっていく。
- ・夢が実現しなかったとき、やりたいことができなかつたときのためにも、様々なことに**興味**を持っておく。
- ・自身のキャリア形成に柔軟に対応していくことで、さらなる**自己成長**ができる。
- ・そしてそれが自身の人生の中で**学び続ける**ことにつながる。



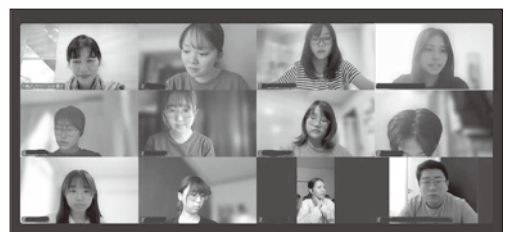
参加者のレポートより

(コメントは原文のまま記載しています。)

- 分科会を通じて、キャリアプランはただ自分がやりたいことを自分の強みを活かせる仕事を考えるだけでなく、それにプラスして、社会で求められていることを組み合わせて考えるとよりクリアにすることができるということを学んだ。また分科会内での意見交換や他の学生の強みなどを聞いて他者と

自分を比較した際に新たに見えてくる自分の強みや弱みなども知ることができた。

- プレゼン発表に関して、最後の「提言／アクションプラン」がなかなか定まらず、メンバーと共に苦戦したものの、やはり、分科会のセッションを通して、自分の価値観(まずは自分を知ること)と選択肢を可能な限り増やすことは人生設計において重要だという結論に至りました。自身のキャリア形成の課題としてこれからの様々なライフステージ(結婚?子育て?)にぶつかった際に、スムーズに回避するための選択肢を広げるために必要な学びを深めていきたいと思いました。
- 性格診断テスト等を利用したり、他の分科会メンバーと交流したりする中で、自分の強みや価値観、やりたいことと向きあうことができた。例えば、私は人とつながること、喜ばせることが好きなので、それをいかしたキャリアを目指そうと考えるようになった。さらに、強み、やりたいこと、社会で必要とされていることという3つの観点から、将来何をしていくかについて考えるという視点を得た。
- 自分のライフステージ、キャリアプランをどういう生活や人生を送りたいかということと結び付けて考えられるようになった。出産や結婚などの人生のイベントについてもどの段階かをイメージしたこと、より現実的に将来を想像できるようになった。
- ライフプランを考えたことで、自分が生涯を通じてどんなことにチャレンジしたいのかを明確にできた。また、自分の強みとやりたいことを見つけることで、自分がどんなキャリアを歩んでいくべきかを知ることができた。
- 一概に「国際協力」「国際キャリア」といってもそれに関わる方法はいくつもあり、アプローチの仕方も一つではないということを理解することができた。将来の自分の目指すところに向かうための学習や経験なども沢山の道があって今を1つずつ丁寧に歩いていくことに合うものやこと、チャンスをきちんと自分のものにしていけると思う。そのためには、自分の強みを理解して、自分軸を持ちながら相手のことを相手の立場になって考える共感力や多様な人々に関わり協働することに重きを置いていきたいと思った。将来「国際人」として生きる覚悟と自覚を得た3日間だった。
- 自分の価値観と人生でやりたいことに距離を感じていたが、自分には自分にしか経験できない人生を既に歩んでいるから今行っていることはムダなことではないと思ひ希望をもった。
- 自分が大切にしていること、自分がやりたいことなど、自分の価値観について考えることができた。1つに、住む場所は自分で決めたい。場所に縛られない働き方。この軸をもって就職活動を進めていきたい。
- 分科会を通して自分のやりたいこと、価値観を他人に共有することは初めてだった。また、メンバーの価値観についても理解する中で、社会から求められる自分とは何かを検討することができた。複数で1つのスライドを2日間で作るとするのはハードなことだと感じたが、リーダーの働きかけのもと意見共有することができ分科会のメンバー同士の交流がはかどったことが嬉しかった。
- ライフステージ、キャリアプランにおいて、国際協力と結び付けていかに「価値観を知ること・選択肢の多様性」が重要であるかを伝えることが難しかった。分科会のメンバーが共通して学んだことは、「選択肢はたくさんある」ということだった。恐れず挑戦し、自分の価値観と社会から求められることが一致したときキャリアを形成できるという点が上手く伝わっていたら良いと感じた。



分科会 C



異文化を繋ぎ、価値創造に展開する コーディネーター

岩井 俊宗 (いわい としむね)

認定NPO 法人とちぎユースサポーターズネットワーク 代表理事

略歴：

1982年生まれ。栃木県宇都宮市出身。2005年宇都宮大学国際学部卒業後、ボランティアコーディネーターとして宇都宮市民活動サポートセンター入職。NPO・ボランティア支援、個別SOSに従事。2008年より若者の成長機会創出と持続的に取り組む人材を輩出し、若者による社会づくりの加速を目的に、とちぎユースサポーターズネットワークを設立。2010年NPO法人化。代表理事を務める。その他、認定NPO法人宇都宮まちづくり市民工房理事、栃木県協働アドバイザー他、多数。

講義の概要

1. 仕事の概要

若者の力を活かして、地域の課題解決・活性化を加速することを使命とし、「若者の挑戦」と「新たな力・新たな変化を求める地域の現場」をつなぎ・育むプログラムの開発・コーディネート事業を実施。

【独自事業】実践型インターンシップ GENBA CHALLENGE(2012～)、ソーシャルグッドスタートアップキャンプ「iDEA→NEXT」(2012～)、ソーシャルビジネスセミナー(2014～)

【受託開発事業】宇都宮大学課題発見・解決型インターンシップ(2013～)、栃木県 UJI ターン促進事業「はじまりのローカルコンパス」(2015～)、宇都宮市起業家精神養成講座「起業の実際と理論」(2015～)、那須烏山市ローカルベンチャー育成事業(2016～)、栃木県地域づくり担い手育成事業(2016～)、宇都宮大学 宇都未来塾(2017～)、コカ・コーラジャパンボトラーズ CSR 事業「ミライ×キャンパス」(2017～)、栃木県創業プロデューサー事業(2019～2021)、栃木県グリーンツーリズムネットワーク組織づくり事業(2020～)、那須烏山市民話デジタル配信(アニメーション制作)事業(2020～2021)、とちぎデジタルハブコーディネート事業(2022～)、うつのみや未来創造プロジェクト(2022～)などまちの新たな事業開発実施や触媒機能を担う。

創設から16年、関わってきた20代～30代の若者は、52,734人(活動時間176,783時間)を超える。その内、自らの意志と力で課題に立ち向かう起業した若者が約80組輩出。また組織の次の一手を創り出す現場に若者が長期間参画する実践型インターンシップや行政施策のプログラム開発など、多様な組織に若者の力を取り入れた変化を提案・実施するプログラム開発と運営、それらを通じて化学反応として新たな価値を創出する「触媒」の機能を持ったコーディネート力は、他県からの講演依頼や『ソトコト』などの全国紙にも取り上げられることを踏まえ、高いものと自負している。これらの実績から、変化を創り出していくコーディネート事業に加え、若者と民間企業、また行政(国、県、市)、大学、をパートナーとし協働による事業推進をしていることが独自性であると捉えている。

<受賞歴> 中小企業庁表彰 創業機運醸成賞 (2018.2.9、全国22団体)、
下野新聞社「とちぎ次世代の力大賞」奨励賞(2018.5)
栃木県経済同友会「社会貢献活動賞」(2020年)
北村地方創生担当大臣視察(2020年) 等



2. キャリアパス

1982年宇都宮生まれ。4人兄弟(長男)、7人家族。幼少期は、ガキ大将。森に基地を創って遊ぶ。小学生の時は、サッカー、中学生はバスケットボールに打ち込む。当時の夢は、冒険家と医者。中学の時、生徒会長を務め、リーダー的役割を主体的に捉えるようになる。高校時は、JRC部(青少年赤十字)の活動にはまる。高2年の夏、赤十字派遣でネパールへ。3週間現地で井戸掘り、学校見学、献血事業視察。将来、“途上国で働く”ことを描き、現地の日本人の駐在員にどうしたらその仕事に就けるか手紙を書く。“大学生で世界の勉強してください。英語プラスもう1ヶ国語”のお手紙を頂き、大学に行く意味を見つけ、地元に行ける大学(宇都宮大学国際学部)へ入学。大学生(宇大国際学部、友松研究室)：NGOマネジメント、住民主導の開発を専攻。2年生くらいから国内問題にも目を向ける。特にNGO・NPOなどの市民による社会課題解決に可能性を感じるものの、職業として成り立っていない現状から“NPO・NGOで飯を食うモデルになる”と自分に旗を立てる。

2005年大学卒業後、ボランティアコーディネーターとして、NPO・ボランティアを支援する宇都宮市民活動サポートセンター入職。制度では支え切れないSOS(年間100件程度の相談)に、ボランティアチームを組み対応する。その中で大学生等若者が関わると突破できる数多い体験から、2008年若者の成長の機会創出と持続的に取り組む人材を輩出し若者による社会づくりの促進を目的にした事業を行うとちぎユースサポーターズネットワークを設立。2010年NPO法人化。現在代表理事を務める。

現在43歳、妻(国際学部同級生)16歳の高一息子、10歳の小4娘と4人暮らし。学生時代の趣味は、国内外を旅すること(屋久島、ママチャリで富士山・成田空港・レインボーブリッジ、アメリカ、韓国、マレーシア、シンガポール、ベトナム)。

3. 分科会の内容

- 「違い」を「強み」にしていくコミュニケーションにおいて、質問力、言葉の意図を読み解く力、建設的に意見を積み上げていく思考、相手のHAPPYを提案していく力を養う。
- 演習(ワークショップ)を通じて、異なる物事を組み合わせ新たな取り組みの育む思考とプロセスを体感する。加えて、その取り組みが誰の理想の状態に近づけるものなのかも考え、取り組みにおける「価値」の理解を深めていく。
 - ▶ コミュニケーションとは何か。
 - ▶ 人が喜びを感じるメカニズム、マズローの5つの欲求、ジョハリの窓など
 - ▶ アイデアを形にしていくプロセスと提案書の作り方アイデアを形にしていくプロセスと提案書の作り方

4. キーワードリスト

- コーディネート
- ファシリテーション
- 価値創造

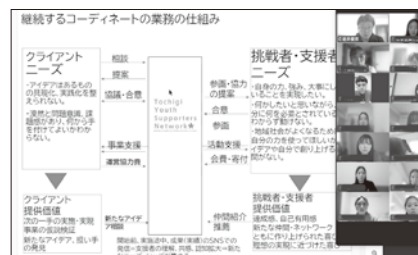
5. 参考資料

必須ではありませんが、以下をお読みいただけますと、よりスムーズな理解ができます。

- 早瀬昇/筒井のり子「ボランティアコーディネーション力第3版：市民の社会参加を支えるチカラボランティアコーディネーション力検定公式テキスト」2024年

6. 予習用リーディング課題

- 自身の自己紹介をご用意ください(氏名、所属、大学で学んでいること、分科会を選んだ理由、将来の展望、今回持ち帰りたいこと)



(アクションプラン)
異文化を繋ぎ、価値を創造するために、自分たちができること
 ■自分たちの願い、ありたい未来・社会

価値の押し付け合いがない、個性に寛容、違いを楽しめるみんなが自分の文化を誇れる

人がつながる、言葉の壁を乗り越え、心を通わせたい人が人として大切にされる

自己決定権がある情報の平等性

→ **誰も取り残さない社会**

異文化を繋ぎ、価値を創造するために、自分たちができること

■そのためにやっていくこと (自分たち以外の人でもできるようにするために)

地域全体でできること
 情報の提供、地域とのかかわり、相談しやすい福祉の充実、イベント(継続的な)
 回覧板での告知、学校での異文化交流

私たち一人一人ができること
 当たり前について考える、知ること、自分に余裕を作る

■誰が、誰に、何を(上記と重複)、いつ、どうやって、どのくらい、実施するのか
 小・中学校でのオンライン交流、体験型(食文化、ビアガーデン、生活様式など)
 3回くらい

企画の提案

ポットラックパーティー

- 参加対象 留学生、新しい友達を作りたい人(30~40名)
- 時間帯 平日夜(11月に一回目ができたら)
- 内容 留学生と一緒に自国の料理を持ち寄り交流する(一人一品持ち寄り)

※将来的には地域で暮らす外国人の方々、日本国籍住民も参加できるように、ごみの分別まで一緒にやる 飲酒可

- 場所 UUプラザ2階

● 実施までのプロセス 留学生に求めているか聞いてみる、場所を伝える、参加者募集のチラシを作る、広報する、会場準備する、当日楽しむ、写真・記録をとる、発信する。

異文化を繋ぎ、価値を創造するために、自分たちができること

■実施することで生み出したい価値 (HAPPYな変化の想定)

- 会社の人がつながれる
- 新しい出会いがある
- 生活の幅が広がる
- 異文化が知れる
- いろいろな料理が楽しめる
- 人と人に関われる
- 話し相手ができる

→ **生活の質の向上**

参加者のレポートより (コメントは原文のまま記載しています。)

- コーディネーターという新たなキャリアの発見。「異なることをつなぐ」ということの本質や意義、コミュニケーションにおいて重要なことを学ぶことができた。また話すことへの苦手意識は、別に話すこと自体が嫌いではないと気付いた。今後の課題として、苦手意識の払拭：常に積極的に意思表示できるように。相手に寄り添いながらコミュニケーションすること。コーディネーターについてより深く知ることを挙げる。
- 岩井先生の職業であるコーディネーターについて初めて知る機会となった。問題と願いの仲介であるこの仕事は、私が頭の中で浮かばせ希望していた将来の夢に関連していたため、本当に良いきっかけとなったと感じている。分科会では、抽象的な議題での意見交換を体験することができとても貴重な体験になった。自分の意見を表に出す行為に苦手意識がありとても勇気のいることであったが、事前に立てた目標が積極性であったため、沢山意見出しや反応をすることができた。私とは異なる意見も沢山あり新たな視点も得られたし、表現の仕方も学ぶことができたので今後活かしていきたい。
- コーディネーターのお話の中で、問題と課題の違いについて学んだ。普段問題ばかり重視しがちだが、相手はその問題よりもニーズに応じて欲しいと考えるため、そのニーズとのギャップ(=課題)を解決する必要がある。いつも「課題解決のために…」と考えてしまっていた自分を見直すきっかけになり、考え方を大きく変えることができた。
- 私たちのアクションプランとして「ポットラックパーティー」を通して外国人留学生の方と繋がり最終的には地域住民の人々とも繋がることで異文化交流の実現を図ろうという結論に至った。まだ具体性が増していない部分もあるが、このアクションプランを分科会のメンバーで実現したいと私は考えている。計画したことを実際に実行に移してみることで新しい気づきや視点をすることもできるのではないかと感じている。また、この経験を通して、実際に大学生としてできることもあるということを実感した。キャリアについて考えるきっかけにしていきたい。
- 分科会を通して、コーディネーターという職種にとっても興味を持ち、私も将来誰かのニーズに対して貢献できる人になりたいと思うようになった。コーディネーターはニーズに対してどのように解決していくかという柔軟な発想力が求められる。そのため、自分の常識に捉われない豊かなアイデアや相手の意見に応えられるような傾聴力が必要だ。これは、普段の生活や周囲の人々とのコミュニケーションを通じて養うことができるはずだ。日常的にコーディネーター的な存在になれるよう行動していきたい。
- とても充実した実りのある3日間だった。自分の中の大きな進歩の1つは、ディスカッションの進行役を務めたことで、このような経験は今までになく右往左往しながらの進行になってしまったが、出た意見から話を広げたり、皆が意見を言えるよう工夫してみたりと、最終的にとても活発なディスカ

ッションになったように思う。また、私自身も話す機会が多かったので、意見を述べることに臆することなく中間・全体発表でも積極的に担当し、貴重なチャンスを逃すことなくチャレンジすることができ、それが自信にも繋がった。そして、私たちの分科会では、アクションプランが現実的であったことも、ただ理想を語るだけでなく実践する運びに近づけたことで、自分の中での達成感の高さに繋がった。しかし、これに満足せず、企画したポットラックパーティーが本当に実現したらと良いと思う。収穫の多い時間であった。

- 初めて聞く人たちにもわかりやすいスライドを皆で作ることができた。異文化を繋ぐと聞くと非常に難しいことだと感じるがコーディネーターの仕事の役割があって欲しい未来が実現するという結論は何度聞いても素敵なことだと思う。グループ全体で沢山議論ができ、より発表を作ることができた。
- コーディネーターを知って得たこととしては、まず、このような地域と人をつなぐ職業があるということを知って驚いた。意外なものや人を組み合わせたり、「どうしたら良いんだろう...」と頭を悩ませるような依頼に寄り添ったり、様々な角度から問題解決につなげているのだと思った。相手のニーズを叶えるだけでなく本質的な願いを引き出すという何段階もレベルが高いことをやるには傾聴が必要であると知った。相手に話したいと思ってもらえるような聴き方を身に付けたい。
- 何らかの形で国際協力に関連したキャリアを築くことができるという考えで NGO の道が元々頭にあったが、「今回、NPO の中でもコーディネーターの職やその役割を知り新たな選択肢が増えたと思う。国際協力に関するキャリアは様々だと感じたので積極的に調べたり、興味を持った機関や人に聞くというアクションも取ったりして今後の可能性を広げていきたい。
- 分科会で学んだ、真のニーズを見つけるための複数の視点や考え方、そして、コミュニケーションスキルは普段からの意識や実践によって身に付くものだと思うので、これから実行していきたい。岩井講師が、学生時代に、当時から興味があった NPO 事務所に赴いていたと仰っていたので、自分も興味のあるイベント等に参加し、将来の道を広げていきたい。
- まずはコーディネーターという新し職業について学べた。初めは、人をつなぎ、異文化をつなぎ、「価値」を創造するということがよく分かっていなかったが、皆で話し合い、自分の成長材料を増やすこと、人数に関係なくコミュニティ内で納得できること、HAPPY な気持ちの変化を起こすことなど、様々な意見に出会うことができた。アクティブに話し合いができたことは良い刺激になったし、プランの中で出たポットラックパーティーも実践してみたい。また、課題解決には相手が本当に求めていることは何かを掴む必要があると学んだ。そのための共感や傾聴を意識していきたい。「共有→共感から協働へ」を忘れないようにしたい。
- 分科会では、コーディネーターの仕事について学ぶのと同時に、自分たちで企画することで、その仕事の一部を実際に体験することができました。その中で、相手のニーズを理解しながら何かをするときは、相手のニーズが必ずしも自分が考えるものと一致するわけではないことを念頭に置くことを学びました。これは今後何か問題を解決する時、とても重要な考え方となってくると思うので、身に付けられるよう、授業などでも実践的に活用していきたいと思います。
- 将来の目標や道筋に大きな変化はないが、新たな選択肢に NPO 法人とコーディネーターという職業が加わった。分科会で岩井講師の NPO についてのお話を聞き、企業との違いを筆頭に NPO とは何以下について知ることができたことや岩井講師自身が仕事と育児を両立している姿や地元をいながら国際キャリアを経験している姿を見たことで魅力を感じたからである。また、岩井講師が自身で NPO を立ち上げたことを知り、驚きを覚えたことに加え、自身の性格的に自分で決めて好きなことを行うことができることが自分に向いていると感じたことも要因の1つである。



分科会 D



「共感」から考える多文化共生

梁 鎮輝 (りょう ちんき)

宇都宮大学 国際学部 助教

略 歴：

宇都宮大学国際学研究科にて博士（国際学）を取得。明德義塾中学・高等学校教諭を経て2024年より現職。専門は日中比較思想史研究で、150年ぐらい前の人々は何を考え、どのような社会を目指していたのかを読み解こうとしている。

🌐 講義の概要

1. 仕事の概要・研究のテーマ

宇都宮大学国際学部で主に中国語や中国文化などの授業を担当しています。研究は日中の近代文学者や知識人を取り上げ、東アジア思想交流の実態を明らかにしようとしています。国際化・グローバル化が叫ばれる現在の状況と同様に、彼・彼女たちは国境を越えて近代化に伴う諸課題に対して深い苦悩を共有しつつ、各自の理想とする社会への構築を目指していました。ある国や地域への知見を深めつつ、学生たちと共に「知の越境」という視点に基づいて日々勉強しています。



2. キャリアパス

【広州時代】『クレヨンしんちゃん』と中島みゆきが好きだという理由から高校では日本語コースを選択。しかし、半年かかってもひらがな・カタカナすら覚えきれず挫折していた。日本語を嫌いになりかけながらも学習をなんとか続けた。

【千葉時代】2010年に来日。成田空港に着いて、都会の空気を感じる暇もなく、送迎の車に連れられて鴨川という、当時の私のイメージした「日本」とはかけ離れている場所に到着した。大学生活が始まった半年後に3.11東日本大地震、福島第一原子力発電所事故が相次ぎ発生し、一時帰国を余儀なくされた。その二カ月後に日本に戻り、ボランティアとして震災地を訪ねた。

【栃木時代 1.0】大学卒業を目前に、進学を頭の片隅に置きながら就職活動を進めていた。最終面接まで進んだ企業に落とされ、在留資格のタイムリミットに迫られ、急遽進学することへ舵を切った。その時、まさかこれから大学で修士・博士課程を合わせて7年間を過ごすことになると思わなかった。博士3年目に本格的に博士論文をまとめようと思った矢先に、コロナ禍、父の病気などにより学業に専念できない日々が続いていた。

【高知時代】コロナが明け、家庭の状況も落ち着いてきた頃、運よく高知県にある明德義塾高等学校への就職が決まった。職場は想像以上に辺鄙な場所にあり、生活上の様々な不便を感じながらも、山と海の絶景そして明るくてパワフルな高校生たちに癒され、いつのまにか高知を好きになった。植木枝盛の言葉「自由ハ土佐ノ山間ヨリ発シタリ」にあるように、厳しい環境だからこそ高知は自由民権運動発祥の地となり得たのだと身をもって感じた。仕事をしながら、なんとか博士論文の提出もできた。そうこうするうちに

30代を迎え、何か新しいチャレンジと思い、マラソンの練習を始めた。高知龍馬マラソンに出場し、なんとかボロボロになりながら走り切ることができた。

【栃木時代 2.0】大学への転職活動がかなり難航している中、母校である宇都宮大学で教える機会をいただき、古巣へ舞い戻った。授業や学内業務をこなしながら、落ち着いて自身の研究ができる道を模索中。気晴らしにマラソン練習を続け、次の目標は宇都宮マラソン大会。

3. 分科会の内容

分科会では、まず現代における多文化共生の目指す意義を確認しつつ、視点を過去へと向け、新しいヒントへの発見につなげたいと考えています。ネット上に散見する在日外国人を排除する言動は、一部の人間の行為と主張に限定してしまえば話はそこまでですが、ただわれわれは流言蜚語が無限に膨張し、関東大震災朝鮮人虐殺事件のような大きな悲劇を生んだ血の歴史を忘れてはいけません。

そのような過ちは、日本だけでなく、すべての国そしていつの時代でも起りうることです。歴史が教える「排除」の愚かさを認識し、一個人として無数な見知らぬ他者の人生を真摯に想像し、彼・彼女たちと苦しみや喜びを共有していくことが多文化共生社会の実現の第一歩となると考えています。その「共感力」をどのようにして培うことができるのか、皆さんの日常的な経験から考えていきたいです。

4. キーワードリスト

- 共感力
- 越境文化（文化の越境）
- 他者性
- 文学的想像力
- オーラルヒストリー
- ライフストーリー



5. 参考資料等

<書籍>

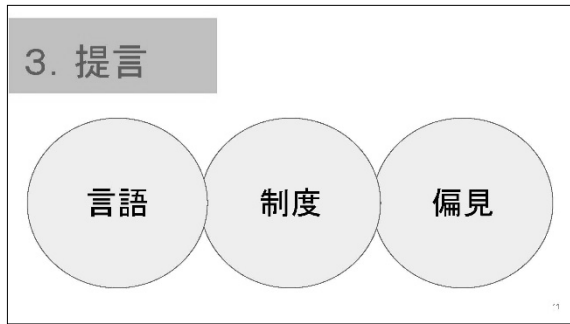
- 李琴峰『日本語からの祝福、日本語への祝福』朝日新聞出版、2025年
 三浦英之『涙にも国籍はあるのでしょうか』新潮社、2024年
 丹野清人『「外国人の人権」の社会学』吉田書店、2023年
 温又柔『私のものではない国で』中央公論新社、2023年
 月刊イオ編集部『日本の中の外国人学校』明石書店、2022年
 温又柔『台湾生まれ 日本語育ち』白水社、2018年
 田中宏『在日外国人：法の壁・心の溝』岩波書店、2013年
 リービ英雄『我的日本語』筑摩選書、2010年

<映画・ドキュメンタリー>

- 『港に灯がともる』（2025年）、『在日ブラジル人弁護士が見たニッポン』（2023年）、『福田村事件』（2023年）、『鬼が笑う』（2022年）、『マイスマールランド』（2022年）、『ファミリア』（2022年）、『ワタシタチハニンゲンだ』（2022年）、『僕の帰る場所』（2021年）、『WHOLE/ホール』（2021年）、『海辺の彼女たち』（2020年）、『take a picture/あるベトナム人留学生の物語』（2017年）、『あなたを忘れない』（2007年）、『I am 日本人』（2006年）

6. 事前予習用リーディング課題

在日外国人を描く様々なコンテンツ（ノンフィクション・フィクション問わず）を手掛かりに、「外国人として日本で生きること」について自由に想像してみてください。そして自身の思ったことをなるべく丁寧に言語化し、分科会の際に語ってもらいます。



言語・コミュニケーション

★言語の壁への対応
 ■ 日本語が分かるのが当然だと突き放す
 ○ 受け入れる側から理解してもらえるような言葉を使う

その他ネットでも生活情報を検索言語で得ることが可能
 例：「Life in Utsunomiya(チラシ)」
 ② Living Information in Utsunomiya(Facebookアカウント)

★日本人と外国人の相互理解のために
 ・活動を行っている団体紹介
 ・宇都宮市国際交流協会(UJIA)
 例：国際交流サロン 毎月第1土曜日の午後4時から6時
 うつのみや夜夢通入クエス知国際交流プラザ

現行制度の発信

制度：生活や就労、その他 法的な問題が発生した際、容易に情報へアクセスできる様に サービス、支援団体をまとめたパンフレットやデータを これを希望する外国人に対して交付する。

← 日本に暮らす全ての外国人、そして日本人にもこれを配るべき！
 例えばオンボーディング(研修)時に、全てのメンバーに配布など

Formal onboarding programs & practices — systematic review: Effectiveness of formal onboarding for facilitating organizational socialization (Frigoli, Bo-Janner, Peter Gustavsson et al., RuG Osn, 2020)

偏見をなくすには

国籍・名前・服装・職業という表面的な肩書きで判断し、「外国人」としてカテゴライズ

→「ひとりひとり」の人間として 捉え、深く知る姿勢を持つこと から始める

総まとめ

ポイント
 共感力・相手の気持ちを想像し、共に考える

- ・言語・コミュニケーション
 受け入れる側から理解してもらえるような言葉を使う
- ・制度
 全ての人が援助制度にアクセスしやすい状況をつくる
- ・偏見
 「ひとりひとり」として捉え、知る姿勢を持つ

参加者のレポートより

(コメントは原文のまま記載しています。)

- 自分に足りないものは沢山あると感じていたが、このセミナーでは、自分を見つめ直す機会をいただけたと感じている。特に分科会では、「共感力」の重要性を学ぶことができた。他者を外国人として捉えるのではなく一人一人の人間として尊重しようとする姿勢が多文化共生世界を築く基盤となることを強く意識させられた。今後は学びを知識として留めず、行動へ繋げて行きたいと考える。現状などを理解するだけでなく、地域の国際交流活動などに加わり、自分の生活の中で多文化共生を実践していきたい。
- 分科会にて在留外国人の日本での生きづらさについて知ることができ、海外での国際協力だけでなく国内での支援も必要なのだと感じた。自分の考えを伝える時にもう少し明確に伝えるべきだったと反省した。他者との議論を通して自分が持っている偏見や自分には気づかなかった点などに気づかされることもあり、自分の考え方を見つめ直すきっかけになった。
- 分科会を通して、在留外国人が抱える生きづらさや苦労を学ぶことができた。今まで自分の考えが及ばないようなところでの困難を知り、彼ら一人一人にフォーカスした取り組みができたなら良いと考えたからだ。また、自分の価値観や軸となっているものを意識したキャリアをもっと考えていかなければならないと感じた。
- 今回のキャリア教育では、少しでも自分の将来像を明確にしたいという思いで参加したが、その目的は達成できなかった。けれども、将来を考える上での視野は広がったと思う。自分が見落としていた在留外国人への支援など国内でもできることも沢山あると感じた。今後はそういった部分も視野に入れて考えていきたい。
- 他の分科会と比較すると提言までの流れが異なっており、セミナーの事前学習で各自が感じた課題点と事例を見つめ今後どのようにして個人を大切に社会にしていけるかを提言として述べるという流れだった。そのため、うまくまとまるのか不安はあったが、話し合いを重ね相互理解と意思疎通を徹底的に行ったことにより全員が納得して発表に纏めることができ良かったと思う。
- 自分はマイノリティ経験が圧倒的に少ないため、日本にいる外国人や外国にルーツを持つ人を始めとする様々なマイノリティに位置する人に心無い発言をしてきたかもしれないし、これからも意図せず

るかもしれない。そんな事態を防いだり、その後カバーできるようにしたりするために、今回の実習で学んだことを活かしていきたいと思う。これは、今後どのキャリアを選んでも必要になる心構えでありスキルだと考えるため常に意識して過ごし自分の強みにしていきたいと思う。

- 分科会では、日本に住む外国人の立場を考えその壁のために私たちはどんなことができるかを話し合いました。中でも、「外国人」としてカテゴライズするのではなく、ひとりひとりとして個人をみるというのは、当たり前だと思えて実際にはできていない気がしました。これからの行動に活かしていきたいと感じました。
- きっかけ自体は存在しそこと自分自身とのつながりも確かにある。問題は、「つながり」へのアクセスの手法を知らないケースが（私を含め）往々としてあるという事である。以上のことを我々は提言に盛り込めないか考えた。不当な扱いを受ける外国人労働者を支援するサービスや団体自体は存在する。しかし日本語能力が不足しかつ日々の労働で疲労している彼らが主体的にそれらのサービスを検索し助けを求めに行くことは非常に困難なことでありと予想できる。分科会では、サービスをまとめたパンフレットの配布を徹底するという提言を述べた。さて、将来のキャリア形成にこれをどう活かすか考える。
- 分科会に関して、今まで自分達が在留外国人の問題について考えるときには制度に着目しがちだったが、今回は制度だけでなく、受け入れる側の私たちの彼らに対するコミュニケーションや一人の人間として見るなどの姿勢を特に重視して考える機会だった。「外国人」というカテゴリーで彼らを見る人がまだ多くいる状況で今回の結論として個人的に最も重要だと考える「知る」そして「知ってもらう」ということを、提言で出したものなどを基に実践していけたら良いと思う。
- 分科会の議論のテーマにもある「共感力」を基に多文化共生について考えることができた。特に自身が行き組んだ「言語・コミュニケーションの壁」について「受け入れる側である私たち日本人が彼らに理解してもらえるような言葉選びをする」という提言をし、実際今後大学だけでなく社会に出たときにも行っていくべきことであると思ったので意識して取り組んでいきたい。
- 「共感」という観点から多文化共生について課題や改善点、今後行っていくべきことなどを考え、更に理解を深めることができた。また、講師の先生方のお話やグループディスカッションなどの参加者との議論を通して、自分には思いつかなかった考えや意見に多く触れることができ、知見を更に広げることができた。
- 在日外国人がおかれている状況を知り具体的な提言を考案：今まで SNS 上の他人事のように感じていた外国人労働者の生活と排外意識の過激化を自分事として捉えられるようになった。また、学生にも実行しやすいように纏めた提言は自分にも実行しやすくなっており、今後どうすればよいか示してくれるものとなった。
- 改めて全体発表をしてみると、とても良い内容で考え新しい視点で学びを深めることができたのではないかと考える。また、資料作成にあたって、年齢、学部、国籍が違う方と議論する楽しさを感じることができた。「他の人に興味をもつことが大切」だということを忘れずにキャリアを積んでいきたい。
- 分科会のテーマ「共感力」や「ひとりひとり」に注目して現在日本にいる外国人が直面する問題について考えた。彼らが抱える問題は多く多様で、理不尽な理由から引き起こされているものもしばしば見られた。状況を問題視し打開しなければと考えたのは、分科会のメンバーも同じで、共感力は誰しも備わっている可能性が高く協力への足掛かりにできると学んだ。打開のために何をすればよいかの議論に躓いたが、外国人として一括りにするのではなく、その人個人個人のケースを考えることで自然と対応策が浮かんだり思いやりを持った行動ができたりすることも学んだ。ディスカッションの際には、共感や納得、相手の意見を踏まえて議論を進めることで、意見の出やすい空間にできることも学んだ。



分科会 E



英語が苦手でも英語で国際交流・国際協力 していこう

吉田 一彦（よしだ かずひこ）

宇都宮大学国際学部 教授、国際キャリア教育運営委員会委員長

略 歴：

全体講義講師プロフィール参照。

講義の概要

1. 仕事の内容・研究のテーマ

一般言語学と外国語教育学を専門とする宇都宮大学国際学部の教員です。専門研究において強い関心を持っているのは多言語コミュニケーションで、パキスタン、マレーシア北部、セネガル、キルギス、アイルランド、ベルギー、フィリピン北部、スリランカなどの多言語使用地域で調査をしてきました。英語による教育と取り組んでおり、授業の半分は英語でしています。23年の教師生活の間に15を超える国出身の学生を自分の研究室に受け入れ、論文指導をしてきました。それから、約15年間、政府の国際ボランティア、JICA 海外協力隊（日本語教育）の選考や研修や活動サポートの仕事をしています。世界が、そして、人間が私たちの想像を超えて多様であることを知り、それに驚かされ続けていられることが、私の仕事のおもしろさであり、意義でもあります。



2. キャリアパス

18歳のとき、自分の仕事のための専門分野として法律学を熱心に学び始めましたが、学べば学ぶほど社会正義の概念が自分の中で曖昧なものになっていき、それとともに、法律が何通りにも解釈できる言葉として書かれているのが気になり、言葉自体に関心を持つようになりました。法律学の勉強を止めたので、大学はぎりぎり卒業したものの、何の得意分野もない20代半ばの自分には将来の展望など見出せませんでした。そして、言葉に対する関心が高まりつつも、人付き合いで言葉で誤解を受けたためコミュ障になったとき、自分が唯一日本語しかできず、世界のほとんどの人と話が通じないことに我慢がなくなり、外国語を学ぶために国を出ることに決めました。

そんなとき読んでいたフランスの冒険小説（ル・クレジオ『逃亡の書』）に見つけたのが「風景をむさぼる、それこそぼくに必要なことだ」という言葉です。その一節に背中を押されて留学したのが、私を知る人が誰もいない南フランスのモンペリエ、幸運にもその当時で140の国籍の人が住むと言われた超国際都市でした。そこで過ごした10か月の間に、30か40ほどの異なる国出身の人々と付き合い、今も使い続けているフランス語を身につけたほか、今の専門につながる言語学の勉強も始めました。帰国の翌年に、言語学専攻に学士入学し、大学院に進学してからは、略歴にあるとおりです。

英語については、フランス留学中に母語話者の友人たちと出会い、話し相手と先生を同時に得たことが自分を大きく変えました。これまでで最も速く上達できたのは間違いなく50代。60代にはもっと上達しとやろうと企んでいます。

3. 分科会の内容

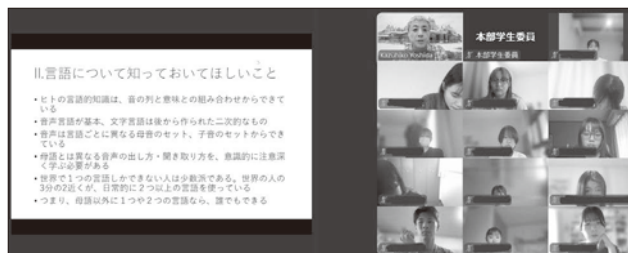
分科会は日本語で話しながら進めます。参加する皆さんの現時点で英語を話すことによってできること、そして、英語でやってみたいコミュニケーションがどんなものかの確認から始め、国際交流や国際協力の場で役立つコミュニケーションの仕方を共に考えます。身につけることにした英語表現を声を出して練習したあと、英語によるコミュニケーションのシミュレーションを繰り返し、それに対して講師からフィードバックしていきます。

最後の発表は、分科会の活動によってできるようになったことと、分科会での学びを終えた自分のアクションプラン（つまり、セミナーを終えた自分は次に何をするのか）を中心に話してもらおうと考えています。

進め方の詳細については、分科会のメンバーが決定してから、その人の既存の知識や技能、希望に応じて決めたいと思います。

4. キーワードリスト

- 共通語と標準語
- CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）
- 第一言語（Language 1）と第二言語（Language 2）



5. 参考資料等

塚本 亮（2021）『ネイティブなら12歳までに覚える80パターンで英語が止まらない！』高橋書店
 中井 俊樹（編集）(2009)『大学生のための教室英語表現300』アルク
 吉田 一彦（2024）「信頼を築くための共通語の決め方」宇都宮大学国際学部（編）『国際学への扉を開く』下野新聞新書

6. 事前予習用リーディング課題

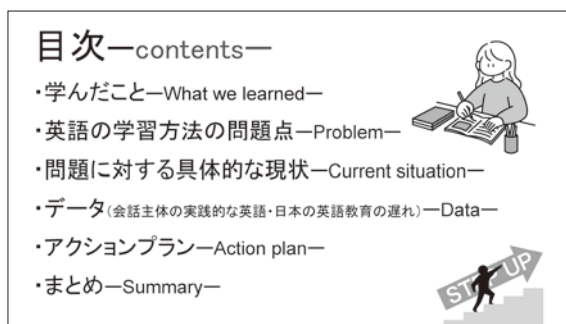
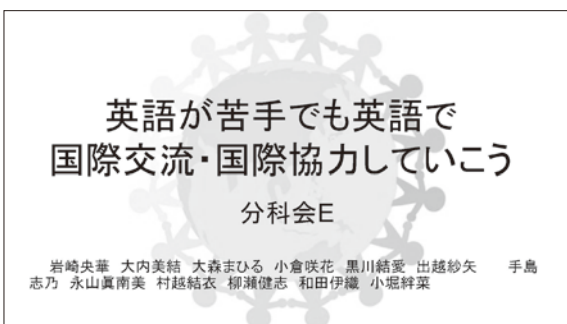
セミナー当日までに、以下の図書の中から1冊選んで、通読しておいてください。そして、分科会で選んだ本がどのように自分に役立ったかを簡潔に報告してください。本によっては貸し出せるものがありますので、借りたい人は、7月23日の事前指導のときに講師に直接相談してください。

岡本 浩一(2002)『最強の英語上達法』PHP 新書
 塩田 勉(2001)『おじさん、語学する』集英社新書
 竹内 理(2007)『「達人」の英語学習法』草思社
 白井 恭弘(2008)『外国語学習の科学 第二言語習得論とは何か』岩波新書
 白井 恭弘(2025)『新版 外国語学習に成功する人、しない人——第二言語習得論への招待』岩波科学ライブラリー

リーディングではないもう1つの課題：

英語で話してみたい人物を1人決め、自分のことをその人が覚えてくれるような1分程度の英語の自己紹介を用意してください。自己紹介する相手の人物は、実在の人物でも、想像上の人物でも、歴史上の人物でもかまいません。「ガザから救出された孤児」のような特定のタイプの人に対して、というのでもかまいません。

参加者による全体発表



英語が苦手でも国際交流・協力するには

国際交流において必要不可欠な物 ⇒ **語学を適切に運用する力**
 世界における共通言語 ⇒ **英語**

英語が苦手になる原因として考えられる4国際交流・協力の第一歩である
 英語学習法や教育を見直す

↓

根本的に英語が苦手だと感じる人を減らし、国際交流・協力への関心を高める

学んだこと 英語の学習方法について
—What we learned—

- ・音声での言語学習が効率的 won(winの過去形)
one
- ⇒ 歴史的にも **文法 < 音声** → どちらもAWAと発音される

発音の仕組みが分かって初めて綴りが分かり、聞き取れる。

- ・英語の必要性が感じられる環境を見つける。友人をつくる。積極的に話す。
- ・何か**明確な目的**を持つことでモチベーションにつながる
- ・周りを気にせず**実力を発揮**できる場が重要

学んだこと 日本の英語教育について
—What we learned—

- ・日本の英語教育では、生徒たちにアウトプットの機会が与えられていない→インプットがメイン
- ・外国語を知っているだけで、使えたと錯覚してしまう。
 →spontaneously(言いたいことが口を衝いて出てくるような能力)を身に着けることが必要。
- ・発音の教育を重視している人は少ない(読み書きが優先)
 →正しい発音が分からないため、実際の会話で使えなかったり、自信がなかったりする。

英語の学習方法 / 英語教育の問題点 — Problem—

知識量重視で実用性や楽しさが乏しく、
 アウトプットの機会が不足し
 効果的な学習が習慣になっていない。

なぜ解決すべき？


- ・正しい発音で正しくコミュニケーションをするため！
- ・アウトプットの機会がないと、「聞いてわかる」「話せる」という経験ができないから。

なぜ最初のうちに発音を勉強すべき？

一番大切！

- ・音声として頭に残るため、リスニングだけでなく、リーディング・ワーキングにも効果的。
- ・グローバル化社会に適応しやすくするため。

問題に対する具体的な現状
—Current situation—



- ・学校では「英語を話す」のではなく、英単語や英文を書いて覚えることが多い
- ・受験において**語彙力と読解力**が重視されている
- ・ネイティブの人と話す機会が少なく、国際交流の機会がない
 (アウトプットができていない)
- ・実践的な語学力を身につけることは個々に委ねられている
 (留学に行く、語学の専門学校に通うなど)
- ・日本では英語の必要性や、英語を学ぶことの**大切さ・楽しさ**が感じにくい

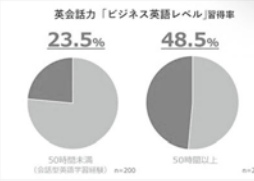
データ —Data—

旧帝大卒業者のうち、ビジネス英語を話せると自信を持つ人は約11%
 また、200時間の勉強時間のうち、会話主体学習の時間が50時間以上の人と50時間未満の人で英語習得率に2倍以上の差が出る。

「気づきの機能:学習者はアウトプットの機会に、自分の言いたいことと言えることの間にあるギャップに気づき、そのことが新しい知識を得たり、すでに得ていた知識を強化するきっかけになる。」※1

引用文献
 英語学習の『スピーキング学習』は3170時間のうち1%以下
https://lptimes.jp/main/html/vol000000132_000015102.html?utm_source=chatgpt
 ※1「言語習得におけるインプットとアウトプットの果たす役割—単語の習得調査の分析から— 横山紀子」
<https://www.ait.ac.jp/department/234113019.pdf>

旧帝大卒業者のうち「ビジネス英語を自信を持って話せる」




英会話力「ビジネス英語レベル」習得率

23.5% (50時間未満) n=100
 48.5% (50時間以上) n=200

→ **会話主体の実践的な英語の方が習得しやすい可能性**


現在、日本の英語教育は遅れていると感じますか？



● 遅れている 36.6%
 ● 遅れていない 24.6%
 ● どちらとも言いえない 23.8%
 ● あまり遅れていない 1.8%
 ● 遅くない 13.8%

日本人が感じている英語教育の遅れ

日本の英語教育の遅れの原因は何だと思いますか？



● 授業内容の遅れ 36.2%
 ● 授業時間の不足 14.2%
 ● 先生不足(授業) 14.2%
 ● 社会環境 14.2%
 ● 教材(本や辞書)の不足 14.2%
 ● その他(授業形式) 14.2%
 ● 不明 14.2%

※参考文献: 日本の英語教育、6割が遅れを指摘...、学校内外に問題あり <https://rease.com.jp/article/2023-01/19/002728.html>

読解力自体は悪くない
→なぜ日本の英語力は上がらない

平成29年度の高校3年生のCEFRのA2レベル以上の割合が「聞くこと(33.6%)」「話すこと(12.9%)」「読むこと(33.5%)」「書くこと(19.7%)」

👉 日本の英語学習は読解力、インプットに偏っていて、アウトプットや実用経験が不足しているため、総合的な英語力が伸びない。

※2023年度英語力調査結果(高校3年生)の集計

アクションプラン1 — Action plan—

英会話を積極的にを行い、実践的なアウトプットの機会を見つける！！

具体的には...

- ・ロールプレイやディスカッション、ディベートを取り入れる。
- ・英語でボードゲームをする。
- ・設定言語を英語にする。

👉 **楽しく英語を使うことで英語をより効率的に覚えられます！**
 → 日常から使うことを心がけ、楽しんで英語に触れる環境を作る。

アクションプラン2 — Action plan—

言語学習の意欲(モチベーション)を高める！

具体的には...

- ・学習対象言語を話す人や文化に興味を持ってみる
 (ポップカルチャー、好きなアイドルや芸能人の話す言語、観光地、歴史など)
- ・洋楽や映画のお気に入りの台詞やフレーズを調べてみる
- ・国際交流・協力を目的にする

👉 **学習対象の言語、慣習、歴史への興味や外国語学習の高い動機や学習効果をもたらす人と話すための英語を使えるようになる**

まとめ —Summary—

英語が苦手でも英語で国際交流・国際協力をするために:

・Have clear motivation

はっきりとした動機を持つ

・Be talkative

ためらわず話しよう

・Pay enough attention to grammar for better communication

徐々に文法も意識しよう



参加者のレポートより

(コメントは原文のまま記載しています。)

英語学習を見直すには、日本の英語教育の仕方を改めて考え直す必要があるのだと分かった。そして、その学習方法を変えただけでは英語力向上には繋がらない。当然勉強する本人の動機も重要となる。そこで失敗を恐れずに積極的に英会話を行うことで外国人の人と楽しくコミュニケーションを取り、自分自身も楽しく英語を学んでいきたいと思う。最終的には就職後に会社で海外の人と交流する際に英語が使えるようになりたいと思った。

- 分科会を通して、国際交流・協力において語学習得に向き合わなければならないと強く感じた。今回の活動を通じて、言語習得へのハードルは大きく下がった。まず事前課題の本を読み、これまで単語や文法を多く覚えることばかりに意識が向き、学習方法そのものを考えていなかったため、勉強法の重要性を知った。初めて知る内容ばかりだったがどれも納得でき、従来の学習方法とは大きく異なると感じた。分科会では、勉強法そのものよりモチベーション維持の方法に議論が進んだ。私自身これまで英語学習を避けてきたが、話し合いで「これなら実践できる」と思える方法が多く見付き、資料作成・発表を通して理解がさらに深まった。
- 分科会の講義を聴いたり、事前課題の本を読んだりする中で英語や他言語を学ぶ方法や意味・意義について知ることができた。日本の英語教育ではどうしても高校入試や大学入試のための勉強になってしまいがちだが、人とコミュニケーションをとったり自分の将来の選択肢を広げたりするために好奇心や興味関心を持ちながら楽しく学ぶことが重要であると考えたため、英語のゲームをしたりアニメや英語を観たりするなど工夫をして英語を学んでいきたい。
- 最終発表を経て、国際交流・国際協力の必要性についても示すとより良かったのではと考えた。どのようにすれば国際交流・国際協力につながるコミュニケーションというものができるようになるのか。それについて、学習方法を軸として考えることができ良かった。今回、日本人以外の方も受講していたが、日本人に向けた発表になっていたとの指摘を受け、受講者全体のことを考えた発表という視点が必要であったと考えた。
- 私は来年留学を考えていて、将来的には海外赴任のある商社等の日本企業か外資系の企業で外国人と日常的にコミュニケーション取るような環境で働きたいと考えている。そのために単語や英文法のインプット学習を継続的にしていますが、今回のセミナーでスピーキング・ライティング等のアウトプットの重要性、また、そのアウトプットも日常化することが大切だと学んだ。アウトプットを日常化するために、積極的に英語を使うための具体案としては、宇都宮大学の EPUU ラーニングコモンズに短時間の英会話コミュニケーションができる Drop in Chat という催しが毎日あるので定期的に参加して会話の機会として自分の糧にしたいと考えている。
- セミナーの目標の 1 つとしていた英語学習のモチベーションは格段にあがったように感じる。英語は話せるようになりたいが学習のモチベーションがあまりなく続けることができなままでいたので、「楽しくアウトプットする」ということや「音声を使ったインプット」をすることでよりモチベーションも向上継続できると考える。
- JICA 職員になって発展途上国を支援したいという漠然とした目標はあるが、具体的に何をしたいかは決まっていない。また英語が苦手な自信を持っていないのが現状である。今回の分科会で学んだ英語の勉強法を実践し、履修しているスペイン語も音声中心に学び、将来のキャリアに活かせる程度まで上達させたい。話せる言語を増やすことで自分の可能性を広げ、「何をしたいか」「何ができるか」を探る手がかりにしたいと考えている。日本人だけでなく海外の人々とも関わられるようになれば、さらに視野を広げられる。こうした観点からも、言語学習は自分のキャリア形成に大きく関わると考えており、今後の学習に一層力を入れていきたい。



分科会 F



多様な集団で交流する能力を身に着けよう

林 明夫（はやし あきお）

株式会社開倫塾 代表取締役

略 歴：

栃木県立足利高校、慶應義塾大学法学部法律学科卒業。大学卒業後、慶應義塾大学法学部司法研究室生。29歳の時、栃木県足利市で開倫塾を創業。塾長に就任、今日に至る。

世界銀行研究所、ハーバード大学行政大学院国際開発研究所、国立シンガポール大学大学院などで、公共部門の民営化短期集中コースを修了。マニー株式会社（手術用縫合新製造）社外取締役（2004年～2010年）、栃木県教育委員会栃木県社会教育委員（2004年～2012年）、公益社団法人経済同友会（東京）幹事（2004年～2023年）。

現在は、開倫塾日本語学校理事長・校長。開倫ユネスコ協会会長。学校法人有朋学園有朋高等学院理事長（福島市）。公益社団法人栃木県経済同友会理事。公益財団法人文字活字文化推進機構評議員。足利商工会議所議員、足利5S学校役員。日本商工会議所多様な人材（女性・障害者・シニア・外国出身者）活躍推進専門部会委員。一般社団法人栃木県生産性本部会長。

🌐 講義の概要

1. 仕事の内容・研究テーマ

小学生・中学生・高校生対象の学習塾を、栃木県全域、群馬県東毛地区、茨城県西部地区、東京都川の手地区で1979年から展開。開倫塾の教育目標は「自己学習能力の育成」。塾生である間に、「効果の上がる学習方法」を身に着けること、「学び方を学ぶ」を身に着けることを目指します。開倫塾の先生方は、みな教育熱心。自分なりの「教え方日本一」、「塾生の成功の実現」、「地域の教育力向上」をめざします。開倫ユネスコ協会の活動を、各校舎でも熱心に行っております。



開倫塾日本語学校は2018年に栃木県足利市に設立。現在80名の留学生と、20名位の地域に住む外国出身の聴講生、企業で働く外国出身の皆様での企業内日本語教育を数社で展開。先生方は、皆、親切で教育熱心。開倫塾日本語学校では、日本語の学習に加え、地域の伝統文化に親しむこと、日本での仕事に役立つ、「5S（ごえす）」、「Sではじまる5つのことば」つまり、「整理（いらぬものを捨てる）、清掃（きれいに掃除）、整頓（ものは同じところに置く）、清潔（それらを継続）、躰（自分から進んで行く）」も、少しずつ指導しています。開倫塾日本語学校では、開倫塾の先生方有志が2001年に設立した「開倫ユネスコ協会」の活動を、留学生の皆様とともにしているユニークな日本語学校です。

2. キャリアパス

「入社前（創業前）」

高校生の頃から学習塾の先生のお手伝いをしていたことがきっかけで、大学生の時には、都内の学習塾で時間講師、大学卒業後は、大学受験予備校で講師、時間講師を頼まれた足利市内の学習塾では、教室長を経験。創業直前には、足利市内を中心に、小学生から大学受験生まで、毎日のように家庭教師をさせていただいておりました。

「開倫塾創業後」

塾長として、小学生から大学受験生まで文型科目を中心に指導。同時に、学習塾の経営について学ぶために、学習塾の同業者団体に加盟し、ほぼ毎週のように全国の学習塾を視察。

「開倫塾日本語学校設立前後」

20年にわたり幹事を務めた、公益社団法人経済同友会（東京）アフリカ委員会などで、日本語教育の重要性を認識。さらには、議員を務める足利商工会議所の代表として参加している、日本商工会議所多様な人材活躍推進専門部会では、外国人材活躍推進に関連し、技能実習制度の廃止と育成就労制度及び特定技能制度の設立推進を政府に提言、詳細な制度設計の議論を、毎月のように重ねています。

「平和運動」を展開する「開倫ユネスコ協会」での、教育・科学文化・情報の推進活動、一般社団法人栃木県生産性本部での生産性向上運動や経営品質向上活動、経済の持続的発展を議論する「公益社団法人経済同友会（東京）」「公益社団法人栃木県経済同友会」「群馬経済同友会」「栃木県経営者協会」「足利商工会議所」など様々な経済団体での調査研究・政策提言活動、異業種交流活動は極めて有益です。

3. 分科会の内容

異文化理解教育の前提は、現代社会は「グローバル社会」であるという、基本認識です。グローバル社会で求められる能力は「多様な集団で交流する能力」と考えます。言語・宗教・文化・伝統・生活様式・教育・国籍などが異なった人々と、どううまくやっていくかが最大課題です。相手の立場を尊重するとは何か。どのような基本的態度で、相手の立場を尊重したらよいか。「関係は本質に先立つか」という、異文化理解方法論の基本命題をご一緒に考えてまいりましょう。「エポケー演習」も取り入れてまいります。

開倫塾日本語学校の教育内容や、「5S活動」「ユネスコ活動」などもご紹介、外国出身の皆様との共生社会の実現の方策も議論したく存じます。

講師が社外取締役を務めた栃木県が誇る国際中堅企業マニー株式会社の経営戦略についても2008年「ポーター賞」受賞理由書を用いてご説明。リスクマネジメントについては、毎年、1月初旬に発表される世界的な地政学のシンクタンク・ユーラシアグループ「2024、2025年世界の10大リスク」を用いてご説明。

4. キーワードリスト

- グローバル化社会
- 多様な集団で交流する能力
- 関係は本質に先立つか
- エポケー演習
- 外国出身者との共生社会
- 日本語委教育の課題
- カントリーリスク、リスクマネジメント
- 深い理解：学んだことを自分のことばでいえる（表現・説明できる）



5. 参考資料等

- ドミニク・ライチェン、ローラ・H・サニガニク著
「キー・コンピテンシー、国際標準の学力を目指して」明石書店、2006年5月31日刊
- 内村鑑三著「後世への大遺物、デンマーク国の話」同著「代表的日本人」岩波文庫



6. 事前予習用リーディング課題

- マニー株式会社、「2008年ポーター賞受賞理由書」
<https://www.porterprize.org/pastwinner/2008/12/02111040.html>
- ユーラシアグループ「2024年10大リスク」「2025年10大リスク」
2024年
<https://www.eurasiagroup.net/siteFiles/Media/files/Top%20Risks%202024%20JPN.pdf>
2025年（2025 10大リスクで検索）
[https://www.eurasiagroup.net/siteFiles/Media/files/TopRisks2025JPN\(1\).pdf](https://www.eurasiagroup.net/siteFiles/Media/files/TopRisks2025JPN(1).pdf)

参加者による全体発表

多様な集団での関係性と国際キャリア ～日本語教育の現状を踏まえて～

分科会E 講師：林明夫 先生

若井秋乃菜、大久保悠斗、大松愛、小川所叶、堂野摩耶、小池智希、
藤原大貴、田部明日花、藤田沙季、富澤咲高、青木果歩

目次

1. 学んだこと・伝えたいこと (P3)
 - 1-1 エポケー (P4)
 - 1-2 国際キャリアの日常化 (P6)
2. 日本語教育の現状 (P7)
3. 在留外国人が感じる日常生活の不便 (P8)
4. 日本人の意識の現状とのギャップ (P9)
5. 提言
 - 5-1 イベント (P10)
 - 5-2 やさしい日本語 (P11)
6. まとめ

1. 学んだこと・伝えたいこと

① コミュニケーションの手法「エポケー」

② 国際キャリアはもう私たちの日常の一部

1-1 「エポケー」とは

日本語で**思考停止**という意味

相手の発言をそのまま受け入れること

付加疑問

初対面の会話に有効

1-2 在留外国人の増加

文部科学省、「在留外国人数の推移」,2024

1-2 国際キャリアは日常

国際キャリアはもう私たちの日常の一部

↓

- ・日常生活（コンビニ等）での外国人と接触する機会の増加
- ・グローバル化する社会（人だけでなく、物の流通までも）で切っても切り離せない
- ・一般企業で働く外国人の増加（海外との取引機会、就職時の外国語資格の増加）

→働く上で外国人とのコミュニケーションが必須

2. 日本語教育の現状

「外国人材の受け入れ共生のための地域日本語教育推進事業」

⇒ 文部科学省予算総額の約**0.01%**（試算）

【課題点】

- 必要な専門人材（日本語教師、学習支援者）の不足
- 質の高い日本語教育の実施が不十分

予算は約5000万円に対して文部科学省予算5兆円（文部科学省令和七年度）

国内の日本語学習者数/教育機関/施設数等/日本語検定等の推移

文部科学省「外国人材の受け入れ共生のための地域日本語教育推進事業」

3. 在留外国人が感じる日常生活の不便

- 言語対応が不十分
 - Ex) 看板など多言語表記のものが少ない、難しい書類
- 日本人の異文化理解が不十分
 - Ex) 宗教、食文化
- 差別、固定観念
 - Ex) 「〇〇人はマナーが悪い」

4. 日本人の意識と現状とのギャップ

（参考）日本語教育等に関する日本人の理解、考え方の実態①

（参考）日本語教育等に関する日本人の理解、考え方の実態②

外国人に日本語や日本文化の学習・理解を求めているが、そのための行動には取り組みたくない
→要求に行動が伴っていない

アクションプラン(1)

5-1 イベントを活用した国際交流の宣伝

- ・ **ねらい**：外国人の方とのかかわりきっかけ、意識向上
→多くの人が楽しむ祭りやイベントを活用
- ・ 身近に様々な国際交流イベントがある
 - Ex) ・学園祭 国際交流サークル
 - ・フェスタmy（マイ）宇都宮2025
 - ：国際交流ひろば

アクションプラン(2)


5-2 やさしい日本語講座

第一講 熟語はいいかえる

Ex)登山→山を登る

第二講 相手の反応を見ながら話す

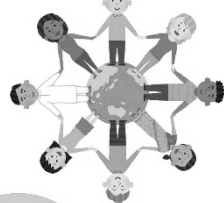
分からないままで終わらせない！！



庵功雄(2016) 岩波新書 やさしい日本語～多文化共生社会へ～

まとめ

- 国際キャリアは切っても切り離せない
- それに対する日本の準備が不十分
- 日本人の意識と現状のギャップ
- まずはここにいる人が出来ることから始めよう



参考文献

- ・93888901_09.pdf (日本語教育機関及び日本語教師に関する現状)
- ・https://www.mext.go.jp/content/2025062mxt_nihongo01-000039900_1.pdf 「外国人材の受け入れ・共生のための地域日本語教育推進事業」文部科学省 令和七年度
- ・庵功雄(2016) 岩波新書 やさしい日本語～多文化共生社会へ～
- ・文部科学省(2024) 「日本語教育関係 参考データ集」
https://www.mext.go.jp/content/000308912.pdf

参加者のレポートより(コメントは原文のまま記載しています。)

■ 先ず、他者と協働する力が大きく身に付きました。分科会に分かれて最終発表の準備をする中で意見がまとまらないことが何度もありましたが、その度に全員で話し合いを重ねて乗り切ることができました。そして講師の林先生から多くの学びを得ることができたと考えています。具体的にはコミュニケーション

ンに有効な手法や日本語教育の現場の課題など、今後の自分の国際キャリア形成に役立つものだと思います。学生同士でキャリアについて話し合う機会は多くはありません。今回皆で話し合い、私たち分科会で1つの国際キャリアの定義を導きだせたことはとても嬉しく思います。

- 日本語学習者や在日外国人の日本語学習の現状、日常生活での不便、日本人が外国人に求めること、それとは裏腹に、日本人の外国人に対する行動の改善意識が低いことなど、普段ニュースを見ているだけでは知ることができないコアな情報を学ぶことができた。
- 今回参加したこの3日間は私にとってとても有意義な時間となった。分科会では、日本語学校を開校した林明夫先生、主任の関田先生にご講義をいただき、普段であれば知ることのない日本語教育の現状詳細について教えていただいた。特に記憶に残っているのは、日本人が在学外国人に対して「ルールやマナーを守って欲しい」「日本語を使えるようになってほしい」と思っているにも関わらず積極的に外国人と関わろうとする人がとても少ないという統計だ。私は日本語教育の現場ではなく、災害支援の現場で在留外国人を支援していきたく強く思うきっかけとなった。
- このセミナーを通じて、国際キャリアは遠い未来の話ではなく既に自分達の日常にあるという気づきを得た。今後は分科会で提言されたイベント参加や優しい日本語の活用といった小さな実践を積み重ね自分のキャリア形成においても異文化理解を土台とした強みを育てていきたい。
- 将来の目標は、普通に就職して社会貢献をすることです。なぜ敢えて普通と加えたかという、国際学部にも所属し国際キャリアのセミナーを受けているのだから、何か国際的なつながりを求めて特別なことをしなければならないと考えていたからです。将来の夢は既に決まっておりが国際的なものではないことに対して後ろめたさを感じることもありました。しかし、セミナーと分科会を通して、国際キャリアは国外に出なくとも意外と身近にあるものだと気付くことができました。ただ何も考えずに生きていくのではなく、ここで学んだ異なる者への理解や共生といった概念を心に留め普段の場でも国際的な貢献をしていける人間になりたいと思いました。
- 今後のキャリアでは、コミュニケーション力を身につけて良好な関係を築くことが大切なので、これから多様な集団と話す際には「エポケー」という初めて学んだコミュニケーションの手法を使ってみたいと思います。(中略) 今後の課題として挙げられるものは、実際に分科会で深く議論した日本語教育の現状についてより知っていくということです。結果的に私たちのアクションプランとしては間接的な国際キャリア参加者に日本人の意識の底上げを行おうとしましたが、セミナー後は、私ができる直接的な活動はないだろうかということをも更に深堀りしたいと感じました。
- 日本語学習者や在日外国人の日本語学習の現状、日常生活での不便、日本人が外国人に求めること、それとは裏腹に、日本人の外国人に対する行動の改善意識が低いことなど、普段のニュースを観ているだけでは知ることができないコアな実情を学ぶことができた。

5. パネルトーク

グローバル時代におけるキャリア形成について

司会：申 恵媛 宇都宮大学 国際学部 助教

各パネリストが、体験を踏まえて、キャリア形成に関して「大切なキーワード」を3つ以上挙げ、その理由を説明した。その後、参加者によるパネリストへの質問、グループ別ディスカッション時間を設けられ、意見が発表された。



パネリスト：キム ヒジョン (きむ ひじょん)

Google 合同会社 New Business Strategist

- ① 職場と職業
- ② キャリアパス
- ③ ダイバーシティ&インクルージョン
- ④ Googleの企業文化(10X、心理的安全性)

参加者のコメントより (コメントは原文のまま記載しています。)

- キャリアの8割は偶然によるもの。その偶然をどうコントロールし人生をより良くしていくかが不大事。自身の生活の中で起こる偶然を1つずつ自分のものとして積み上げていきたい。
- Googleの自由な働き方を知ることができた。以前、Well-beingについて考える機会があったが、Googleの環境はまさに社員同士の交流が実現し対話を育む環境であると感じた。
- 将来や職業を考える際、キャリアパスは1つの道に固定されるものではなく、「自分らしく」という部分に重きを置く事を心掛けたい。
- ベトナムでのスタートアップを立ち上げ、物凄く行動力があると感じたが、その行動の源となるものは何であったのか、参考にしたいと思った。
- 自身が予期していなかったことでも良い方向へ転がることもあるという言葉が印象に残った。
- 「計画された偶発性」とは「人事を尽くして天命を待つ」にも似ており決して突飛な考え方ではないと感じた。



パネリスト：カバリエロ 優子 (かばりえろ ゆうこ)

宇都宮大学共同学部 准教授

- ① 国際協力
- ② ライフステージ
- ③ ライフ・シフト
- ④ 自分の強み
- ⑤ 価値観

参加者のコメントより (コメントは原文のまま記載しています。)

- 国際協力は一部の人だけでなく、自分自身のライフステージやライフプランの中でも関わり方を考えられるものだと改めて実感した。
- スキルの中にはコミュニケーションや異文化理解など聞き馴染みのあるものに加え、コンピテンシーという概念があることを初めて知った。これらのスキルは、今現在の私たちが求められる力でもあると認識した。先生のキャリアはご自身のライフステージを大切にされており、自分の理想であると感じた。
- スペシャリストとしてだけでなく、マネジメント側の考えも聞いてみたいと思った。また、今後女性としてキャリア積んでいく上で、障壁となる事柄があると実感した。
- 自分にしかできない仕事・働き方の見つけ方について知りたいと思った。自分の強みとは何か、自分求められることは何か考えるきっかけになった。



<p>パネリスト：岩井 俊宗 (いわい としむね) 認定 NPO 法人とちぎユースサポーターズネットワーク 代表理事</p>	<p>① 共創 ② 提案力 ③ 信頼</p>
<p>参加者のコメントより (コメントは原文のまま記載しています。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Think globally, act locally. を体現されている方に出会い、自身にとって大きな刺激となった。 ■ NPO 設立のお話から、人を集める方法、コミュニケーションの進め方に関心を持った。 ■ 行動を起こすと聞くと、支援を思い浮かべるが、「社会の枠組を作って届ける」と視点が非常に印象的だった。 ■ NPO が今ほど仕事として確立していなかった時代に、立ち上げようという決断に至ったのはどのような気持ちからであったか。また、そのような勇気ある決断の背中を押してくれた経験や他社からのアドバイスはあったか。 ■ 学生時代のネパールでの経験のお話から、外国の窮境を見て日本での活動を躍進することに繋がった点に驚きを覚えた。 	



<p>パネリスト：梁 鎮輝 (りょう ちんき) 宇都宮大学 国際学部 助教</p>	<p>① 共感力 ② 流言蜚語／デマ ③ オーラルヒストリー／ライフストーリー</p>
<p>参加者のコメントより (コメントは原文のまま記載しています。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 知識を得ることが重要だと考えていたが、深く知ることで共感力を得ることも共生への一歩という視点が新たなものであった。移民受け入れやオーバーツーリズムといった外国人に関わるネガティブな課題が生じているが、日本人ファーストの観点とどのように区別していくか疑問が生じた。 ■ 外国人に対する偏見が依然として残る国際社会において大切な心構えとして、「一人の人間」として関わることが大切だと感じた。 ■ 外国人を枠としてではなく一人の人間として知ろうとするというお話が印象に残った。枠組みを設定するとその枠組みに当てはめて考えてしまいがちだということに気づき、その枠組みはデマなどにも影響していると考えた。 	



<p>吉田 一彦 (よしだ かずひこ) 宇都宮大学国際学部 教授 国際キャリア教育運営委員会委員長</p>	<p>① 精神論よりも方法論を ② 幸運よりも情報を ③ 好奇心＋イマジネーション</p>
<p>参加者のコメントより (コメントは原文のまま記載しています。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 運や意欲も大切だが、結果を出すためお情報収集は大切だと感じた。好奇心や関心をもって学んでいけるようにしたい。 ■ 留学を考える際、半年～1年では自分には長く、1週間程度の海外体験は単なる旅行だと周りから否定される。先生のお話から、短い期間でも他国のコミュニティに飛び込みことが重要という視点に勇気づけられた。 ■ キャリアという漠然としていたのだが、その道筋や方法論という視点が参考になった。好奇心は挑戦の原動力になることを学んだ。 ■ 「精神論よりも方法論を」というキーワードは、他の方のお話を肯定しながらも、独自の展開であり現実的な考え方で納得した。奇跡とは意味のある偶然であるという言葉が印象的で、意味があるのが自分にとってという解釈ならば、多くのことに意味を見出そうとすることで、奇跡をあふれ出すことも可能だと感じ、もっと深く聞いてみたいと思った。 ■ 偶然には意味のある偶然と意味のない偶然が存在し、意味のある偶然は奇跡と呼べる。待つのではなく、意味のある偶然を掴み取るというメッセージが印象深かった。 	



<p>パネリスト： 林 明夫（はやし あきお） 株式会社開倫塾 代表取締役</p>	<p>① 多様な集団で交流する ② 自律的に活動する ③ 学び方を学ぶ</p>
<p>参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 地域社会をも「顧客」と位置付ける姿勢から新たな視点を得ることができた。 ■ 仕事とは何かを考える時に、お金を得ることややりがいしか思い浮かばなかったが、どんな仕事にもお客様が存在しているという視点を得た。すべての仕事は、誰かのためにもなっているし、多くの人の仕事のもとに自分が生活できているのだと感じ、印象に残った。受刑者にも学習指導されてきたお話や技能実習制度の整備についても活動されているお話はもっと深く聞きたいと感じた。 ■ 講師の多岐に渡る仕事内容を知り驚いた。多様な集団で交流するという事は、自分とは違う考え方や価値観に触れる大切な学びの機会であると認識させられた。私も学びの場から得るものを自分の糧にしていきたい。 ■ 小学4年生から新聞を読み続け、そこから世の中には様々な問題があり、更には、教育の重要性への気づきを得たことや、法学の学びへと進んでいったお話から、自分には到底真似できず、やはり、好奇心や根気強さといったものが重要なのだと感じた。 ■ 大学での学びが他の分野でも生かすことができるとわかり、幅広い進路を視野に入れて考えていきたいと感じた。 	



参加者のレポートより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 6名の先生方に共通して言えるポイントとして、それぞれ挑戦を続けることで自分に合った形でのキャリアパスを実現されてきたことが挙げられる。幸運を待ったことで訪れたものではなく、偶然を意味あるものとして掴み取ったきた結果である。不確実性が増し将来に楽観的な見通しがしにくい中ではあるが、挑戦と自己成長を止めずという姿勢をグループディスカッションの中でも共有し合えた。
- 対話を重ねていくことで、最初は将来が見えなくても、人との関わりやコミュニケーションによって計画通りとまではいかななくても、ある程度の本道の筋を考えて、自身のキャリア・人生の形成に取り組みたいと考えた。
- 私は大学卒業後に就職することが自分のゴールだと考えていた。そのため、先生方のキャリアは別のものだと感じていた。しかし、キャリアの形は様々であり、自らの好奇心やビジョンに基づいて形作っていくことが大切であると感じた。今の自分にとって、興味があることを見出すことが重要である。多くの先生方が仰っていた「深く知る」という視点を大切に取り組んでいきたい。
- 情報を集めること、方法を工夫すること、そして、好奇心を持ち続けることが、分野を越えて共通する行動原理であり、自身のこれからの役立つと実感した。
- 多様な価値観や背景に触れることで、自分の考えが揺さぶられてしまうこともあるが、その戸惑いこそが新たな学びや成長のきっかけになると感じた。
- キャリアを実現する上で最も重要で大切なのは仕事ができることやスキルがあることだと思っていたが、講師の方々が挙げたキーワードは、「信頼・共感力・好奇心」など心的なものを示しているものが多く、何ができるかということも大事ではあるが、いかに自分と一緒に働きたいと思ってもらえるかが大切であると考えた。いくら技術がああっても共に働きたいと思って貰えなければ機会も得られないし、良い環境も保てない。講師の先生方のお話から、人間力という重要な力を磨く必要があると感じた。
- 自分が将来どうなりたいのか、何をしたいかが曖昧であったが、6人の講師のお話を聞き、自分にも色々な選択肢があるのだと気付かされた。どの講師の方も自身ができることを精一杯に取り組んで今のキャリアたどりついている。今の自分にできることを精一杯頑張ろうと思う。
- 社会の問題について学ぶだけでなく、国際的なキャリア歩むためにロールモデルだったり、キャリアの道だたりを示してくれるものであると実感した。自分自身、看護職としてどのように国際キャリアを積んでいくか悩んでいたの、貴重な経験として学修していきたいと思った。

International Career Seminar

1. 概要

🌐 目的

—世界で通じる即戦力の英語力を—

国際分野の専門知識やグローバルな課題を英語で学ぶことで、実務に関わる実践的な英語能力を身につけます。また、第一線で活躍する講師より、各テーマや仕事の背景及び実状を学び、課題を話しあいながら解決策を考えます。

🌐 開催日程

事前指導： 2025年7月24日(木) 18:00-19:30

セミナー： 2025年9月20日(土), 27日(土)-28日(日)



🌐 実施形態

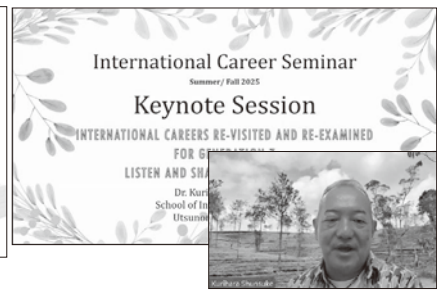
Zoomによるオンライン授業



開講式



アイスブレイク



全体講義



パネルトーク



分科会



分科会



中間発表



最終発表



ふりかえり・閉講式

2. 開催日程

1日目（9月20日 土曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
9:00	受付	13:00	パネルトーク
9:30	Registration	15:00	Panel Discussion by the Lecturers
9:30	開講式・オリエンテーション	15:10	趣旨説明
9:50	Opening Ceremony and Orientation	15:30	分科会・プレゼン方法の説明等 Introduction to Methods
9:50	全体講義・ワークショップ	15:50	分科会 I
12:00	Opening Lecture and Workshop	17:50	Work Group Session
12:00	昼食		
13:00	Lunch		

2日目（9月27日 土曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
8:30	分科会 II	15:30	分科会まとめ・中間発表準備
12:00	Work Group Session	16:30	Wrap-up Session and Presentation Rehearsal
12:00	昼食	16:30	中間発表
13:00	Lunch	17:30	Presentation Rehearsal
13:00	分科会 III	17:30	発表準備
15:30	Work Group Session	18:30	Presentation Preparation

3日目（9月28日 日曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
8:30	発表準備	12:40	昼食
10:00	Presentation Preparation	13:30	Lunch
10:00	全体発表 (発表 10 分、質疑応答 5 分、講評 5 分)	13:30	ふりかえり・閉講式
12:40	Final Presentation	14:30	Reflection/ Closing Ceremony

3. 全体講義



International Careers Re-visited and Re-examine for Generation Z

Shunsuke KURIHARA, Ph.D.

Vice-Director, International Career Education Program
Associate Professor, School of International Studies,
Utsunomiya University

Profile:

KURIHARA Shunsuke earned a Master’s degree in International and Intercultural Management from the School for International Training, USA, and a PhD in International Development from Yokohama National University. His professional career in the international development field includes; Regional Planning & Program Development Advisor (2012-2014) and Rehabilitation & Development Advisor (2009-2011) in Sri Lanka, under the JICA Expert Scheme, and Project Director (2003-2008) , Program Officer (2001-2008) in Sri Lanka and Project Coordinator (2000-2001) in East Timor, CARE International.

 **Information**

What is an international career for you? This three-day seminar is for all of us to learn from the Generation Z, our students! and try to find the common arena for all of us to work together in the international field. In this session, the students will be engaged and committed to show and expand their eager-to-learn attitude, while the lecturers will support the process with their expertise. Prior to the workgroup sessions, the students will be able to obtain and practice the practical ways of communication and learning style in a multi-cultural environment.



1. Current Work and Research Topics

At the university, he gives lectures and seminars in International Cooperation, Overseas Fieldwork and Global Management with his various experiences in the field with the governmental and non-governmental organizations. His experience with International NGOs in Southeast and South Asia contributes to the students not only about the International Cooperation, but also the Intercultural Communication as to working at the multi-cultural workplace – colleagues from various countries working together towards the world’s poverty.

His current research areas focus on the governance and development, poverty eradication and civil society strengthening. The central target people are the community members of the tea plantation estates in the upcountry Sri Lanka. He seeks the way of solving the issues faced by the tea plantation community such as limited access to higher education and choice of occupation as well as the poor living facilities. More than a half of tea consumed in Japan are from Sri Lanka. He looks into the best ways of connecting Japanese tea consumers and Sri Lankan tea producers for mutual understanding to solve the issues among the plantation community.

2. Main Topics for the Opening Lecture and Workshop

The Opening Lecture directs the students to the gateway to career development. However, this gateway takes each student in the different directions. It is up to the student's interest where they are taken through the gateway, and to the work group session. Is career development going only with the student's interest? There should also be competency development as well. The session focuses on competency and career development with group discussions. The student will be ready to learn at their workgroup session by the end of the Opening Lecture.

Key words:

- Career Development
- Competency
- Intercultural Communication

3. Reference

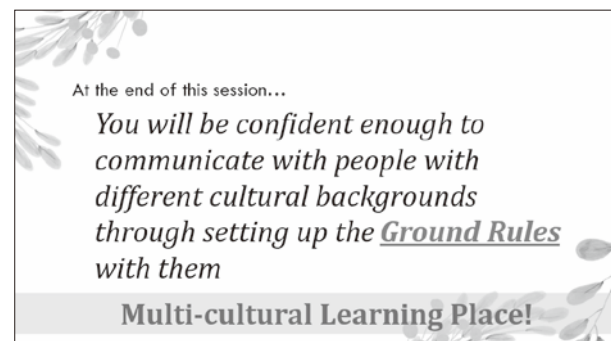
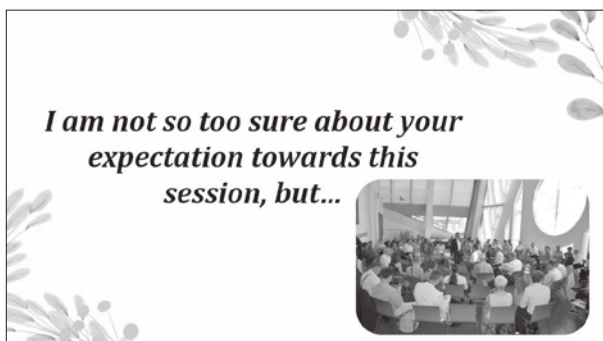
No prerequisite reading for the Opening Lecture. However, if you are interested in the lecturer's field, international development, please refer to the following:

Edward T. Hall, "Beyond Culture" Anchor Reissue

Linda Polman, "The Crisis Caravan: What's Wrong with Humanitarian Aid?" Metropolitan Books

Mary B. Anderson, "Do No Harm: How Aid Can Support Peace - or War" Lynne Rienner

William Easterly, "The White Man's Burden: Why the West's Efforts to Aid the Rest Have Done So Much Ill and So Little Good" Penguin Books



0. Ask yourself

“Why are you here?”

You all have “what’s next?” How do you share and explain it with others?

Group Discussion

Share with your team mates

Go into your **Work Group A-F**

1. Assign 1 person as the facilitator
2. Share your opinion
3. Next person should start with the quick comments on the previous person’s opinion
4. Facilitator summarizes the discussion

1. Ground Rules - essential for all of us in the seminar

Ground rules are guidelines that participants in a meeting or workshop agree to follow in order to make the meeting or workshop more productive and enjoyable. Common ground rules include things like being respectful of other participants, not interrupting, and staying on topic.

There are so many and various rules for participation in workshops, accustomed to participants’ cultural backgrounds, gender, personality and many more!

<https://www.facilitation.com/p/workshop-and-meeting-ground-rules>

Sample Ground Rules

1. Tackle problems, not people
2. Everyone participates, no one dominates
3. Be the crew, not the passenger
4. Think blue sky
5. Go for Quantity
6. Agree to disagree
7. Use “I” statements

<https://www.facilitator.school/groundrules/ground-rules-for-workshops>
<https://www.facilitation.com/p/workshop-and-meeting-ground-rules>


Core ground rules for this seminar:

Assume no assumptions to avoid stereotypes or even prejudice

Assumptions???



Who wants to be a volunteer?



“my typical day”

Find something in common and different in your typical day

Let’s have a chat over a cup of tea...

Which tea are you talking about???



<https://www.mitsuetea.com/product-page/select/SisaTea>
<https://www.droug.sg/this-bubble-tea-shop-in-malaysia-has-giant-8-sized-pearls-6x-bigger-than-regular-pearls/>
<https://product.kalender.org/oft/te/kalchotr/ra/DetailFromPage/2735>

Discrepancy from the start?

*Something in common
 Something different
 What’s behind?*

How’d you find yourself when encounter them?

2. Communication Style and Concerns



Cambodia
 Thailand
 Sri Lanka
 Malaysia
 Utsumomiya

High-context vs. Low context

	Low-Context	High-Context
Example Countries	US, UK, Canada, Germany, Denmark, Norway	Japan, China, Egypt, Saudi Arabia, France, Italy, Spain
Business Outlook	Competitive	Cooperative
Work Ethic	Task-oriented	Relationship-oriented
Work Style	Individualistic	Team-oriented
Employee Desires	Individual achievement	Team achievement
Relationships	Many, loose, short-term	Fewer, tighter, long-term
Decision Process	Logical, linear, rule-oriented	Multiple, relational
Communication	Verbal over Non-verbal	Non-verbal over Verbal
Planning Horizons	More explicit, written, formal	More implicit, oral, informal
Sense of Time	Present/Future-oriented	Deep respect for the past
View of Change	Change over tradition	Tradition over change
Knowledge	Explicit, conscious	Implicit, not fully conscious
Learning	Knowledge is transferable (before the experience)	Knowledge is situational (before the experience)

Communication Style

High-context vs. Low context

Anglo-Saxon	A	_____
	B	_____
Latin	A	_____
	B	_____
Oriental	A	_____
	B	_____

Trompenaars, Fons and Charles Hampden-Turner, *Riding the Waves of Culture*. New York, NY: McGraw-Hill, 1998.

Techniques for communication in the different cultural context

Face-saving technique

A sense of losing/ saving face plays a crucial role in the group of high-context culture. Beeler warns not to pick on the wallflowers (1998). In the high-context culture, singling someone out is totally out of manner and loses their face. Face-saving strategies (Beeler 1991) can be a guideline for trainers to show respect for their humanized atmosphere, turning out to show the trainee's clumsiness as well.

Recognize something in common
 KY???

Recognize something different
 What do you want?

High-context vs. Low context

What kind of differences in communication?

Other than cultural differences in communication

- Language proficiency - Hard of speaking English
- Implicit or explicit in communication - H/L context aspect

What else?

Who are most advantaged in group discussion? Fairness there?

Comfort Zone and Safe Place

To be an active participant in the course...

You ask yourself whether you can

- Brainstorm yourself, and unfold your limits
- Be counterfactual
- Be flexible
- Agree to disagree/ No judgement
- Listen! ... and talk! (or the other way around...)

In short... Push your comfort zone!!

Where the Magic Happens

COMFORT ZONE

a situation in which you feel comfortable and in which your ability and determination are not being tested

https://www.dailymaps.com/comfortzone/

InsPIG-ED (https://dictionary.cambridge.org/dictionary/english/comfort-zone)

Comfort Zone Issues

10 Things that Will Happen When You Start Stepping Out of Your Comfort Zone

by Oscar Newk bit.ly/10comfortzone

Share with classmates your comfort zone

What are your challenges in class group work and presentations?

- You'll realize all your fears are "fictional"
- You'll boost your self-confidence
- You'll create a new source of satisfaction
- You'll realize the only way to success leads through discomfort
- You'll begin inspiring people around you

Group Discussion

Tell us your comfort zone and safe place

Think through the below in your case:

- Are you comfortable with unfolding your limits?
- Do you feel safe to be flexible?
- Are you ready to agree to disagree in discussion or sharing with other group members? And how?

4. Set up the Ground Rules for seminar

Communication with "new" people is always unnatural and unfair (occasionally), but LOTS OF FUN!!!

Identify group members' "communication style" and "concerns"

See the signal!

Group Discussion

Our Ground Rules

- XXXX
- XXXX
- XXXX
- How may more?

How do you all come to an agreement? And how do you know?

Ground Rules

Group (X)

- XXXX
- XXXX
- XXXX
- How may more?

Let's make an ideal multi-cultural learning place where you can learn about international career development with friends from around the world!!

Ground rules of workgroups

Workshop Rules Group A

- 🗣️ Speak slowly & clearly
- 👂 Listen with respect
- ❓ Ask if you don't understand
- 🗨️ Give everyone a chance
- 😊 Use body language & gestures
- 🗣️ English only
- 💖 Be positive & supportive of your classmates
- 💡 Work together as a team

Ground Rules

Group B

- Respect each other's opinions.
- Do not interrupt others while they are presenting, even if you want to agree or disagree.
- Respect everyone's culture and avoid making assumptions or offensive jokes.

Ground Rules

Group C

- Respect each other and try to understand one another.
- Share your opinions without hesitation.
- Do not be afraid of making mistakes in English.

Ground Rules

Group D

- Agree to Disagree
- Use I statement
- No assumption
- Avoiding Stereotype

Ground Rules

Group E

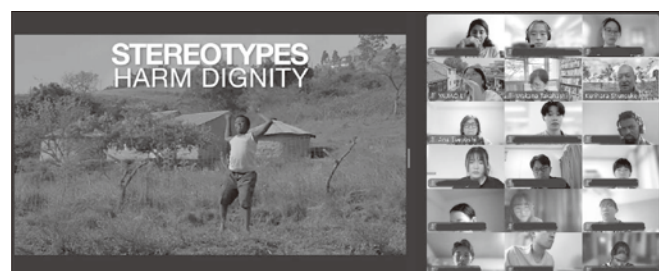
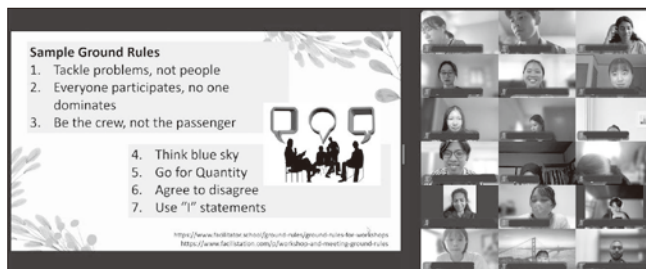
- Turn off Mute
- When people say something, Do reactions.
- don't afraid to talk.
- let's enjoy group sessions.
- Ask deeply that people don't know words
- Study with AI

GROUND RULES GROUP F:

- Asking the lecturer freely about any confusion related to the topic or ideas
- Keep video and audio on, if possible, for all the students
- Use of English language
- Group work and good communication

Participants' Comments (Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- Everyone is willing to talk and share ideas, so I gained a lot of knowledge from that.
- Everyone is so excited to start the seminar and get to know each other.
- It was a good session to warm up and get to know other students who joined ICS.
- There was lots of useful information that I can use for my future career.
- I learned that, when communicating with people from different countries, it is important to understand the two concepts of 'high context' and 'low context', which depend on cultures and backgrounds.
- Through the keynote session, I realized that I want to take on many challenging tasks and learn more about my strengths and weaknesses. I want to be a strong person and inspire the people around me.
- I realized that, when dealing with any issues that we face, we should be aware of the difference between 'facts', 'perception' and 'feeling'. The lecture was eye-opening and gave me valuable insight into the topics that we are dealing with in workgroup sessions.
- From the keynote session, I realized what is the necessary skill in communication is to respect and to try to understand others' perspective from various countries, and to try to communicate actively. I also understand that the goal of this seminar is to find out what we can do for our future career as a university student.
- I found the idea of the 'comfort zone' very interesting and encouraging for me. It showed me that leaving my comfort zone is necessary for growth. I also learned from the lesson on high context and low context that communication styles differ depending on cultures and language abilities.
- At the breakout room session, I thought about why I had chosen my assigned work group and shared my ideas with the other group members, who all had different opinions. I did not understand what an 'I statement' meant at first from the keynote speech, but I came to realize what it was through his explanation. This means that we should have our own opinions and not just follow general ideas. I also realized that, since people have different backgrounds, we need to respect each other.
- I liked the comparison between American and Japanese communication styles, which really illustrates how cultural assumptions can influence interaction. The concept of the comfort zone, fear zone and learning zone is very practical for personal growth. The reminder about stereotypes was powerful. It made me reflect on my own unconscious assumptions.
- The message 'stereotypes harm dignity' had a strong impact on me when I watched the visual content, and it was an eye-opening experience. We should always be aware of it, not only in international communication, but also in our everyday communication. This guided me in kicking off the seminar smoothly.



4. 分科会・講師及び講義概要

Work Group A	Advising Foreign Exporters about the Japanese Market
Lecturer	Ritter DIAZ Representative Director of the Japan Association for Promotion of Latin America and the Caribbean (JAPOLAC)/ Former Ambassador of Panama to Japan
Work Group B	Disaster Risk Reduction in the Era of Climate Change
Lecturer	Takeshi KOMINO General Secretary of CWS Japan CWS Japan
Work Group C	Promoting Gender Equality and Social Inclusion in International Humanitarian Assistance
Lecturer	Motoko ODACHI, Ph.D. Program Officer, ADRA Japan
Work Group D	Understanding of the Labor Market from Gender Approach
Lecturer	Li YAJIAO, Ph.D. Assistant Professor, School of International Studies, Utsunomiya University
Work Group E	Making Mistakes in Language Learning: The First Step to an International Career
Lecturer	Takayuki KIMURA, Ph.D. Assistant Professor, School of International Studies, Utsunomiya University
Work Group F	Moving Targets: Indie vs. Commercial Filmmaking in a Fast-Changing World
Lecturer	John CAIRNS Representative Director, LANTIS KK

分科会 A



Advising Foreign Exporters about the Japanese Market

Ritter DIAZ

Representative Director of the Japan Association for Promotion of Latin America and the Caribbean (JAPOLAC)/
Former Ambassador of Panama to Japan

Profile:

Dr. Ritter Diaz served for almost 20 years at the Embassy of Panama in Japan as a Commercial Counsellor (1999-2014) and Ambassador (2014-2019). After exiting the diplomatic service in 2019, he became an international consultant between Japan and Latin America. He has also worked for the largest bank of Panama, Banco General as well as Panasonic Latin America. He received a BA in Political Science from the University of Wisconsin-Eau Claire, a Master's Degree in International Political Economy from Tsukuba University and an Honorary Doctorate from Chiba University. The complete profile can be viewed on my blog:

<https://sunao.cloud/resume/>

Information

1. Current Work and Research Topics

As an International Business Consultant, my primary focus is on fostering business relations between Japan and Latin America and the Caribbean (LAC). I provide guidance to companies regarding the business protocols of Japan and the countries within the LAC region, covering areas such as export/import, real estate, and financial services, tourism, among others.



In my role as the Representative Director of the Japan Association for Promotion of Latin America and the Caribbean, I am actively involved in promoting academic exchanges between Japanese universities and those in LAC. I strive to encourage Japanese students to explore and gain a deeper understanding of the LAC region, so that they are ready to travel and enrich their international experiences.

Additionally, I advise universities on establishing cooperative models that bridge academia and business, ensuring students are endowed with the right skills to enter and perform well in the job market upon completing their studies.

Another aspect of my work involves facilitating business relationships between small and medium-sized enterprises from Japan and LAC countries. Collaborating with bilingual business professionals from both regions, we endeavor to offer guidance to Japanese and LAC businessmen on effectively operating within each other's markets.

I regularly write informative articles on various issues ranging from COVID-19 to US elections to the geopolitics of semiconductors and the emergence of artificial intelligence. These articles can be accessed at: <https://sunao.cloud>

2. Career Path

My career began with a role as delivery boy distributing paper for printing companies in Panama City. Although seemingly simple, this job played a crucial role in honing my communication skills and connecting with individuals

from diverse backgrounds. Simultaneously, I pursued my studies in law and political science at the University of Panama, attending classes in the evenings while working during the day.

During my university journey, I was honored with a Fulbright scholarship that granted me the opportunity to complete my degree in Political Science at the University of Wisconsin-Eau Claire in the United States. Following graduation, I embarked on a career as a legal assistant for Panama's largest private bank. Subsequently, I assumed the position of Head of Credit and Collection at Panasonic Latin America, where I gained invaluable experience in contract drafting and review. This tenure at Panasonic also provided me with essential operational and managerial skills, equipping me for the realm of international business.

Driven by my aspirations, I made the decision to resign from Panasonic and pursue a Master's degree in international political economy at the University of Tsukuba in Japan. Before completing my Master's program, I was appointed as a Commercial Attaché at the Embassy of Panama in Japan, marking the beginning of my diplomatic service that spanned nearly two decades. Through hard work and determination, I climbed the ranks within the Embassy, eventually assuming the position of Ambassador of Panama to Japan, an appointment I received from the President of Panama. After a fruitful diplomatic career, I entered a new chapter of my life as an International Business Consultant, facilitating connections between Japan and countries of Latin America and the Caribbean.

3. Main Topics for Group Work Session

This workgroup session aims to provide essential information on assisting foreign exporters in introducing their products to Japan. It is specifically tailored for individuals interested in pursuing careers within the international division of a trading company.

The session will cover topics such as Japanese consumer behavior and import practices, drawing on real-life experiences and lectures delivered to chambers of commerce and business associations in the Latin America and Caribbean (LAC) region. Given the significance of practical skills in navigating the challenging labor landscape, the session emphasizes the importance of equipping students with real-life functional knowledge.

Additionally, an overview of the Japan Association for Promotion of Latin America and the Caribbean (JAPOLAC) will be provided, highlighting its role in fostering business exchanges between Japan and LAC countries across six key areas that are important for human development such as education, health, business facilitation, agriculture, environment, and artificial intelligence.

By the end of the workshop, participants will be able to create a practical template that assists foreign exporters in effectively presenting their company and product information to potential business partners in Japan.

The session will be conducted in a lecture format, with an emphasis on fostering an interactive and open environment for meaningful discussions and exchanges of ideas.

4. Keywords

- FOCUS: Give full attention and total mental energy to any endeavor you do, avoiding distractions or unrelated elements.
- DEPTH: Go deeper in your search, digging as much information as possible to make the right decision.
- PERSEVERANCE: Don't give up despite the stormy weather and headwinds.

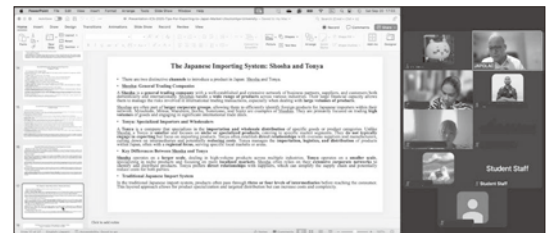
5. Reading

Article “**Some Tips for Exporting Food Products to Japan**”. This article is a **mandatory reading** as it will help students to follow up my lecture during the workshop. The article can be viewed at:

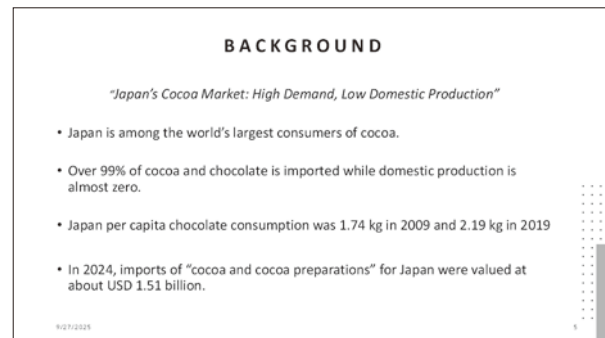
<https://sunao.cloud/wp-content/uploads/2023/05/Some-Tips-for-Exporting-Foods-Products-to-Japan.pdf>

The following articles are complementary readings for students, providing valuable insights on various topics, based on my experience:

1. **“Panama’s development as an international center for trade and culture in Latin America and the Caribbean-Human resources are the key”**- An interview with Ambassador Ritter Diaz of the Republic of Panama. Published in The Mariners' Digest, Vol. 41, April 2016. This article delves into Panama's development as a prominent trade and cultural hub in the Latin American and Caribbean region.
<https://drive.google.com/file/d/1Bgry9FJwLGKMhOfLwnVvIZ63ywDrVLYa/view?usp=sharing>
2. **"Line 3 of Metro: A Flagship Project for Panama and Japan"**. This article sheds light on the significance of Line 3 of the Panama Metro, which represents the largest transport infrastructure project in Latin America financed by the Japanese International Cooperation Agency (JICA). The project introduces Japanese monorail technology in the Latin American region for the first time. The article was posted on November 9, 2020 and is available at:
<https://sunao.cloud/wp-content/uploads/2020/11/Article-A-Flagship-Project-For-Panama-and-Japan-English.pdf>
3. **"My Experience as a Cultural Translator Between Japan and Panama"** - A speech delivered to the members of the Federation for Maritime Promotion at the Japan Shipowners' Association headquarters on January 29, 2020. The speech highlights personal experiences and insights into the importance of cultural norms in facilitating effective international communication. It can be accessed at:
<https://sunao.cloud/2020/05/my-experience-as-cultural-translator/>



Final Presentation by Participants



ABOUT BENNS ETHICOA

- Name of the company: **BENNS ETHICOA CHOCOLATE FACTORY SDN.BHD**
- Founded in 2017 by Wilfred Ng
- Ethicoa combines “ethical” and “cocoa”, showing the brand’s commitment to fair, transparent, and sustainable chocolate.
- The company was registered on December 29, 2021
- Type of Business: Export and import chocolate and chocolate products, Manufacture of cocoa product, Manufacture of Chocolate and Chocolate products
- The cocoa beans come from *Kota Marudu, Sabah*.

09/27/2025

ABOUT BENNS ETHICOA

- Benns Ethicoa uses **traceability**, which meets the Japanese consumer demand for product transparency.
- About 60% of their products are exported mainly within Asia, which is China, Indonesia, Singapore, and plan to launch in Hong Kong, with further expansion into Thailand and Vietnam.

Benns Ethicoa Contact Information

Address: Lot 6, Jalan CJ1/6C, Kawasan Perindustrian Cheras Jaya, Batu 11, 43200 Kajang, Selangor, Malaysia
Phone: +60-3-9082-0955
Email: hello@bennsethicoa.com (general) factorytour@bennsethicoa.com (factory tour)
Website: <https://bennsethicoa.com>

3

PRODUCT SPECIFICATIONS

- **Origin:** Malaysia (Malacca, Pahang, Sabah, Perak)
- **Variety:** Trinitario / Trinitario–Forastero hybrids. It has fine flavor cocoa; better taste than standard cocoa.
- **Average FOB Price (2024):** \$4.20 / kg (*Tridge*)
- **Processing:** Fully fermented in 5–7 days in wooden boxes; sun-dried in 5–10 days
- **Moisture Content:** Less than 7%, so beans don’t get moldy.
- **Bean Count:** 90–110 beans / 100 g
- **Defects (Max.):** Moldy beans: less than 5%; Slaty beans (unfermented): less than 5%
- **Flavor Profile:** Fruity, nutty, earthy, mild floral

09/27/2025

PRODUCT SPECIFICATIONS

- **Packaging:** 60–65 kg jute bags with liner
- **Shelf life:** 12–18 months (cool, dry storage)
- **Export ports:** Port Klang / Penang / Kota Kinabalu
- Before export, beans are tested for mycotoxins, heavy metals, pesticide residues
- Certificate of Analysis & Halal Malaysia (others on request)
- **Export Documents:** Phytosanitary Certificate, Certificate of Origin, Commercial Invoice & Packing List

09/27/2025

Benefits of Benns Ethicoa Beans

Health Benefits

- Good for your heart
- Helps you focus
- Lifts your mood
- Protects your body
- Supports digestion

Societal Benefits

- Premium quality
- Supports farmers
- No child labor
- Factory tours for students

Environmental Benefits

- Sustainable farming
- Protects biodiversity
- No harmful chemicals

09/27/2025

CONCLUSION

- Benns Ethicoa is an ethical company.
- Its cocoa is cheap & healthy (no chemicals).
- Supports farmers with fair trade.
- It has a good price to compete in the Japanese market
- Fits with Japanese consumers lifestyle

09/27/2025

REFERENCES

- <https://vulcanpost.com/809213/benns-ethicoa-bean-to-bar-ethical-chocolate-malaysia/>
- <https://shop.bennsethicoa.com/pages/about-us>
- Trading Economics, <https://tradingeconomics.com/japan/imports/cocoa-cocoa-preparations>
- Kanzaki Heavy Industries(powerpoint materials)
- Illust AC(powerpoint materials)

09/27/2025

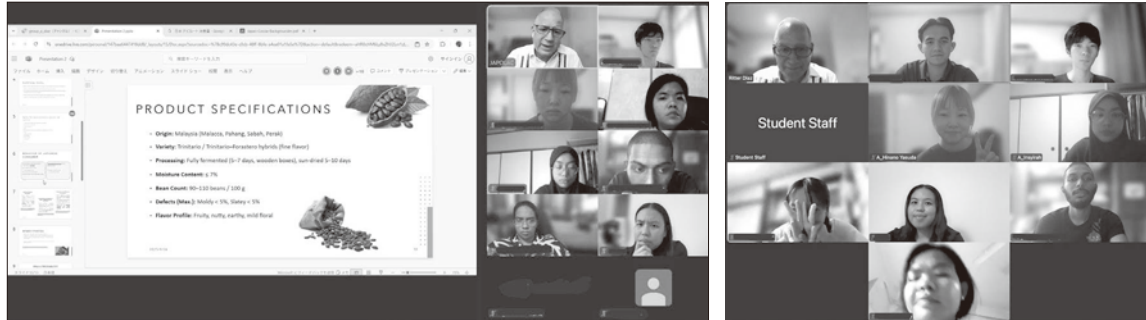
Participants' Comments

(Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- I could get deep information about international business, and we could collaborate with the group members and create a presentation slide applying this knowledge.
- I was impressed that Dr. Diaz was able to successfully mediate by communicating the unique nature of Japanese trading companies to the company in Panama.
- There are several group members who share their career goals such as international journalism, the diplomatic field, and education. This helped me to widen my career choices and look for my own passion for future career. Working with people from various countries helps us to develop mutual understanding and good communication skills.
- My action plans to develop my career are to be courageous and develop skills in public speech, research practical skills, and networking. Secondly, to join international conferences and events. Thirdly, to look for internship/volunteer/part-time opportunities to experience real life career opportunities.
- Japanese business protocol is unique in the world. Business: Time is very important, time is money, relationships are very important, A contract comes only after a good relationship has been established. Consumers in Japan: Quality is the best, tendency to focus on brand-named items. Keeping quality costs. They tend to prefer healthy foods. Package design is important. Prereading material “Exporting to G7 countries or foreign markets is an important letter of introduction to attract the attention of Japanese buyer.
- In working on presentation materials, I found that it is important to focus on the key points, for instance, “What content do you want to show the most?”, “What is the most important thing you want to tell?” and found that preparing too many materials or examples on slides is not a good idea.
- Through the seminar, I learned how to create PowerPoint presentations that are easy to understand and how to

communicate with people from different language backgrounds. I also found it interesting to work with people from different countries to achieve goals together. My future goals are to continue to study languages, to use the languages that I learned, continue to collect information, continue to pursue fun things, and to work with various people together. I enjoyed it and was satisfied with the seminar!

- Each member tried their best to communicate and discuss despite having a language barrier, and some online technical problems.
- Work group session was my favorite part of the sessions, close interaction, and Dr. Diaz's insights meant a lot for me.
- They were really friendly, and Prof. Dr. Ritter Diaz taught us a lot of things. Now, I know how to create an attractive presentation, too.



分科会 B



Disaster Risk Reduction in the Era of Climate Change

Takeshi KOMINO

General Secretary of CWS Japan

Profile:

After my career in working in Afghanistan, Pakistan, Myanmar, Thailand, I started to be involved in NGO activities in Japan from east Japan Earthquake and Tsunami in 2011. I currently serve as General Secretary of CWS Japan, and my responsibilities include: oversight and management of CWS Japan projects in Japan and liaison and oversight for Japan-funded projects elsewhere in Asia; leadership in fundraising and programming for emergency, disaster risk reduction, climate change adaptation programs in Asia; serve as resource person for CWS Global in disaster risk reduction as part of Technical Unit, and emergency response in the event of a major, sudden onset disasters; and representational role in key networks in Japan and in Asia region.

My current representational roles include:

- Chairperson, Executive Committee member, leader in innovation hub, Asian Disaster Reduction and Response Network (ADRRN): 2014-current.
- Advisory Group member, IRDR ICoE-Coherence (International Center of Excellence for Coherence among Disaster Risk Reduction, Climate Change Adaptation, and Sustainable Development)
- Steering Committee member, Japan Quality and Accountability Network (JQAN): 2015-current.
- Joint secretariat, Japan CSO Coalition for DRR (JCC-DRR): 2014-current.
- Co-founder and a member, NGO2030: 2017-current.

 **Information**

1. Current Work and Research Topics

Our work involves emergency response for life-saving needs of disaster-hit areas both within and outside of Japan, and spreading the know-how on disaster risk reduction, which I believe it is relevant for everyone in this era. While disaster risks are rising rapidly due to climate change impact, the resources we have at hand is not growing as per the rising risk levels, and therefore, we need to produce more risk reduction impact with less resources. In order to do this, innovation lens is required. It involves working with many stakeholders, starting from communities across the Asian region, local and international NGOs, local and central governments, private companies, universities and researchers, as well as international organizations. It is sort of like, producer for resilience, and I take great pride in the impact of what we collectively achieve.



2. Career Path

Please see below video for my career path:

<https://www.youtube.com/watch?v=kkc4HH7Y3Y0> (Japanese only)

2020年10月2日開催 NGO 職員のキャリアあつちやけ対談 vol.1 小美野剛(JPF 代表理事)、渡辺 早希(元WELgee)

リソース部門統括)

<https://www.youtube.com/watch?v=J8hFeefAFIw> (English only)

Virtual Walk Talk Listen with Takeshi Komino (episode 61)

3. Main Topics for the Workshop

This course explores an importance of disaster risk reduction in the era of climate change, and see critical skills required in assessing vulnerability and capacity to plan concrete measures for risk reduction, with specific project case study. After conceptual lecture, the participants will engage in practical work.

The flow of the course will be as follows:

1. The course will provide an overview of disaster risk reduction and why it is relevant in this era of climate change
2. We will identify learn how vulnerability and capacity can influence the disaster risk outcome.
3. We will explore an idea that reduces vulnerability and increases capacity to reduce disaster risks.

4. Keywords

- Problem analysis
- Disaster risk reduction
- Climate Change Adaptation
- Resilience

5. References

- Fleeing Climate Change (DW documentary)
https://www.youtube.com/watch?v=c14Uv9_7KJE
- The Citizen’s Guide to the Sendai Framework for Disaster Risk Reduction
https://jcc-drr.net/wpJD/wp-content/uploads/2017/03/SFDRR_EN_1a.pdf
- Sendai Framework for Disaster Risk Reduction
<https://www.youtube.com/watch?v=izpDdnaSxN0>
- CLIP Innovations – Locally Led Solutions for Disaster Resilience and Climate Action
<https://www.youtube.com/watch?v=IOfhwesJItg>

6. Required Reading and Assignment

1. After reviewing resources above, please identify one recent climate-induced disaster event that you know, and find out at least 3 reasons that led to significant disaster damage (e.g. you could explore issues such as why certain number of people lost their lives, why there was so much economic loss, why so many people were left behind, etc.)
2. We will ask each participant to do brief presentation at the beginning of the session – one way of getting to know each other!

Final Presentation by Participants



Disaster Risk Reduction

Group B

Lakmi Sadeepa Gunasekara
Diveena Nair Sekhar
Runa Toyoda
Raffiq Bin Ahmad Faisal Niza
Yuki Oyama
Santhiya Sivasanthiya

What is Disaster Risk?

Potential loss: life, injury, or damaged/destroyed assets

Scope: system, society, or community

Determined by:


- Hazard
- Exposure
- Vulnerability
- Capacity

$Risk = Hazards \times Vulnerability (including exposure)$

Capacity

Hazards - Potential threats (flood, landslide)
Disaster - After-effects of hazards (harms to people, economy)
Vulnerability - Weaknesses, Fragility, deficiency, proximity to a natural hazard
Exposure - Awareness on hazards and what to do when they receive alerts
Capacity - Ability to cope and recover (knowledge and resources)

What is Disaster Risk Reduction (DRR)?

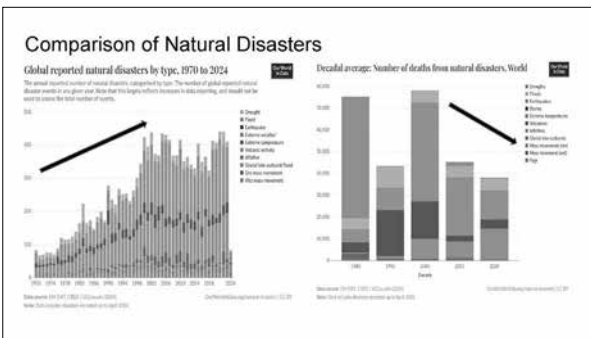
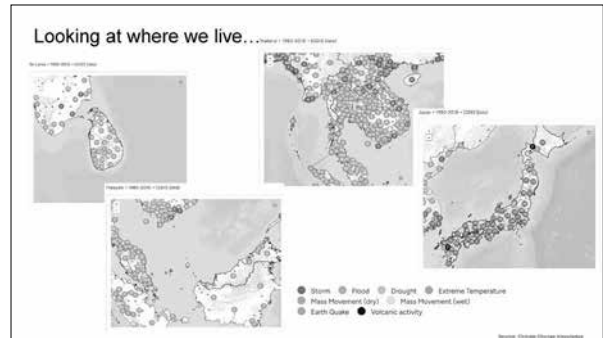
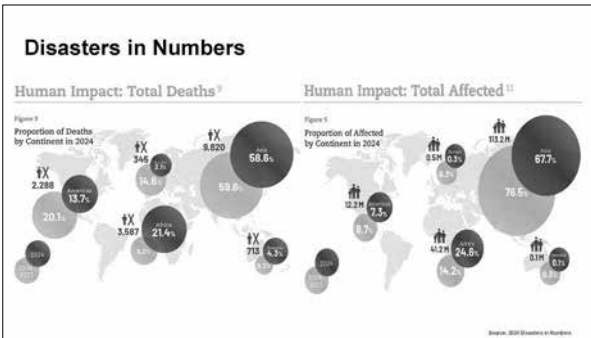


- Prevent new & reduce existing risks
- Manage residual risks
- Reduce damage from natural hazards (long-term)
- Plan, prepare & give early warnings → build safer communities
- ◆ **Goal:** Save lives & reduce economic loss
- ◆ **Outcome:** Strengthen resilience → sustainable development

DRR is NOT about reacting AFTER the disaster but to take action BEFORE


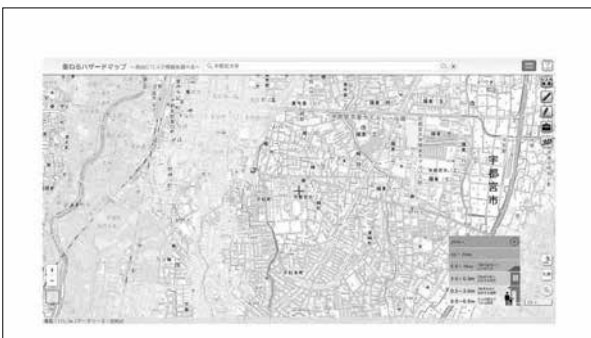
Recent Disasters around the World

 <p>Landslide, Sri Lanka Date: August 2022 Over 4,000 families affected (5 deaths, 3 missing) Over 1800 houses were destroyed</p>	 <p>Flood, Malaysia Date: January 2022 Displaced over 400,00 people (50 deaths, 2 missing) Economic Damage: USD 1.46 billion</p>
 <p>Flood, Thailand Date: July 2011 - January 2012 9.5 million people were affected (813 deaths) Economic Damage: USD 40 billion</p>	 <p>Earthquake, Japan Date: March 2011 Property Damage: Over 1 million buildings collapsed Human impacts: Over 15,000 deaths, 2,000 missing Economic Damage: USD 113 billion</p>




Practical Ways to reduce risks

- **Building**
 - Avoid living dangerous area
 - Fixed furnitures (earthquake)
 - Close window, curtain (storms)
 - Put valuable stuffs at more than 2nd floor (flooding)
- **Supplies/Hazard Maps**
 - Stock 72 hours of food, water, etc..
 - Identify safe and dangerous place

Continue.....

- Use Technology (Early warning system)
Satellite maps, Mobile apps, SMS Alerts
- Reforestation/Planting trees
- Do environmental friendly practices
- Make awareness and educate people



CONCLUSION

Natural disasters remind us how powerful nature can be and they also highlight the importance of

- ◆ Preparation
- ◆ Awareness
- ◆ Unity

By: Applying Knowledge
Improving infrastructure
Educating communities

- We can reduce the damage and save lives.
- As future leaders and professionals, it's our responsibility to promote resilience and readiness.

TOGETHER, LET'S CREATE A SAFER TOMORROW

THANK YOU!

Participants' Comments

- (Comments below are taken directly from students' workbooks.)
- Superb. The Sir was really enthusiastic and inspiring. He supported and guided us on only on the topic of disaster risk management but also on presentation preparation and presentation. Thank you so much.
 - I learned a lot from the Lecturer of my groups and even my groupmates. Hearing everyone's opinions helps me to think broader.
 - I felt comfortable in my group. At first, I felt some nerves but once opened up my mind I felt comfortable, and our

sensei Takeshi Komino such a wonderful professor, not only teaches about climate disasters but also teaches so many things which will help us to build our career. And our student staff helps us lot. His contribution is also the biggest part of our work group session.

- The discussions during the Work Group Session were enjoyable and open. Everyone actively participated in the discussion, making it more interactive and informative. The lecturer also delivered a lecture on Disaster Risk Reduction and made impactful comments during the discussions. I learned a lot during this session.
- At the final presentation section, I think we did the best presentation compared to the one that at the mid-term presentation. We did it with confidence.
- Summary of our work group session is as follows. First, we were introduced to disaster risks and the components that determine them, as well as the formula for calculating risk. Next, we were introduced to the concept of disaster risk reduction (DRR). And then, we discussed four recent disasters that occurred in various locations around the world, including Sri Lanka, Thailand, Malaysia and Japan. We presented maps showing the number of people killed and affected by disasters to illustrate the seriousness of disasters, especially in our own region. We also presented graphs showing comparisons of natural disasters from the past to the present. These graphs show that the number of disasters is increasing, but the number of practical ways to reduce risk is decreasing. Finally, we shared information on practical ways to reduce risk, such as hazard maps, SMS alerts, and mobile apps. We concluded our presentation by emphasizing the importance of preparation, awareness, and the ability to minimize disaster damage.
- I got to understand more about the concept of disaster risk reduction. And I got to build connections especially with my groupmates during the presentation preparation. After having the discussions, I got to learn how to think more critically from various perspectives. I learned a lot during the group work from the topic of risk reduction to career skills on a global setting.

Discussion: Presentation modality, outline, responsibilities

- 10 minutes presentation, Q&A
- 5 minutes, Comments
- 5 minutes

Objective: Create awareness on disaster risks and ways to mitigate impact of the disasters in our lives

- Examples of disasters and disaster risks, as well as how we can mitigate the impact (so that hazards do not turn into disasters)
- Statistics of the disasters and their impact so that we can communicate how serious it is
- Introduce hazard maps and ways to reduce disaster impact in our homes
- Videos of exam

- Objective
- Presentation structures
- Who to speak
- What preparation is required (including researching for further information)
- Who will work on presentation materials
- Who will do the time keeping









分科会 C



Promoting Gender Equality and Social Inclusion in International Humanitarian Assistance

Motoko ODACHI, Ph.D.

Program Officer, ADRA Japan

Profile:

Motoko Odachi presently works as a Program Officer for ADRA Japan. She has worked in the international cooperation sector for over 25 years, managing humanitarian development assistance projects in countries such as Cambodia, Laos, Pakistan, and Ukraine. Her recent work involves gender mainstreaming and Protection from Sexual Exploitation, Abuse, and Harassment (PSEAH) in the international aid sector. She earned an M.A. in Gender, Violence and Conflict from the University of Sussex, UK, and a Ph.D. in International Studies from Utsunomiya University, Japan.

Information

1. Current Work and Research Topics

My main duties in the current post include the management and coordination of humanitarian and development projects in Ukraine, Ethiopia, Zimbabwe, and other countries in Asia and Africa. I also conduct training of PSEA to humanitarian and development workers, medical professionals, and consultants, so that they understand the importance of protecting vulnerable people from sexual violence and promoting their human rights. My research interest is promoting gender equality and social inclusion in humanitarian assistance through working with grassroots organizations.



2. Career Path

I have been working in the international aid sector for over 25 years. It was because I had an interest in working in the social sector since I was a high school student. After entering university, I started working for Non-Governmental Organizations (NGOs) for translation, organizing events, or fundraising. For example, I used to assist foreign women who were survivors of sexual violence by accompanying them to their hospital visits. I also worked for an anti-nuclear organization to organize a peace march in Tahiti to protest French nuclear testing. Based on such working experience during my university days, I developed a strong interest in working in the NGO sector to engage in humanitarian and development work.

In addition, my interest in finding solutions to improve humanitarian assistance work became stronger after working in different countries, such as Cambodia, Laos, Syrian refugee communities in Jordan, and Pakistan. For learning better ways to assist vulnerable people, I studied gender-based violence prevention in an M.A. course in UK. Also, I researched the progress and challenges of policies concerning the prevention of sexual exploitation and abuse in the international aid sector in my Ph.D. thesis.

3. Outline of work group session

In recent years, a greater number of socially vulnerable populations, including women, children, elderly people, and people with disabilities (PWDs) suffered from natural disasters, war, and poverty. Since protection of vulnerable

people is one of the most important responsibilities of humanitarian aid organizations, this course will provide students with the knowledge and skills to ensure protection, gender equality, and social inclusion in humanitarian assistance programs. The tentative structure of the course will be as follows:

1. Introductory session on humanitarian assistance, protection, gender equality, and social inclusion.
2. Analysis of the needs of the people affected by humanitarian crises from the perspective of protection, gender equality, and social inclusion.
3. Discussion on the difficulties and potential risks faced by vulnerable people in humanitarian crises.
4. Discussion on solutions for promoting protection, gender equality, and social inclusion in humanitarian assistance.

4. Keywords

- Humanitarian assistance
- Protection
- Gender Equality
- Social Inclusion
- Empowerment

5. A list of reference materials

- Handicap International, Humanity and Inclusion, Disability Reference Group (2024). The Good and Promising Practices 2023,
https://disabilityreferencegroup.org/wp-content/uploads/2025/01/02%20Graphic%20Report_DRG%20Good_Practices_incl_humanitarian_action_2024.PDF
- UNICEF (2023) Enhancing Gender in Humanitarian Response,
<https://www.unicef.org/rosa/media/2481/file/EnhancingGenderinHumanitarianResponse.pdf>
- JANIC Promoting Gender Equality Working Group (2022) Gender Mainstreaming Guidelines, pp.35-38.
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/files/100489426.pdf>

6. Required Reading and Assignment

1. Please review the two videos below and write your comments on each video. (About a half page for one video)

- ① AWANI Tonight: Children at risk of disease, trauma after Myanmar quake – UNICEF

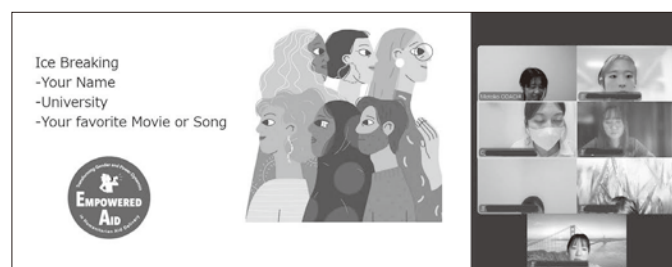
<https://www.youtube.com/watch?v=BhfsHMmeNL4>

- ② Life of people with disabilities in war conditions

<https://www.youtube.com/watch?v=DrQjhKmsHpg>

2. Please choose one country of your interest that faces humanitarian crises and write about the conditions of women, children, elderly people, and PWDs in the chosen country. (About half a page)

3. Each participant will share the comments on the videos and explain the conditions of women, children, elderly people, and PWDs in the chosen country in the first day of the session.



Final Presentation by Participants

Humanitarian Aid in Disasters: Principles, Challenges, and Case Studies

Group C

Table of Contents

- Key Learnings & Significance
- Case Studies
 - ① Sri Lanka / ② Afghanistan
- Recommendations for Humanitarian Organizations
- Student Action Plans

Key Learnings & Significance ①

★ **DISASTER OF VARIOUS COUNTRIES AND SITUATION**
 Women / Children / People with Disabilities / LGBTQ + humanitarian aids/ food/water/ medical care/ mental care

➢ We can learn about different perspectives

- who are the vulnerable people?
- what are the challenges?
- what support is needed?

Key Learnings & Significance ②

★ **HUMANITARIAN PRINCIPLES**
 Humanity/ Neutrality/ Impartiality/ Independence

➢ Build trust

➢ Protect aid workers

➢ Ensure help reaches those most in need

(Link: Humanitarian principles - European Commission)

Case Study ① : Rebuilding Equality after Disaster (Ex-flood) in Sri Lanka

- Families relocated to temporary camps (temples/schools)
- Women faced increased risk of GBV:
 - Lack of privacy in shelters
 - Unequal decision-making
- Men-led relief committees ignored women's concerns (safety, toilets, health needs)

Solutions (NGO interventions)

1. Gender-based camp committees
2. Separate sanitary facilities for women
3. Joint training on rights, GBV prevention & gender sensitivity
4. Confidential reporting system

Case Study ② : Earthquake in Afghanistan

- Afghanistan's governance under religious law makes humanitarian access difficult, especially for vulnerable groups.
- Many vulnerable people face risks in accessing food, shelter, health care, and basic rights.

The affected people:

- **Women:** Limited access to aid and healthcare.
- **Children:** Suffer from poor nutrition and risk of family separation.
- **Elderly:** Struggle with low mobility and difficulty evacuating.
- **PWDs:** Often excluded from evacuation and aid distribution.
- **LGBTQ+ & Minority Groups:** Remain invisible and fear of discrimination.

Solutions

- Adopt inclusive, humanitarian-based approaches
- Strengthen cooperation with NGOs, states, and local communities
- Ensure fair treatment
- Build long-term resilience

Recommendations for Humanitarian Organizations

- ★ Build trust with affected people and assess diverse needs
- ★ Provide training and establish community guidelines against gender-based violence (Capacity building)
- ★ Promote localization of aid and protect minority groups (Policy & Protection)
- ★ Monitoring & Sustainability (Create a gender committee)

STUDENT ACTION PLANS

We learn about various perspectives

★ We have a lot of choices as a university student

- Attend graduate school
- Volunteer
- Internship
- Study abroad

THANK YOU FOR LISTENING

Participants' Comments

(Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- We shared the importance of humanitarian aid. In particular, the role-play session, in which participants assumed the role of people in areas needing humanitarian aid, provided an opportunity to think about who needs what in those areas.
- It allowed me to feel free to exchange ideas and comments with the other students and the mentor

without prejudice. This encouraged me to dare to speak out whatever it is correct or incorrect.

- On the second day of the seminar, I could understand the situation of specific people such as women, children, people with disorders, and the LGBTQ+ members and how to assist them. Additionally, I could discuss with the people from various countries in English smoothly. I come to think that I want to find a job in Japan where I can utilize my strength in a job that helps foreigners. On the final day, I gained an understanding of the importance of solidarity and cooperation with local people in international cooperation work. I also broadened my career horizon through working on the final presentation. Regarding my future career, I want to engage in work that allows me to utilize my strength in a job helping foreign residents and international students in Japan.
- I learned the importance of humanitarian aids and humanitarian principles. First thing is humanitarian aid. Disasters make situations of vulnerable people worse. For example, fragile infrastructure collapses, sanitary conditions become worse, a few foods, medicine or water become less. And children suffer from trauma. Also, it is important that humanitarian aids that people need are different depending on nations' situations. Second is humanitarian principles. I thought it was the same thing as the ground rules that Prof. Kurihara mentioned at the keynote lecture in this seminar.
- We learned two things through the workgroup session. The first is that disasters occur in various countries and situations. Disasters make the conditions of vulnerable people worse, so we realized that humanitarian aid is crucial. We also learned about it from various perspectives. Secondly, we learned about the four humanitarian principles: These consist of humanity, neutrality, impartiality and independence. In humanitarian aid, it is important to build trust, protect aid workers, and ensure that help reaches those in need. We were introduced to two case studies. One was about rebuilding equality after a flood in Sri Lanka. The other was the earthquake that occurred in Afghanistan. Based on these case studies, we came up with some recommendations for a humanitarian organization. Firstly, we should build trust with the affected people and assess their diverse needs. Secondly, we should provide training courses and establish community guidelines against gender-based violence (Capability Building). Thirdly, it is important to promote the localization of aid and to protect minority groups (Policy and Protection) Fourthly, monitoring and sustainability are needed, for example by creating a gender committee. As university students, we have learned various perspectives and have many choices. For example, we can attend graduate school, do internships, volunteer and study abroad. I would like to find my own career path by trying these things.
- Regarding my action plan to develop my future career, I will work as a volunteer to interact with regional children, foreigners, elderly people, and people with disabilities. Through this seminar, I talked with many students whom I have never talked with before, and I could get new perspectives and ideas. So, I would like to broaden my perspective by interacting with various people. I also learned that communication with people in practice is the best way to know people's needs. So, to help them, I would like to interact with vulnerable people myself and think about what they need.
- As a member of Group C, delivering our presentation on 'Humanitarian Aid' was both rewarding and eye-opening. I would rate our presentation on 10/10: it was solid in terms of both structure and impact. Reflecting on the process from preparation to delivery I will break it down into key aspects. Content: Our opening hooked the audience with a relatable 'Imagine' section. Visuals: Green/yellow tones, as well as simple icons were very effective!
- During the work group sessions, I learned about humanitarian assistance, a lot of disaster situations caused by the factors such as earthquakes, storms and conflicts. I also learned about various perspectives on gender equality, and how to deliver clear presentations. I gained the ability to express my thoughts in English and to accept the thoughts of others.
- Regarding the final presentation, our group agreed that it was satisfactory. Each group member was able to summarize their own section. We included charts and pictures and kept the text to a minimum, focusing on the important topics. We prepared well for the presentation. We used proper English expressions throughout, delivering a clear, organized presentation with good flow.



分科会 D



Understanding of the Labor Market from Gender Approach

Li YAJIAO, Ph.D.

Assistant Professor, School of International Studies,
Utsunomiya University

Profile:

Yajiao Li is an Assistant Professor in the School of International Studies, Utsunomiya University. Her research interests include gender and political economy, mainly in the Chinese context. She has been working on several projects examining women’s economic rights in developing countries, including how China’s capital accumulation cooperates with patriarchy in the land development and leads to economic disparity and gender gaps, and how middle-class women are involved in debt among the financialization in China.

 **Information**

1. Current Work and Research Topics

I am engaged in education and research at the School of International Studies, the University of Utsunomiya. My research interests include gender and politics-economy, mainly in the Chinese context. I have been working on several projects examining women’s economic rights in developing countries, including how China’s capital accumulation cooperates with patriarchy in the land development and leads to economic disparity and gender gap, and how middle-class women are involved in debt among the financialization in China.



2. Career Path

I began my studies in Japan in 2009. During my time as a student, I took advantage of school vacations to participate in internships. For example, a new media organization that amplifies the voices of Chinese women, and UNFPA Tokyo Office.

Before working as an Assistant Professor in gender and politics-economy at the School of International Studies, the University of Utsunomiya, I was an International Fellow of JSPS at the Institute of Social Science, the University of Tokyo, working on the development of China’s private financial institutions and women in debts. I was also a research fellow at University of Ochanomizu.

3. Main Topics for the Group Work Session

This group will provide an accessible introduction to the long-standing issues of occupational segregation and gender wage gaps. Why do these disparities persist across different societies and economies? The course is designed to help students gain a basic understanding of the labor market by exploring gender inequality in the workplace through both mainstream and feminist economic perspectives, in a way that is easy to follow and open to those without a background in economics.

Through case studies and group discussions, students will reflect on what kinds of labor policies and institutional reforms might promote gender equality and come to understand the basic mechanisms and gendered structures underlying labor markets.

4. Keywords

- Gender equality
- Unpaid work
- Labor market structures

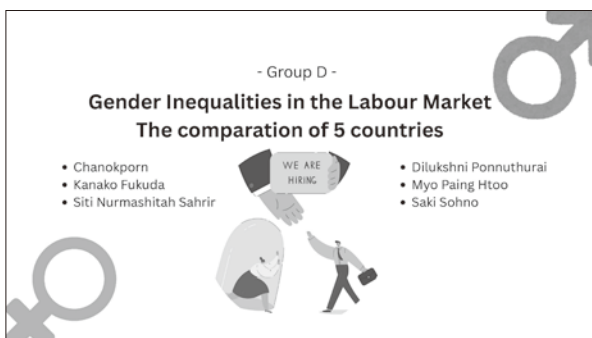
5. References

- LSE event, “Inequality, matters: austerity policies, gender and race “, with Stephanie Seguino, Saphieh Ashtiany and Diane Negra, Chaired by Alan Manning (1hr 31 min.).
<https://www.youtube.com/watch?v=plXuPVbquvQ>
- The ILO’s Short video “What is keeping us from closing the gender gap?”(3 min.)
<https://www.ilo.org/resource/what-keeping-us-closing-gender-gap>
- The Institute for New Economic Thinking’s interview with Stephanie Seguino, “Women Foot the Bill for Economic Growth, Parity Requires Social Investment” (7 min.)
<https://www.ineteconomics.org/perspectives/videos/women-foot-the-bill-for-economic-growth-parity-requires-social-investment>

6. Preparation for Participation

- Chapter 1 The Labor Lens, Women and Work: Feminism, Labor, Social Reproduction, Susan Ferguson, Pluto Press, 2020. <https://drive.google.com/file/d/1W41B0DhXf7Ywgu2cAe4FIM8TtyoY5mO3/view?usp=sharing>
- Chapter 7 Labour Market Inequalities, Feminist Political Economy: A Global Perspective, Sara Cantillon, Odile Mackett, Sara Stevano, Agenda Pub, 2023.
<https://drive.google.com/file/d/1fZPEf30xnCpoyQLttCA5zfDSwiBXd8c/view?usp=sharing>

Final Presentation by Participants



- Group D -

Gender Inequalities in the Labour Market

The comparison of 5 countries

- Chanokporn
- Kanako Fukuda
- Siti Nurmashitah Sahrir
- Dilukshni Ponnuthurai
- Myo Paing Htoo
- Saki Sohno

WE ARE HIRING

Opening


Focus on gender inequalities in the labour market in 5 countries

- Gender wage gap
- Differences of labour conditions
- Solutions



Context


- Gender equality remains a global challenge, but progress varies widely.
- Based on human capital theory, individuals decide how to allocate their time, and the more time they dedicate to a certain type of work, the more skills and specialization they develop in that area (Cantillon, Mackett, & Stevano, 2023, p. 133).
- Influenced by factors such as economic development, education, culture, and policy.
- In many countries, women have made gains in education but still face barriers in the workplace and leadership.
- Common issues: wage gaps, unequal representation, and cultural expectations.



Goals/Purposes

To understand the difference and common points of the problem

- Highlight what we have learned
- How do we solve this problem
- Learn lessons to improve gender equality worldwide



Background

- Introduction to gender gap
- Measuring the Gender Gap.
- Glass ceiling and sticky floor
- Global economy and gender gap

Gender Perspective in Myanmar and Thailand

Myanmar

- Gender wage gap
- Unpaid care job
- Gender gap in the Leadership

Thailand

- Gender wage gap
- Policies
- Gender gap in the Leadership

Japan's gender situation

- Gender Gap Index → 118th out of 148 countries values in politics and economics are quite low
- ↓
- Focused on the labour market
- Gender Wage Gap
Appears from 25-29 age group, women's wage is lower than men
↳ pregnancy, housework, childrasing etc.
- Gender Gap and Leadership
→ Few women in top positions in business and politics

Gender Perspective in Malaysia and Sri Lanka

Malaysia

Labour Force Participations Gap

- Female labour participation (2024): 51.6%, compared to 78.4% for men (The Global Economy, 2024).
- Women are still underrepresented in the formal workforce compared to men.

Cultural Expectations

- Women face the "double burden": managing both work and unpaid care while men are pressured to be the main financial providers

Gender Wage Gap

- Median monthly salary (Q2 2024): Men RM2,782, Women RM2,700 (DOSM, 2024).

Sri Lanka

- According to The **Global Gender Gap Index 2025 ranking**, Sri Lanka is ranked in **130th place** with the score of **0.645** and it has gone behind from the previous ranking. (2024)
- **Why Gender Inequality in Sri Lanka?**

 1. Deeply Entrenched Patriarchal Social Norms
 2. Economic Disparities and Labour Market Challenges
 3. Violence and Safety Concerns

Summary

Country	Gender wage gap	Social protection	Gender gap in the Leadership
Myanmar	Usually receive lower pay than men	Maternity/parental supports are weak.	Leadership positions are mostly held by men
Thailand	Still get lower pay than men	Paternity leave weak or under-used	Women gets less opportunity to become a leader
Japan	Woman get lower pay than men	Maternity leave exists but return-to-work difficulties are common	Few women in top corporate and political positions.
Malaysia	Female labour participation lower than men	Maternity protections exist but structural constraints remain	Women underrepresented in formal workforce leadership.
Sri Lanka	Women face participation barriers	Paternity leave is weakly underutilized. Maternity leave need some reforms.	Low representation in senior level positions

Solutions

- Rethink of labour market theories
- Make new systems to promote women's well performances in labour market
- ↓
- Do not waste women's flexibility or high potential
- ↓
- Better impact on the economy

Conclusion

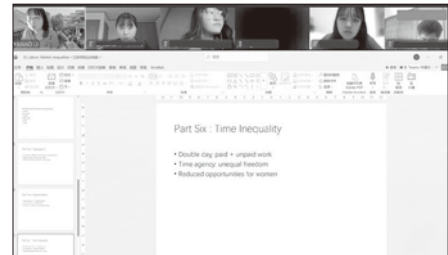
- Each country's labour market has different features
- ☆ **Similarities of gender inequalities in the labour market**
- women receive lower pay than men
- women need to do more unpaid job than men
- women have less chance to get higher status in work place

🌐 Participants' Comments

(Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- Before I joined this program, I had no idea how to solve gender inequality problems, but after the class, I had many ideas to improve this situation.
- It's my first time learning about gender and the explanation by Lecturer Prof. Li was easy for me to understand.
- For group session, I feel so happy and overwhelmed with the support and attitude from my group mates. Not to forget that I got such nice and great lecturer to guide me and my group mates for presentation.
- I'm impressed by how fast the presentation was done when we were working together in such a short time. This really gives me inspiration about how good and important cooperation is.
- It was a nice but short journey with the group members. They were so supportive, and I learned a lot from them.
- Throughout the workgroup sessions, I deepened my understanding of gender equality in the labor market and developed clear opinions on the subject by preparing answers to questions from professors. For example, I recognized traditional gender theories and gender wage gaps and considered the possible solutions to these issues. I also had good experience working on the presentation slides with the members from other countries. This was a valuable opportunity to gain practical experience of working abroad and internationally. My future goal is to work for UNICEF. To achieve this, I need to deepen my studies and gain both basic and academic knowledge. I need to study to acquire knowledge like history, politics and more. I want to study abroad to improve my English. My future goals have not changed as before but my perspective broadened after taking the ICS class.

- The final presentation was a dramatic improvement compared to the rehearsal. The content was more concrete, consistent and easier to understand. Our collaboration was clearly successful. The visual content, especially the summary table, helped the audience to understand, although the other slides were still quite content-heavy. I learned the importance of teamwork and communication through discussions with international students. Working on the presentation slides together and presenting them as a group made me realize that collaborating with people from different backgrounds can create new ideas and improve my English skills. I will continue to practice expressing my opinions in English and try to join more opportunities to work with international students. This will help me to build confidence, and improve my English skills, and to prepare for my future career on the global stage.
- Throughout the lecture by Prof. Li, I learned that gender roles strongly influence job opportunities and income levels. I realized that wage gaps still exist in many countries.
- My future goal is to work for the Embassy of Myanmar located in Japan. Throughout the seminar, my future goal is the same. But now, I also want to continue to promote gender equality and international understanding through my work.



分科会 E



Making Mistakes in Language Learning: The First Step to an International Career

Takayuki KIMURA, Ph.D.

Assistant Professor, School of International Studies,
Utsunomiya University

Profile:

Takayuki Kimura is an Assistant Professor of Linguistics and Second Language Research at Utsunomiya University. He conducts research on the acquisition of second languages, with a particular focus on the grammatical properties that pose challenges to learners. He has presented his findings at more than twenty international conferences to date and is currently engaged in research collaborations with faculty members from universities in the United Kingdom, China, and the United States.

 **Information**

1. Current Work and Research Topics

I currently teach introductory courses in linguistics, applied linguistics (such as first/second language acquisition), and academic English writing at Utsunomiya University. Before joining Utsunomiya University as an Assistant Professor, I served as a post-doctoral researcher at the University of Tokyo. Additionally, I have taught linguistics and English writing courses at Atomi University, Chuo University, Komazawa Women’s University, and the University of Tokyo (as a tutor).



My research has primarily centered around two key questions: i) how do learners develop their grammatical knowledge in a second language? and ii) which properties pose challenges in second language acquisition? Through my investigations, I have uncovered that certain grammatical properties in a second language prove to be exceedingly difficult for even advanced learners to acquire. Additionally, I have made notable discoveries indicating that second language learners are capable of developing their grammatical knowledge in a second language, even in the absence of explicit instruction on the relevant properties.

In my recent projects, where I am collaborating with my students, we are investigating the role of genetically endowed language capacity and the (limited) influence of the first language. Our focus is on examining various linguistic phenomena, including wh-questions, passives, countable and uncountable nouns (e.g., table-s vs. furniture*-s), psychological adjectives (e.g., bored vs. boring), verbal inflections (e.g., -s, -ed), and more. Additionally, I am involved in a collaborative project titled "Semi-Artificial Language Acquisition" with professors from the University of Cambridge and Chuo University. Through these diverse projects, my goal is to gain insights into the process of second language development and explore its limitations.

2. Main Topics for the Group Work Session

The purpose of this session is to help students overcome psychological barriers to communicating in a second language. We will achieve this through discussions on second language learning. It is essential to recognize that many

people around the world speak English as a second language, just like us. Consequently, they also encounter challenges in learning English. Throughout this session, students will explore both the positive and negative aspects of second language learning. By engaging in discussions and activities, students will have the opportunity to reflect on the topic based on the lecture and their own experiences, fostering English communication. Students are encouraged to actively participate in discussions. Our goal is for participants to develop increased confidence and comfort in actively communicating in a second language by the end of this workshop.

3. Keywords

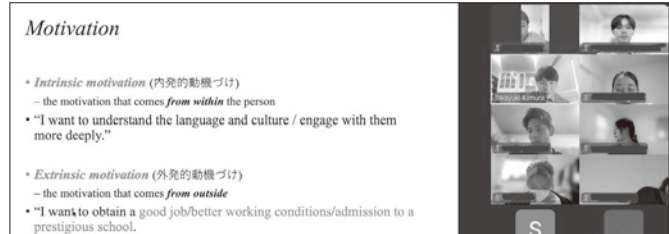
- Second Language Acquisition
- Communication
- Language Learning

4. References

Lightbown, P. & Spada, N. 2013. How Languages are Learned. Oxford University Press.

(For Japanese speakers)

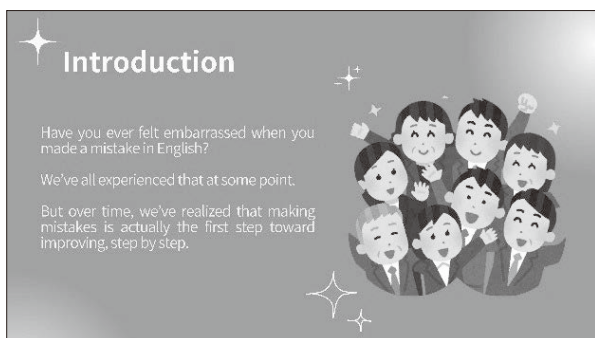
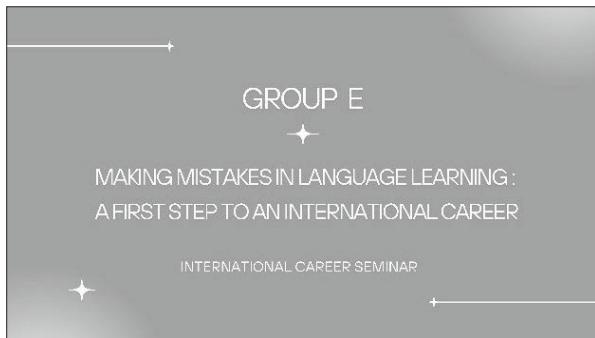
白畑知彦（編）. 2004. 『英語習得の「常識」「非常識」』. 大修館書店.



5. Reading assignment for the participants

- An online article written in English:
 - <https://www.nationalgeographic.com/science/article/second-language-learning-adult-benefits>
- An article written in Japanese:
 - <https://chuo-u.repo.nii.ac.jp/records/13291>

Final Presentation by Participants



Purpose/Goal

Many people in our group mentioned that they don't feel confident, as they worry about making mistakes in communication or feel shy.


One of our purposes is understanding how to gain confidence in English.



Background

More than 1 billion people are English speakers, but more than half of them are not native speakers. (650million)

Learning a second language (L2) is not easy: most of them face the same challenges most of them find learning difficult



What's the problem?

- Psychological barriers
 - Being afraid of speaking English.
 - Making mistakes is embarrassing.**
 - Frustrating when we cannot tell people what we want to say.
 - Studying English is sometimes boring and annoying.
- Limited opportunities
 - We don't have enough opportunities to speak English.**
- Language skills
 - Lack of English skills, pronunciation and vocabulary.
 - We have different accents.**
 - It is difficult for English learners to understand each other.

Action Plans

- Maintaining our motivation
- Making friends
- Practicing




Motivation

intrinsic motivation

= The motivation that comes from within the person.


Ex; I want to understand the language and culture/ engage with them more deeply.



extrinsic motivation

- The motivation that comes from outside.

Ex; I want to obtain a good job / better working conditions / admission to a prestigious school.




Why is motivation important?

We can overcome difficulties and give us the energy to keep studying

Why is intrinsic motivation important


- Makes communication and learning more enjoyable
- Helps us overcome fear of mistakes and frustration
- Leads to confidence, growth, and connection with others

Key Message:
Intrinsic motivation is the strongest power for language learning.



How to retain motivation

- Find interesting things as a source of motivation
- Set small goals and gradually achieve big goals



How to make friends who speak English


- Join exchange events and volunteer and connect online.
- help you practice, build confidence, and learn real culture and expressions.

The key is to **be open and not afraid of mistakes.**



How to overcome the difficulties

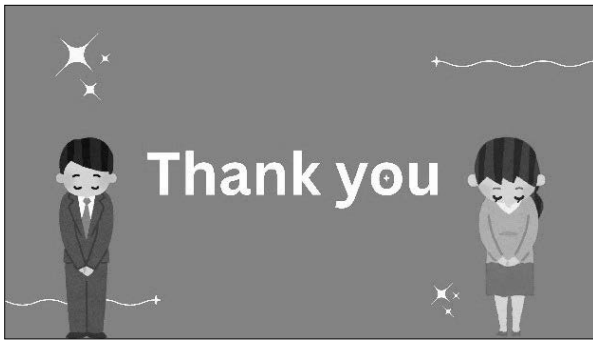
- Using Technology
 - Use AI to practice English and improve skills
 - Use content like YouTube, Instagram, and TikTok
 - Play video games or board games with people (can also make international friends)
- Daily Practice
 - Speak English with friends
 - Watch movies with English subtitles
 - Use English every day (helps us recognize grammar patterns)
- Real-life Experiences
 - Go overseas to practice in authentic environments



Conclusion

- Find your goals**
What do you want to be in the future
- Keep on practising/be consistent**
Learn every day (do not give up)
- Do not be afraid of making mistakes**
The majority of English speakers are L2 Learners, and most of them have the same challenges as we have.





🌐 Participants' Comments

(Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- intrinsic motivation. I sometimes lose my motivation to study English because I get bored to just reading English textbooks. I will start watching English movies and contents in internet so that I can keep motivated.
- I learned that it was more difficult than I expected to communicate and work together with people in English. During the work group sessions, I made a presentation slide with one of our teammates. I struggled with understanding what he said and conveying my thoughts because of the differences of pronunciation between us. During the conversation in pairs, I found it difficult to tell my ideas and thoughts and sometimes felt frustrated. I have two action plans. The first one is that I will challenge myself with everything I want to try, and I will experience many things. These experiences will help me decide what I really want to do in the future. Secondly, I need to develop my communication skills and study some foreign languages to work on a global stage.
- What I learned during the group work sessions is that the majority of English speakers are L2 learners who experience the same difficulties as us. Intrinsic motivation is more important than extrinsic motivation when it comes to continuing to study. We make a lot of grammatical mistakes when communicating, but we can overcome these with practice and by speaking English more often. My action plan is to improve my English further. When I was an intern in Sri Lanka, I interviewed people living in a local community. I realized that my English was not good enough to communicate with them and that I had to study more. That is my intrinsic motivation. One of the action plans for our group is to set our own goals. Improving my English so that I can communicate with people there could be one of my goals, and I am determined to study English harder to achieve it.
- In order to work overseas, I need to improve my English skills, so I'll listen to English every day. To increase opportunities to speak English, I will find and practice in international exchange events, volunteering activities, and so on as much as possible. I don't want to give up my future because of lack of my language skills, so I will keep studying English in efficient ways.
- I learned how to overcome my fear of making mistakes in speaking English. The seminar encouraged me to express my ideas and thoughts in English and to know various perspectives and stay motivated to keep improving my communication skills. Therefore, this experience will help me in my international career in the future. My action plan is to practice English communication every day, actively join discussions, and learn from my mistakes. I will also practice it in international programs such as ICS, to gain real communication experience. I also want to join the international exchange student program to study English in an authentic environment.
- I was able to clarify what obstacles I face when learning a second language by sharing our opinions in the work group sessions.
- No matter what job I choose in the future, I want to be a person who has a good command of English. To achieve this, I need to study English more efficiently and participate in various international events. I want to set some new practical goals based on the opinions that we shared in the group work sessions and take actions on the goals for my international career.
- I successfully completed most of the tasks including reading and note-taking which helped me understand the topic better. Moreover, I could not participate actively in the group discussion because I felt little nervous and wasn't fully confident in expressing my thoughts in English. I realized that I need to practice speaking more so that I can share my ideas more confidently in the future. My current goal is to become more fluent in English and confident in using it for presentations and professional communications, to prepare for my future career. I plan to study consistently; practice speaking and seek opportunities to use English in real situations. Compared to the first day of the seminar, my goal has been clearer. I still want to improve my English more. I will focus on building up concrete English skills and be confident for my future career.
- I learned how to overcome the obstacles of second language learning. Although learning a second language is necessary, it is difficult and takes time to learn a second language. Previously I blamed my situation on having fewer proper opportunities to learn second language, but now I realize it is important to take the initiative to create these opportunities and overcome the obstacles. Focusing on my weakness and creating opportunities to output English will help me to improve my English as well as the same-leveled learners. Not being good at continuing things, I want to use external stimuli, that is extrinsic motivation effectively, to keep myself motivated.

分科会 F



Moving Targets: Indie vs. Commercial Filmmaking in a Fast-Changing World

John CAIRNS

Representative Director,
LANTIS KK

Profile:

John Cairns – International Creator & Cross-Cultural Storyteller

John Cairns is a Tokyo-based filmmaker, writer, and creative director with a passion for telling human-centered stories that cross borders—both culturally and creatively. With a career spanning independent cinema, global advertising, and cutting-edge interactive media, John brings a truly international perspective to storytelling in the digital age.

Born in the U.S., John studied writing and film at the University of Iowa and the Sorbonne, before earning his MFA in filmmaking from Syracuse University. His creative journey eventually led him to Japan, where he built a career at the intersection of East and West. He is the founder of Lantis KK, a boutique Tokyo-based creative studio that develops everything from cinematic narratives to branded content for global audiences.

John's independent films have screened at top genre festivals like Fantasia (Canada) and BIFAN (South Korea), gaining a following for their bold themes and experimental flair. Beyond filmmaking, he has collaborated with international teams on commercials, VR experiences, and music videos, always seeking to bridge artistic vision with cross-cultural understanding.

A passionate educator and mentor, John has taught film and creative media at institutions including Tokyo Film Center, Digital Hollywood, and led narrative editing workshops for YouTube's creator programs. He is especially committed to helping young creators navigate the challenges and opportunities of working across languages, cultures, and industries.

 **Information**

1. Current Work and Creative Focus

At our Tokyo-based creative studio, we develop a wide range of content, including films, games, VR experiences, and interactive media for both commercial clients and our own independent projects. The goal is to explore new forms of storytelling across different platforms while balancing creativity, purpose, and real-world application.



Smaller creative projects, especially those made outside of the big commercial systems, can often bring fresh ideas, new styles, and different cultural perspectives. These kinds of works might not have huge budgets, but they can still make a big impact and help shift how people think about stories and media. We believe that through international collaboration and open-minded teamwork, it's possible to create content that connects across borders and backgrounds.

2. Career Path

My creative path began in the United States, where I studied writing and film at the University of Iowa, followed by further studies in critical theory and cinema at the Paris Center for Critical Studies. After joining the JET Program as

an ALT in Aomori, Japan, I continued my Japanese language studies at the University of Maryland. I later completed an MFA in Film Production at Syracuse University, building a strong foundation in visual storytelling and creative production.

Early in my career, I spent two years in Israel as a volunteer and occasionally worked on film and television sets, gaining hands-on experience and a deeper appreciation for the power of cross-cultural storytelling.

In Japan, I led Monolith Communications, an APAC-based company specializing in live online broadcast events and content production for corporate clients. After selling Monolith, I shifted focus toward more creative ventures and founded Lantis KK, a boutique Tokyo-based studio. At Lantis, we develop narrative content across film, advertising, games, and interactive media, combining artistic exploration with strategic communication

3. Outline of Work Group Session

This hands-on film workshop introduces participants to the exciting (and sometimes chaotic) world of filmmaking. Through real-world examples and creative group activities, we'll explore the key differences between independent and commercial films, two paths that require very different approaches, skill sets, and expectations for success. Understanding this distinction early is crucial, as the creative process, funding models, and routes to fulfillment for each are fundamentally different. Participants will choose to develop one idea for one type of film and plan how to bring them to life, from concept to audience. This session is practical, creative, and open to students of all backgrounds.

4. Keywords

- Logline
- Pitch Deck
- Target Audience
- Creative Control
- Distribution



5. A List of Reference Material

<https://hopeforfilm.com/>

6. Reading Assignment for the Participants

<https://www.storydoc.com/blog/how-to-make-a-film-pitch-deck>

As many of the participants have seen commercial films, I would like them to find and view an independent film of their choice. Here are some suggestions, if they can find them but any independent film is okay.

Frozen River (https://en.wikipedia.org/wiki/Frozen_River)

One Cut of the Dead (https://en.wikipedia.org/wiki/One_Cut_of_the_Dead)

Fish Tank ([https://en.wikipedia.org/wiki/Fish_Tank_\(film\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Fish_Tank_(film)))

Tangerine ([https://en.wikipedia.org/wiki/Tangerine_\(film\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Tangerine_(film)))

The Babadook (https://en.wikipedia.org/wiki/The_Babadook)

Plan 75 (https://en.wikipedia.org/wiki/Plan_75)

Circle Line ([https://en.wikipedia.org/wiki/Circle_Line_\(film\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Circle_Line_(film)))

The Medium ([https://en.wikipedia.org/wiki/The_Medium_\(2021_film\)](https://en.wikipedia.org/wiki/The_Medium_(2021_film)))

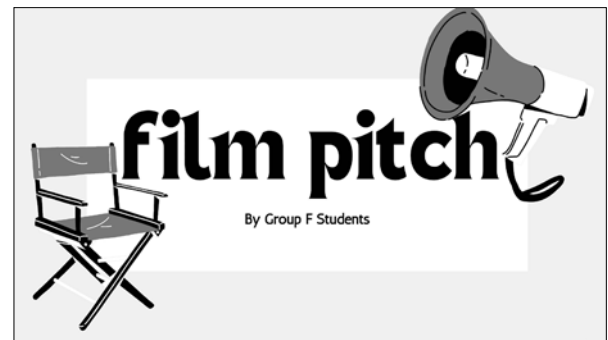
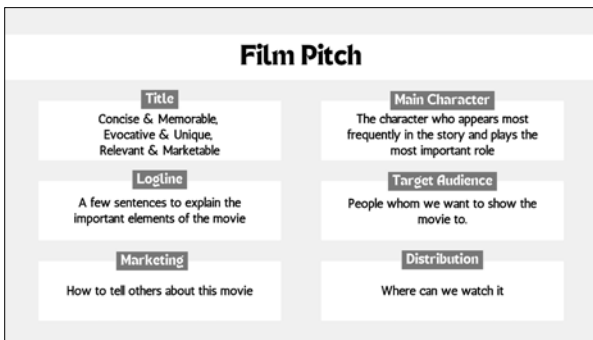
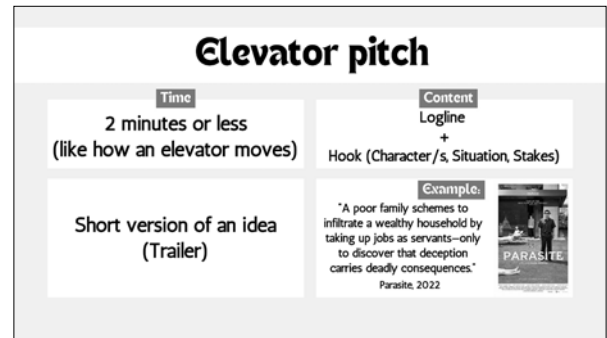
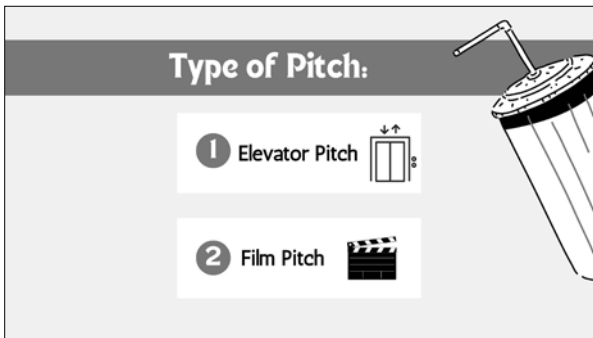
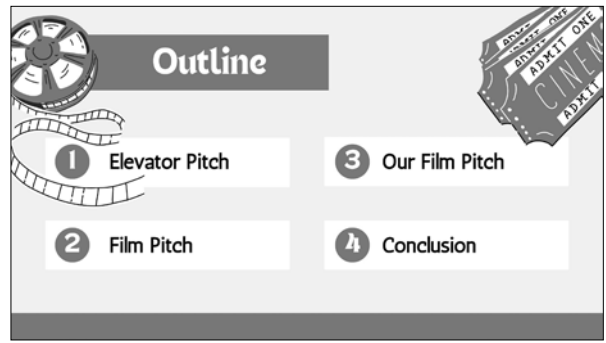
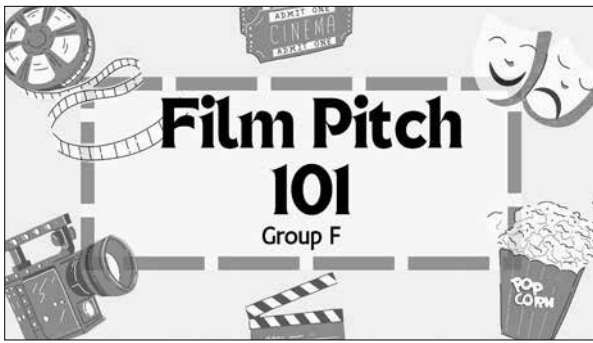
The Long Walk ([https://en.wikipedia.org/wiki/The_Long_Walk_\(2019_film\)](https://en.wikipedia.org/wiki/The_Long_Walk_(2019_film)))

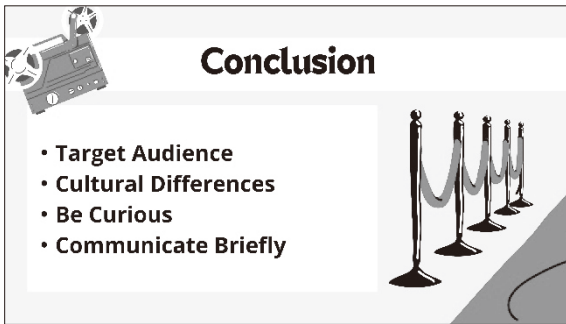
6. Reading Assignment for the Participants

- Film Pitch Development Checklist

https://drive.google.com/file/d/1a-k_1TaWvNz_INoCmRmLMRgjbpcTeZGP/view?usp=sharing

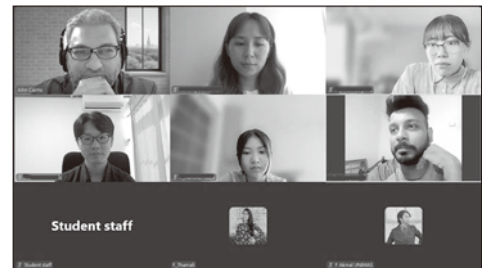
Final Presentation by Participants





Participants' Comments (Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- Through the workgroup session on 'Film Pitch,' I learned the importance of brief communication. From next spring, I will work as a journalist at a local newspaper company and what I learned here will be very useful in my career. I will also keep learning English as I want to interview with foreigners and write articles about them in my career.
- I learned that an elevator pitch is a short presentation (under two minutes) used to explain an idea quickly. A film pitch uses this method to present a movie project. A good film pitch includes 1. Title, 2. Logline, 3. Target audience, and 4. Marketing and Distribution. By learning this method, I improved my ability to summarize ideas, create projects for the audience, and develop my creativity.
- Through the seminar, I learned a lot of important things for my future career and my life. Especially, to speak actively,' which are my own goal in this seminar, and 'elevator pitch,' which my lecturer taught us were very useful to my future career. To achieve these, I will keep curiosity everyday life and deepen my interest. I will also speak actively even though my English skill is not so good. I learned that we could learn it by using it. My dream is to be an international journalist. To achieve this dream, I should improve my English skills, skills for reporting, and the ability to understand things deeply. For these, I want to try IELTS, join club activities, where English is spoken and keep my internship as a journalist intern, and deepen my academic study.
- Through the sessions, I made new friends from different countries. That was very good for me. Thank you.



5. パネルトーク

THEME: Career Development in the Age of Globalization

Panel discussion aims to provide an opportunity for the participants who pursue international careers in the future, to discuss specific problems and the solutions and to present the achievements through the panelists' career paths and experiences. Panelists were asked to present "3 important keywords" related to the theme and explain the reasons why they were important and gave some career advice to the participants.



MC: **Wakana TAKAHASHI** Professor, School of International Studies, Utsunomiya University

<p>PANELIST: Ritter DIAZ Representative Director of the Japan Association for Promotion of Latin America and the Caribbean (JAPOLAC)/ Former Ambassador of Panama to Japan</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. FOCUS 2. DEPTH 3. PERSEVERANCE
<p>What did the participants learn from the panelist?</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Focus: involves giving full attention and dedicating full mental energy to any tasks or goals that you are pursuing. Depth: means digging deeper into your knowledge to build expertise in your field while keeping aware of trends and emerging technologies in other areas to remain adaptable and competitive. Perseverance: means continuing to try hard, not to give up even when facing difficulties, and taking time to complete tasks ■ I want to devote myself fully to my studies and interests. I hope to dig deeper into my areas of interest and learning and broaden my knowledge. Even when I face difficulties in my career path, I want to persevere and continue making efforts without giving up. ■ I was impressed by his words, Focus, Depth, and Perseverance. The idea of lifelong learning and staying patient, like challenging marathons, was inspiring to me. It reminded me to keep challenging myself step by step. 	
<p>PANELIST: Takeshi KOMINO General Secretary of CWS Japan</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. Ownership 2. Empathy 3. Partnership
<p>What did the participants learn from the panelist?</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ I will try to take responsibility for various things as if they were my own. In the field of international cooperation, we often find it difficult to imagine people's lives abroad and tend to view issues as other people's problems. I will bear this in mind and try to see things from various perspectives. We cannot solve any problems alone. I would also like to emphasize the importance of partnerships. ■ I was impressed by his words: life is journey guided by ownership, empathy, and partnership. His message, we all share this planet had a powerful meaning of global responsibility to me. ■ I liked the idea that Prof. Komino described partnership as 'transformational' rather than 'transactional.' This made me realize that teamwork should produce something greater than simply sharing tasks. ■ I was impressed by the idea of a career as a journey guided by ownership, empathy, and partnership. His message that we all share this planet gave me a strong sense of our global responsibility. 	

<p>PANELIST: Motoko ODACHI Program Officer, ADRA Japan</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. Action for social change 2. Solidarity 3. Continuity
<p>What did the participants learn from the panelist?</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ This presentation made me realize how crucial action, solidarity, and continuity are for social change. I respect her view that solving problems requires a long-term commitment to mutual cooperation between countries. ■ After listening to Prof. Odachi’s 20-year history at NGOs, I wanted to find out more about how she feels when interacting with people in need of support in her international work. ■ Her presentation made me realize how important and crucial concepts, action, solidarity, and continuity are, for social changes. I respect her point of view that solving problems requires long-term commitment and cooperation with communities. ■ ‘Action for social change’ is her driving force and main reason for working for NGOs. ‘Solidarity,’ we need to work together with different actors from different countries as social problems are always closely interconnected. ‘Continuity’ is crucial. Since solving social problems takes time, we must continuously work for social justice. 	
<p>PANELIST: Li YAJIAO Assistant Professor, School of International Studies, Utsunomiya University</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. Curiosity 2. Exploration 3. Flexibility
<p>What did the participants learn from the panelist?</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Curiosity: let your interest guide you, even if you don’t yet know the answers. Exploration: Use opportunities like internship to test your strengths and limits. Flexibility: Like bamboo, learn to adapt to changing environments without losing your core. ■ I was impressed by how the lecture was motivated in her career. She turned all her experiences into her future goals. ■ Her speech about curiosity, exploration and flexibility made me realize that being open-minded and adaptable can create more opportunities for our growth. ■ I felt these three key words are closely connected; Be curious, take an adventure, and respond flexibly whatever I go. I think this is very important in career development. As we grow up, we tend to think realistically and stop taking a challenge, however, these experiences will broaden our possibilities and allow us to respond flexibly to whatever we encounter 	
<p>PANELIST: Takayuki KIMURA Assistant Professor, School of International Studies, Utsunomiya University</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. English as a second language 2. Intrinsic motivation 3. Extrinsic motivation
<p>What did the participants learn from the panelist?</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ I learned that ‘poor English’ can still be changed into a powerful tool if we keep learning and stay motivated and that second language learning can be the first step to international career. ■ Intrinsic motivation creates positive thinking and develops our career path. I want to keep challenging and trying language learning nevertheless of my poor English. ■ Since I have been struggling with second language acquisition for several years, his research is interesting and attractive to me. ■ I want to study deeply how the learners acquire their grammatical knowledge in second language learning. ■ Keep going on what you really want to do, that will be a trigger most important thing is start moving if your motivation isn’t high keep moving. Staying motivated is the key to achieving your dreams. 	



<p>PANELIST: John CAIRNS Representative Director, LANTIS KK</p>	<p>1. Independent 2. Commercial 3. Audience</p>
<p>What did the participants learn from the panelist?</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ I believe that through international collaboration and open-minded teamwork, it is possible to create content that connects across borders and backgrounds. ■ Independent: free from control and influence, able to think or act for oneself. Commercial: related to business, trade, or making a profit through making a movie by their own. Audience: a group of people who watch, listen to, or are targeted something such as performance, broadcast, or message. ■ Understanding concepts of their work and for whom is very important. Technologies and audiences are always changing, and we should adapt to these changes and should become independent from others. Keeping this in mind, I want to brush up on my presentation skills. ■ I found it interesting how he connects independence with a commercial perspective and the importance of audiences. His talk showed that balancing these aspects is essential for communicating effectively in the real world, in daily life. ■ I learned that it is important to listen to the opinions of those who evaluate me and make improvements quickly. I also realized that it is important to be able to explain my actions and act responsibly. 	



🌐 Participants' Comments (Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- I believe that it is not easy to keep on being a leader, especially in a place where we are still trying to adapt. So, I loved the quotation on how we should build ourselves as a leader by Dr. Diaz
- I was glad that I got a lot of information from the panelists who had various backgrounds. I wanted to ask and know deeper how the panelists overcame the obstacles they face and kept motivated in their career path.
- I want to take on challenges without being afraid of making mistakes. I would like to look at things from various perspectives, not limited to my own.
- I learned wide range of the panelists' experiences. All of them have experienced many things and obstacles in order to achieve their goals. I found that any kind of experiences are useful for my own life. I want to try things without just thinking about it. I want to try to get opportunities which I find I want to do in my university days.
- I learned through the panels that, to achieve my future goals, it is important to know myself first, and need to focus on what I want to do.
- I was impressed by the variety of their perspectives. That reminded me that career paths are not limited to one but are shaped by each person's values and choices. I found that the idea of linking empathy and solidarity in long-term actions is very meaningful.

附表

1. 修了者名簿

国際キャリア教育

	氏名	大学等	学年
1	朝夷 柊友	宇都宮大学国際学部	3
2	石澤 花楓	宇都宮大学国際学部	3
3	入澤 美緒	宇都宮大学国際学部	2
4	岩井 鼓乃実	宇都宮大学国際学部	3
5	岩崎 央華	宇都宮大学農学部	2
6	及川 結希加	宇都宮大学国際学部	1
7	大内 美結	宇都宮大学国際学部	2
8	大久保 悠斗	宇都宮大学国際学部	2
9	太田 琉星	宇都宮大学国際学部	3
10	大原 よしの	宇都宮大学国際学部	1
11	大松 葵	宇都宮大学国際学部	2
12	大森 まひる	宇都宮大学農学部	3
13	小川 祈叶	宇都宮大学国際学部	1
14	小倉 咲花	宇都宮大学国際学部	2
15	上遠野 涼音	宇都宮大学国際学部	3
16	菅野 摩耶	宇都宮大学国際学部	4
17	岸本 紀香	宇都宮大学国際学部	2
18	GUIMA MUR RYE LAURA	宇都宮大学国際学部	2
19	喜友名 サマンタ	宇都宮大学国際学部	1
20	金野 里梨子	宇都宮大学国際学部	1
21	熊谷 佐和	宇都宮大学国際学部	1
22	栗田 悠菜	宇都宮大学国際学部	1
23	黒川 結愛	宇都宮大学国際学部	1
24	小池 瑠莉	宇都宮大学国際学部	2
25	小島 結子	宇都宮大学国際学部	1
26	小松崎 美妃	宇都宮大学国際学部	1
27	齋藤 大豊	宇都宮大学国際学部	2
28	佐藤 成美	宇都宮大学国際学部	3
29	佐藤 春奈	宇都宮大学国際学部	1
30	佐藤 里桜	宇都宮大学国際学部	2
31	塩崎 大希	宇都宮大学データサイエンス経営学部	2
32	鈴木 琉那	宇都宮大学国際学部	2
33	須田 蒼依	宇都宮大学国際学部	2
34	周藤 花佳	宇都宮大学国際学部	2
35	高久 桃花	宇都宮大学国際学部	3
36	田崎 実徳	宇都宮大学国際学部	3
37	田部 明日花	宇都宮大学国際学部	2
38	出越 紗矢	宇都宮大学国際学部	2
39	手島 志乃	宇都宮大学国際学部	3
40	豊田 瑠奈	宇都宮大学国際学部	3

	氏名	大学等	学年
41	中田 和夏	宇都宮大学国際学部	1
42	中村 元紀	宇都宮大学農学部	3
43	中山 和香	宇都宮大学国際学部	4
44	永山 眞南美	宇都宮大学国際学部	2
45	花塚 ひとみ	宇都宮大学国際学部	4
46	早川 詩乃	宇都宮大学国際学部	2
47	原田 実花子	宇都宮大学国際学部	3
48	福山 叶望	宇都宮大学国際学部	2
49	藤田 沙季	宇都宮大学国際学部	1
50	宮澤 咲希	宇都宮大学国際学部	1
51	村越 結衣	宇都宮大学農学部	3
52	屋敷 亮太	宇都宮大学工学部	3
53	柳瀬 健志	宇都宮大学農学部	4
54	山口 ゆい	宇都宮大学国際学部	4
55	山中 若菜	宇都宮大学国際学部	2
56	吉田 有里奈	宇都宮大学国際学部	2
57	米本 心夏	宇都宮大学国際学部	1
58	ラフォンテーヌ 沙羅	宇都宮大学国際学部	2
59	若本 果歩	宇都宮大学国際学部	3
60	和田 伊織	宇都宮大学国際学部	2
61	佐藤 みゆり	国際医療福祉大学	3
62	小堀 絆菜	宇都宮短期大学附属高等学校	3
63	田上 春奈	足利大学	4
64	Poorna Wishvanath	ケラニヤ大学	4
65	Waruni Rasangi	ケラニヤ大学	4
66	Nethmi Tharushika	ケラニヤ大学	4
67	Matahathai Kochasena	タマサート大学	4
68	Chalisara Chatchawanpinya	タマサート大学	3

修了者数	合計 68 名
宇都宮大学	60 名
高校生	1 名
国際医療福祉大学	1 名
足利大学	1 名
ケラニヤ大学 (スリランカ)	3 名
タマサート大学 (タイ)	2 名

International Career Seminar

	氏名	大学等	学年
1	青柳 心音	宇都宮大学国際学部	1
2	朝夷 柊友	宇都宮大学国際学部	3
3	入澤 美緒	宇都宮大学国際学部	2
4	太田 琉星	宇都宮大学国際学部	3
5	小倉 咲花	宇都宮大学国際学部	2
6	尾山 優希	宇都宮大学国際学部	2
7	黒澤 桜子	宇都宮大学国際学部	2
8	河野 結愛	宇都宮大学国際学部	2
9	塩崎 大希	宇都宮大学データサイエンス経営学部	2
10	瀬川 ひかり	宇都宮大学国際学部	4
11	宗野 桜己	宇都宮大学国際学部	2
12	豊田 瑠奈	宇都宮大学国際学部	3
13	蓮井 菜乃花	宇都宮大学国際学部	2
14	花塚 ひとみ	宇都宮大学国際学部	4
15	早川 詩乃	宇都宮大学国際学部	2
16	Fadhliyatul Insyirah	宇都宮大学国際学部	1
17	福田 華菜子	宇都宮大学国際学部	1
18	MYO PAING HTOO	宇都宮大学国際学部	1
19	MUHAMMAD RAFFIQ BIN AHMAD FAISAL NIZA	宇都宮大学国際学部	1
20	Munkhtur Dolgorsuren	宇都宮大学国際学部	2
21	安田 雛乃	宇都宮大学国際学部	2
22	柳瀬 健志	宇都宮大学農学部	4
23	山口 ゆい	宇都宮大学国際学部	4
24	Saberon Marie	茨城県立石岡第二高等学校	2
25	R.A. Nadini D. Amarasinghe	University of Peradeniya	4
26	P. Lakmi Sadeepa Gunasekara	University of Peradeniya	4
27	M.G. Harsha D. Premachandra	University of Peradeniya	4
28	D.M.N. Abeysinghe	University of Peradeniya	3
29	S. Sivasanthiya	University of Peradeniya	3
30	W.M.S.Y. Wijekoon	University of Peradeniya	3
31	P. Dilukshini	University of Peradeniya	3
32	M.J.M. Rajay	University of Peradeniya	3
33	P.V. Pabasara Samodana	University of Peradeniya	4
34	Welda Eliana Jimmy	Universiti Malaysia Sarawak	3
35	Diveena Nair Sekhar	Universiti Malaysia Sarawak	2
36	Siti Nurmashitah binti Sahrir	Universiti Malaysia Sarawak	3
37	Sherah Wati binti Awang Hamid	Universiti Malaysia Sarawak	3
38	Mohamad Akmal bin Husin	Universiti Malaysia Sarawak	2
39	Nattapon Pitayawong	Thammasat University	4
40	Chanokporn Tissapongkul	Thammasat University	3

	氏名	大学等	学年
41	Sroeu Kimlay	Royal University of Phnom Penh	1

修了者数	合計 41 名
宇都宮大学	23 名
高校生	1 名
ペラデニヤ大学(スリランカ)	9 名
サラワク大学(マレーシア)	5 名
タマサート大学(タイ)	2 名
王立プノンペン大学(カンボジア)	1 名

2. 参加者全体コメント

国際キャリア教育

参加の感想（コメントは原文のまま記載しています。）

- 学びしかないセミナーだった。分科会の活動では、自分の中にあつた夢へのヒントが沢山あり、これからどのように行動していけばよいのか、何を大事にしていけばよいのか、とにかく収穫の多い分科会であった。セミナー全体を通じては、先輩後輩との交流が多く、様々な視点からの考えに触れ、自分の視野が広がったのを感じた。特に、先輩方の考えやアイスブレイクの時の進行が印象に残っており、経験からくるものなのだろうと思い、私の憧れ、そして目標となり、自分自身も努力していこうと強く思った。とにかく刺激の多い充実したセミナーで受講して良かったと思う。
- 一番心に響いたのは、「挑戦することの大切さ」である。私はとにかく挑戦することが怖くてあらゆる言い訳を探して避けてしまうことが多かった。しかし、「挑戦をしないと始まらない」ということに改めて気づけた。挑戦して初めて失敗や成功、気づきが生まれ、学ぶことができる。また、「誰も取り残さない社会」という言葉が胸に響いた。自分にある漠然とした夢や目標が、「誰も取り残さない社会」の実現への手助けになるのか改めて考え直すことができた。「国際キャリア」という自分にとって漠然としていた言葉が、今回のセミナーを通じて、やはり規模の大きいものだが自分にもできることが沢山あると気づかされ、ワクワクした気持ちになるとともに、将来の自分がどうなっているか楽しみになった。
- 3日間のオンライン集中講義を通して、多くの学びを得た。国際的に仕事をするには、オンラインでの環境にも慣れて発言できることが必須であると感じた。途中、意思表示を躊躇してしまうことがあったが、具体的な解決策を考え実践することができた。今後も、オンラインで海外の人々に関わる機会は数多くあると思うので、将来のためにも、少しずつ克服していけるよう実践し続けていきたい。
- 現在はグローバルに働きたいという将来の目標がある中で、具体的にどう関わっていききたいのか、どのような職種で働きたいのか、グローバルに働くとは何なのか、様々な考えに触れた。それらを踏まえ、今後は、自分の興味や強みを活かせる分野を見極めつつ、国際的な環境での具体的な働き方(海外を拠点にするのか、外資系企業で働くのか)について情報収集を重ねていきたい。語学力や異文化理解といったスキルを高めるだけでなく、どのような価値を提供できる人材になりたいのか、自分なりのビジョンを明確にしていきたい。これらの気づきをもとに、目の前の学びや経験を将来にどうつなげていきたいのか意識しながら、計画的にキャリア形成に取り組んでいきたい。
- 今回のセミナーを通じて、将来のキャリアを具体的に考えるきっかけを得ることができた。実際に就職活動を経験した講師の方のアドバイスや体験談は非常に参考になり、今後のキャリア形成に活かせる学びが多くあった。「グローバルに働く」とはどういうことなのか具体的に考える機会にもなり、自分の将来像をより明確に描くための視点を広げることができた。また、自分の興味関心や強みを改めて見つめ直す機会ともなった。今回の貴重な経験を活かし、自分にとっての「グローバルな働き方」とはなにかを更に深く考え、具体的なキャリアプランに繋げていきたい。
- 会社に勤め続けることだけがキャリアではないと学んだ。自分のやりたいことを明確にし、そのために必要なことは何か、様々な人と会話をし交流していくこと。知らない、興味のない分野だとしても一旦挑戦してみる。分野や立場の異なる人との出会いが新しい道やチャンスを生むことを知った。異文化理解や国際交流、国際キャリアに関して幅広い学びを得た。異なる文化や背景を持つ人々に関わる際、特に自分がマジョリティである場合、相手の立場や考えを理解し共感する姿勢が大切であることを実感した。言語、コミュニケーション、教育制度、偏見といった色々な課題に対して多角的に考え、適切に行動する視点も身に付けられた。特に印象的だったのは、キム先生の考え方で、運をどのように前向きに捉え自分の糧とするのか。そして、その運を自分のものにするためには、そもそも行動しないと何も変わらないこと。普段自分が関わらないコミュニティーに飛び込んでみたり、授業をとってみたりするなど、「安全地帯」から抜け出す行動をとっていきたい。

International Career Seminar

Participants' Comments (Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- Please continue to conduct this seminar for future years. It was really valuable to learn about the different areas we need to know about when working in the real world. Thank you for inviting us and for conducting this seminar, which was really helpful for our careers.
- Overall, I really enjoyed all of the contents of this seminar, including the group work, presentations, ice-breaker section and breakout room sessions. I think that talking in front of many people is sometimes difficult, especially for Japanese people. However, when we went to the breakout rooms, many Japanese students felt more comfortable and gained more confidence. I wish I had had more time to talk to and work with everyone. Thank you for this wonderful seminar. I cannot wait to recommend it to my juniors and share my experience with them.
- This program made me aware of global issues such as climate change and gender equality. It is very beneficial for the participants to learn how to have a positive impact on the issues we face. The program also enabled me to expand my global network of friends and panel speakers from different countries and fields.
- Actually, it is the best program that I have ever attended. It was my first international workshop, and I am very pleased to have been there. I learned a lot and found it very useful and meaningful.
- I learned how to communicate effectively in an international context. I learnt that, although language is important, it is not everything. Mutual respect, adaptability, and understanding are more essential for effective international communication.
- The program provides students with opportunities to collaborate with people from various countries and backgrounds. The panels are so inspiring and motivational. The panelists have been working hard to guide and share their knowledge and insights to help us with our future career.
- I was able to exchange ideas and thoughts with group members who are not only from Japan, but also from other countries like Thailand, Cambodia, and so on.
- I learned that it is important to express my opinions, even when meeting new people. This is because you cannot get to know each other if you don't communicate. Since we created a slide in pairs and had plenty of time to work together, we were able to talk to each other. This helped us to get to know each other and made our communication easier.
- Working and having discussions with people from different countries helped us to develop mutual understanding, empathy, and effective communication skills. Different backgrounds create various different perspectives even when talking about the same topics or themes. In this regard, my action plan is to develop my public speaking and communication skills, especially in a global setting, and to improve my networking skills. I also plan to attend more international conferences and volunteer events, and to build my CV through internships and volunteering at international organizations.
- To develop my future career, I would like to take university courses related to armed conflict, international cooperation, and gender issues. I would also like to participate in internships related to international cooperation roles. After graduating, rather than working abroad, I would like to pursue a career in Japan, where I can apply what I have learnt at university.
- I learned many stories about different international career paths and the skills needed to succeed in a global setting. I gained practical knowledge of networking, effective communication, and teamwork in an international context. The seminar also helped me to understand the importance of clearly presenting ideas in English and actively engaging in discussions, enhancing both my confidence and my ability to express myself in professional settings.
- I am very satisfied with all of the content of this seminar. Although I was very nervous on the first day, the icebreaker Bingo game with the other participants made me feel much more relaxed. I also learned a lot through the panel discussion and group sessions. This seminar has motivated me to work harder at studying English harder and start thinking about my future career.
- I gained a lot of valuable experience through the seminar. As it was held online, people from overseas were able to participate, making it easy for us to exchange our own opinions and ideas internationally. I am very glad that I was able to participate in the seminar. I hope that the seminar continues so that many juniors can have these valuable experiences too.

第2部

国際キャリア実習

国際キャリア実習

1. 令和7年度夏期「国際キャリア実習」実施要項

1. 趣旨・目的

- ① 趣旨： 本「実習」は、グローバルマインドを養う「グローバル人材」の育成のために行われる国際学部の「国際キャリア教育プログラム」の一環として行われるものです。「国際キャリア教育プログラム」では「国際ビジネス」、「国際協力・国際貢献」、「多文化共生と日本」、「異文化理解・コミュニケーション」の4つのテーマを掲げていますが、本「実習」では、特に「国際協力・国際貢献」や「異文化理解・コミュニケーション」の分野で活躍することを目指して、海外のNGOや公的機関でインターンとして実習経験を積み、実務能力を高めます。
- ② 目的： 本「実習」は、「国際キャリア教育プログラム」の次の3つの目的を達成させるために、現場体験、実習経験を積み、実務能力、企画力とコミュニケーション力を高めます。さらに、自分の関心分野や専門性をより明確にします。
- 「働くとは何か」について考える。
(Grasp the image of "working in society with motivation.")
 - 自分と地域社会や世界とのつながりを考える。
(Provide opportunities to think about your roles in local and global societies.)
 - 主体的に関わりたい問題や分野を見つけ、今後の学びの動機を考える。
(Find motivation to actively pursue your career.)

2. 実施時期・期間、募集人数

- ① 時期：2025(令和7)年8月～9月
- ② 期間：約2～4週間(実習先のスケジュールによる)
- ③ 実習日：原則、土日を除く実質10日間(1日8時間)。なお、実習先の活動状況により、土日も勤務する場合がある。
- ④ 募集人数：夏期 若干名

3. 実習先団体

- ① 実習先団体は、南アジア、東南アジアおよびアフリカで国際協力活動を実施している政府機関やNGO。詳細は、「別紙」の受入団体一覧を参照のこと。
- ② 実習先団体に追加・変更・中止が生じた場合は、国際学部「国際キャリア教育プログラム」のHP(<https://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program>)等で通知する。
- ③ 実習内容は、場合によっては、変更されることがあるので、事前に実習先に確認する。
- ④ 実習先団体のやむを得ない事情、または実習国の政治・治安情勢の悪化や大規模な自然災害の勃発、感染症の発生等により、実習国の変更、または実習を中止し、緊急に帰国する事がある。

4. 応募および参加の条件

- ① 応募の時点で次の全ての条件を満たしていること。
1. 国際学部の2年生から4年生(実施期間中に休学中の者は除く)であること。
 2. 心身ともに健康である者。(本学所定の健康診断を受診していること。受診していない場合は、病院等で受診(有料)し、応募時に健康診断書(有料)を必ず提出すること)
 3. 法定の予防接種(三種混合・結核・ポリオ・風疹・麻疹・日本脳炎など)を受けていること(不明な場合は「母子手帳」を持参して保健管理センター等で確認すること)。

4. 本学指定の「学生教育研究災害傷害保険（学研災）」、「学研災付帯賠償責任保険（学研賠）」、及び、「学研災付帯課外留学保険（付帯海学）」に加入していること。
 5. 実習先団体が求める語学力を有していること。
 6. 参加動機および実習目的が明確であること。
 7. 本「実習」への参加について、保護者または家族から事前了解が確実に得られていること。
 8. 本「実習」実施国への渡航が可能であること（外務省の「海外危険情報」および「感染症危険情報」が「レベル1」以下であること）。
- ② 実習前までに次の全ての条件を満たしていること。
- 本学実施の健康診断（未受診の場合は各自医療機関にて受診）を受診し、必要に応じて保健管理センターでの面談を受けていること。
 - 国際学部及び全学で実施のオリエンテーションや事前研修（ビジネス・マナーおよび危機管理）に参加していること。
 - 本学指定の「学研災付帯海外留学保険」に加入し、「アイラック安心サポートデスク」の安全確認アプリ『Pro Finder』をダウンロードしていること
 - 「国際学部同窓会」の会員であること。（本「実習」は、国際学部同窓会から助成金を受けているため、非会員の場合は渡航前に入会すること。但し、同窓会からの助成を希望しない場合はこの限りではない。申請時にその旨申し出ること。
 - 接種していない法定予防接種がある場合、および実習受入団体が指定する予防接種があれば、出発までに接種（有料）していること。
 - 外務省の「海外危険情報」および「感染症危険情報」が「レベル1」以下であること（これらの「情報」が「レベル2」以上となった場合、実習は「中止」となる）。
- ③ 帰国後に次の全ての条件をみたとすこと
- 必要書類（報告書や領収書など）を期日までに提出すること。
 - 報告会での発表（プレゼンテーション）
 - 国際学部同窓会への報告（必要に応じて）
- ④ 参加者自身の国籍と同じ国での実習を希望する者は、応募できない。

5. 参加費

- ① 自己負担の原則
- 「本「実習」への参加および現地での実習にかかる諸経費は、全額自己負担を原則とする。ただし、国際学部が渡航費の一部を助成金として支援する場合がある（詳細は次項を参照）
- ② 諸経費の内訳（例）：
- 渡航費（往復航空券代、国内交通費、海外旅行傷害保険料、旅券・査証等の取得経費）
 - 国内事前研修費（交通費・宿泊費など ※受入団体による）
 - 現地滞在費（宿泊費・食費・交通費など ※受入団体による）
 - 予防接種代（※実習国による）
 - 実習参加費（※受入団体による）
 - 実習にかかる諸経費（地方視察時の国内交通費など ※受入団体による）
- ③ 留意点
- 参加費の大半を占めると思われる渡航費の中でも、往復航空券代は、利用する航空会社や航空券の種別、購入時期によって大きく変動する。
 - 現地滞在費についても、受入団体の事情によって、宿泊先（一般のホテル、受入先団体の宿泊施設、現地スタッフ宅でのホームステイなど）が異なるため、宿泊費や食費も大きく変動する。

- 受入団体によっては、現地でのインターンシップ参加にあたって、参加費の支払いや日本国内での事前研修が求められる場合がある。
- 日本国内または渡航先のコロナ禍の状況、あるいは、現地の治安状況や自然災害などの影響によって、実習が急きょ中止になる場合や、実習中の状況の変化により、実習を中止して、大学から緊急帰国が要請される場合がある。

6. 国際学部からの渡航費補助への申請

① 渡航費補助について

- 渡航費補助の支給額は、本「実習」の海外実習に参加するための往復航空賃、空港税、空港施設使用料、旅客保安サービス料、燃油付加運賃及び発券手数料に相当する額の8割を上限として決定する。ただし、予算の都合により、支給の上限額を調整し、応募の状況によっては、選考を行う場合がある。
- 往復航空賃は、日本国内の最寄りの国際空港から、実習先の最寄りの国際空港間の最も経済的かつ常識的な経路によるエコノミー・クラスの割引または格安航空券代とする。
- 渡航費補助は、実習を終了し帰国した後、航空券代等の内訳が明記された領収書（原本）の提出後から、1～2ヶ月後に大学から各自の個人口座に振り込まれる。

② 申請の手続き

- 「国際キャリア実習」の応募書類の提出をもって、渡航費補助の申請に代える。

③ 支給の要件

渡航費補助の支給を受けるには、次の要件をすべて満たすこと

- 必要な手続き書類等の期限内の提出や事務手続の迅速な履行
- 担当教員や受入先団体との事務連絡は迅速に行うこと（特にメールへの返信）
- ただし緊急時を除き、連絡は電子メールで行うこと（LINEなどのSNSは使用しない）
- 事前研修の参加（詳細は後日案内）
- 保健管理センターでの面談（母子手帳持参）
- 実習先到着時、実習開始1週間後、帰国時には担当教員に連絡すること
- 「実習日報」および「報告書」の提出（帰国後2週間以内）

④ 「とちぎグローバル人材育成プログラム」について

「大学コンソーシアムとちぎ」が実施する「とちぎグローバル人材育成プログラム」に応募し、支援金の受給が決定した場合には、国際学部からの渡航費補助を受給することはできない。

7. 単位認定

- ① 現地での80時間以上の実習を終了し、単位認定に必要な書類（報告書、実習日報等）を全て提出した学生は、担当教員の成績評価に応じて「国際キャリア実習」の2単位が認定される。
- ② 単位認定に必要な実習時間数（80時間以上）を満たすように実習計画を立てること。
- ③ すでに「国際キャリア実習」を履修済みの学生は、再履修となり過去の成績は抹消される。

8. 応募方法

以下の応募書類を提出期限までに国際キャリア教育プログラム事務局（峰キャンパス事務部国際学部係内）にメールあるいは持参にて提出すること。

- 参加申込書・自己紹介書（実習希望先団体に資料として提出する場合がある。）
- 自己紹介・応募動機書（実習希望先団体に資料として提出する場合がある。）

- 健康診断書（今年度実施の本学の健康診断を受診している場合は不要。受診していない場合は、最寄りの病院等で健康診断を受診〔有料〕の上、診断結果を提出すること。）

9. 参加者の選考および決定

① 選考方法

参加者は、書類審査と面接より選考する。なお、応募者が多数で、審査結果が拮抗する場合は、以下の優先基準を適用する。

- 上級生を優先する。
- 「国際キャリア教育セミナー」および「International Career Seminar」の履修済者を優先する。
- その他のグローバル人材育成プログラム「Learning+1」の履修済者を優先する。
- 過去に「国際キャリア実習」または「国際インターンシップ」に参加したことのある者が再度応募する場合、選考結果が同順位の場合、初めての応募者を優先する。

② 一次審査について

- 一次審査（面接）実施日：応募書類提出後に随時実施（日時は個別に応募者に連絡）
- 審査の結果は、応募者本人に、一次審査後の一週間以内に電話又は e-mail で連絡する。
- 実習希望先団体との面接が不要な者は、最終審査の面接を免除する。

③ 実習希望先団体との面接について

- 一次審査合格者のうち、実習希望先団体との面接等が必要な者は、所定の期日までに、実習希望先団体との面接等を受けるものとする（面接等にかかる経費は自己負担とする）。所定の期日までに実習希望先団体の面接等を受けなかった場合は、最終審査対象者としての資格を失う。

④ 最終審査について

- 実習希望先団体との面接を終了した者について、最終審査の面接を実施する。
- 面接免除者も含めた最終審査の結果は、後日、応募者本人に書面で通知する。

10. その他の注意事項

- 参加決定後の自己都合による実習先の変更は、原則として認めない。
- 派遣先での実習前後の個人旅行は認めない。
- 海外渡航時や現地実習時には、危機管理や健康管理に十分留意して、事件や事故との遭遇を極力回避し、感染症を予防する努力を怠らないこと。
- 自己責任において、実習先に作業用パソコンを持参することが望ましい。
- 実習国の治安状況や健康管理に関する情報は、信頼のおける以下のサイトなどを参照しておくこと。
外務省「海外安全ホームページ」<http://www.anzen.mofa.go.jp/>
外務省「海外安全劇場」<http://www.anzen.mofa.go.jp/video/index.html>
厚生労働省検疫所「FORTH：海外で健康に過ごすために」<http://www.forth.go.jp/index.html>

2. 令和6年度春期・令和7年度夏期受入団体および実習概要一覧

	団体名	所属地 (本部)	実習国・実習地	実習概要
1	Agradaya インドネシアの小規模農家と協働し、ハーブとスパイスを基盤としたバイオ医薬品用植物の開発と持続可能な生産を推進する企業。	インドネシア ジョグジャカルタ	インドネシア ジョグジャカルタ	製品開発のサポート、日本市場の理解に向けたリサーチ、国際基準適合に向けた製品評価と改良の協働参加
2	セワランカ スリランカ最大の現地 NGO の一つ。宇大国際学部実施 JICA 草の根技術協力事業「プランテーション農園の小学校への課外活動支援」プロジェクト (UU-TEA Project) の現地パートナー組織。	スリランカ ハットン	スリランカ ハットン	プロジェクト対象学校でのモニタリングと広報補佐及び日本文化紹介
3	公益財団法人国際開発救援財団 (FIDR) 発展途上国の子どもたちのために、国際協力、援助事業、緊急援助事業、広報啓発事業を行う公益財団法人。	東京 千代田区	ベトナム ダナン	ベトナム中部発展型農村総合開発事業のサポートを中心とした業務を行う。(基本はダナン事務所に勤務。事務所スタッフとクアンナム省へ出張)
4	クラタ・ペッパー (KURATA PEPPER Co. Ltd.) 古い歴史があり、ヨーロッパでは最高品質として有名であるカンボジアの胡椒が、内戦により農園は壊滅。その「世界一美味しい胡椒」を復活させようと、産地農家を回り、地元の人々と共に、胡椒農園を広げた胡椒農園経営・胡椒卸販売の民間企業。	カンボジア プノンペン	カンボジア プノンペン	事務作業補助、選別作業、畑研修 ※農業研修は、本人が望めば男性でも女性でも OK。

3. これまでの受入団体および実習概要一覧

	団体名	所属地 (本部)	実習国・実習地	実習概要
1	JICA スリランカ事務所 独立行政法人国際協力機構スリランカ事務所。総合的な政府開発援助 (ODA) の実施機関。	東京都 千代田区	スリランカ コロンボおよびスリランカ国内事業地	広報を中心とした事務所事務作業補助(場合によっては地方プロジェクト出張同行)

	団体名	所属地 (本部)	実習国・実習地	実習概要
2	NGO サルボダヤ運動本部 農村村民の自立を目指し、有機農業の振興、母子保健衛生、マイクロクレジット等の活動を先駆的展開するアジア地域でも最も成果を挙げている NGO。	スリランカ モラトゥワ	スリランカ モラトゥワ	本部国際部事務作業補助
3	特定非営利活動法人 ラオスのこども ラオスの子供達の教育環境の向上を願い、日本および現地ラオスで活動を行っている国際協力 NGO (特定非営利活動法人)。	東京都 大田区	ラオス	ラオスのスタッフのアシスタント(セミナー・教材準備、図書室で子どもと遊ぶ)
4	特定非営利活動法人 ピースウィンズ・ジャパン 紛争や災害、貧困などの脅威にさらされている人びとに対して支援活動を行う NGO。	広島県 神石高原町	スリランカ東部州 トリンコマレー県	内戦帰還民地域での復興支援活動補助
5	特定非営利活動法人 かものはしプロジェクト 子どもの人身売買問題の解決に取り組むことから始まった認定 NPO 法人。カンボジアの貧困層の女性を雇用しものづくりを行うコミュニティファクトリーを運営し、現在はライフスキルのトレーニングを主軸ミッションとした活動を行う。	東京 渋谷区	カンボジア シュムリアップ	コミュニティファクトリー(工房)の来客対応、ショップのお手伝い
6	特定非営利活動法人 アーシャニアアジアの農民と歩む会 インドの貧しい農村において、農村の基盤となる「農」を通じて、アジアの農民の自立と持続可能な暮らしを実現し、共に生きるための事業を推進する NPO 法人。	栃木県 那須塩原市	インド・ウッタ ルプラデッシュ (UP) 州アラ ハバード市およ び近郊	農村開発事業(有機農業・教育支援・保健衛生など)の見学・作業体験、人材育成事業(ハンディクラフト縫製・食品加工など)の見学・作業体験、有機農業組合活動(朝市での販売・日本米やキノコの販促など)の見学・作業体験、広報、総務の事務補助等
7	パンニャサストラ大学の日本語・ビジネス研修センター プノンペンにある私立大学の日本語・ビジネス研修センターで、宇都宮大学大学院国際学研究科博士課程を修了したサ・ソチア博士がセンター長。	カンボジア プノンペン	カンボジア プノンペン	日本語教育、日本・カンボジアの文化交流活動のなどのサポート
8	アンコールクッキー株式会社 アンコール・ワット型の手作りクッキーの店。カンボジア人の手による本物のカンボジア土産を作ることを目指して開業して以来、今やカンボジアの定番土産。	カンボジア シュムリアップ	カンボジア シュムリアップ	店舗での接客・販売、商品の企画開発、広報・マーケティング等

	団体名	所属地 (本部)	実習国・実習地	実習概要
9	株式会社パデコ 日本の開発コンサルタント企業として、国際協力機構より業務委託を受け「カンボジア国教員養成大学設立のための基盤構築プロジェクト（第1年次）」（2017年1月～2019年5月）を実施。	東京都 港区	カンボジア プノンペン	小中学校教員養成課程のカリキュラム・教材開発支援プロジェクトの職場体験。調達、広報の手伝い等。
10	高野山 宿坊櫻池院 高野山にある宿坊寺院の一つで、1100年代に白河天皇代4皇子覚法親王により作られた。	和歌山県 伊都郡	和歌山県 伊都郡	宿坊での接客、部屋の準備、食事の準備等。
11	島キャン（受入れ先ホテル、奄美島） 離島で職業体験をしながら島おこしインターンを行う。	東京都 新宿区	奄美	離島の地域活性化を目的としたホテルでの研修。
12	（株）アースアンドヒューマンコーポレーション JICA 事業を受託するコンサルタント会社。	東京都 町田市	エチオピア アディスアベバ	日本人専門家の補佐的作業
13	特定非営利活動法人 フリッジ エーシア ジャパン 子ども、青年、大人（父親・母親・お年寄り）といった各世代の人々が共に関わり合いながら主体的に地域の活動に参加し、「地域の伝統・環境の保全」と「地域経済の発展」との両立を実現させる社会の構築実現に向けて取り組んでいる認定 NPO 法人。	東京都 渋谷区	ベトナム フエ	バイオ農家支援、子どもへの環境教育支援
14	カンボジア日本人材開発センター（CJCC） カンボジアにおいて、JICA、日本企業などと協力して、人材育成事業、日本語教育、文化交流事業などを行う。	カンボジア プノンペン	カンボジア プノンペン	文化交流部門でイベントやスタディーツアー受け入れなどのサポート
15	台湾原住民族棒球運動発展協会 野球運動を通じた「台湾原住民族」の文化の継承、国民と世界の人々へ「台湾原住民族」の才能の多面性の伝達、並びに、エスニックグループ融合を目標に、主にスポーツを通して「台湾原住民族」の文化の発展・継承及び交流推進を行う組織。	台湾 台北市	台湾 台北市	各種研究会・イベントの参加、及び、聞き取り調査等を行い、台湾文化の歴史認識・理解と、その文化の継承の方法やスポーツと文化の関連性について学ぶ。
16	合同会社シェトラトレーディング (オンライン実習および実地実習) コンゴ民主共和国(DRC) コーヒーの輸入・販売を行う民間企業。	茨城県 取手市	茨城県取手市 および栃木県 宇都宮市	コンゴ民主共和国から輸入のコーヒー豆製品の販路開拓、現地コーヒー農園との連携。
17	ラ・ウニオン学校 ペルーリマ市にある日系人が設立した小中学校。カリキュラムの中に日本語教育が含まれている。日系人社会の中心となる日秘文化協会と協力し、日本の行事を行う。	ペルー リマ	ペルー リマ	日本語文化部で、日本語教室、文化クラスのアシスタント

4. 実習生からの報告

実習生 ^{みや} 宮 ひより

所属： 宇都宮大学 国際学部国際学科 3年(実習参加時)

実習先： インドネシア Agradaya

実習期間： 令和7年3月18日～4月1日

実習内容と課題

実習内容：国際ビジネス（Agradaya のスパイス製品を日本に導入するための市場分析と戦略策定）

課題：

- ① 日本のスパイス市場の分析
- ② 輸出入規制と手順
- ③ 市場浸透計画戦略の策定



Ramadan 前夜祭



ティーバック包装作業の様子



小規模農家訪問

実習の成果

国際ビジネスをする上で必要不可欠となる規制や手順といった基本的な流れを知ることができた。

Agradaya はハーブやスパイスを取り扱う企業であるため、製品によっては輸入が厳しく植物検疫をはじめとする諸手続きが必要な場合がある。

日本のスパイス市場はコロナ禍以降右肩上がり需要が増加している。特に健康志向の傾向とアジア諸国をはじめとする外国人労働者や留学生の増加に伴いエスニック料理やレストランが増えたことに起因するだろう。しかし、まだまだ家庭での使用頻度は低く、使い方がわからなかったり1瓶全て使い切ることが難しいといった声が多く聞かれた。

日本のスパイスの輸入動向としては、輸入量順にジンジャー、唐辛子、胡椒、ターメリックが上位を占めており、家庭レベルで日常使いしやすい種であると分析した。コリアンダーやクミン、シナモン、ナツメグ、カルダモン、クローブは家庭よりもレストランなどの専門店で主に使用されていると考える。また、日本で販売されるスパイス製品はパウダータイプの製品が多く、インドネシアと異なりホールタイプで使用することはほとんどない。日本とインドネシアにおけるスパイスの動向や特徴の違いは、文化や社会、歴史的背景が関わっていると考察する。

日本のスパイス市場は「家庭」「レストラン」「日本在住のアジア諸国出身の外国人」の3つの消費者層に分けて分析を行なった。家庭では使用スパイスが限られ、輸入量上位のものが中心。レストランでは家庭より多くの種類・用途のスパイスを使用する傾向にある。特にエスニックレストランの増加に追い風が吹く。在日アジア人は祖国の味を再現するため日本では珍しいスパイスを求め、アジア物産店などを利用する傾向にある。

アプローチ可能な日本企業としては大規模から小規模店舗まで17社をリストアップ。大手企業では競合が多く参入が難しいが、自然素材を活用した製品と地域社会への貢献を通じたジゾクカノウナビジネスモデルを武器にすると可能性が上がると考える。またインドネシア専門店では現地色の強さが強みとなり、取扱の可能性が高いと考えられる。

以上を踏まえて「市場浸透戦略計画」をターゲット別に策定した。

一つ目のターゲット「家庭」は、食品メーカーと連携しスーパーへの展開を図る。使いきりタイプの小分け商品を開発し、ジンジャーや唐辛子など一般的なスパイスからアプローチ。

二つ目のターゲット「レストラン」では、スパイス使用量の多いエスニックレストランに注目。実績のあるインドネシア料理店への販路拡大を狙う。

三つ目の「在日アジア人」は、アジア物産店を中心に展開、経営者がインドネシア人であることが多く、関係構築がしやすい。価格に敏感な市場であるため、手頃な価格設定が重要。

学んだこと

インターン生として自らの役割を果たす責任があり、1人の社員として業務をこなす訓練を積むことができました。

私の課題は日本市場の研究であったため、パソコンに向かって1人で作業することが多かったのですが、Agradayaの製品について理解を深めたいという思いや、社員の方々と協力して働く経験を積みたいという気持ちから、積極的に商品の袋詰めや計量といった軽作業にも参加しました。そうした活動を通じて社員の方々と徐々に打ち解け、仕事終わりには一緒に夕食を取ったり休日には遊びに出かけたりするなどして、友人もできたことをうれしく思います。

私が実習を行った期間はラマダン中であったため業務時間が変則的でしたが、基本的には16時に退社し、その後は残業もなく、家族や友人との時間を大切にしている様子が印象的で、日本のワークスタイルとは大きく異なると感じました。

また、Agradayaの責任者であるAndhika氏のご自身のビジネス上の役割を果たしつつも、社員とともに現場の作業にも積極的に携わっており、同じ立場・目線で仕事をしている姿がとても印象的でした。社員の方々から厚い信頼を寄せられていることが伝わってきて、私も今後社会に出る上でぜひ参考にしたいと思いました。

将来への影響

これまで私は卒業後の進路として国際的な機関や団体で働くことに興味を持っていました。しかし、インドネシアのAgradayaでの経験を通じて、民間企業で働くことによって果たせる社会貢献があることを実感しました。

Agradayaでは、自社製品を通じて人々の健康を支えるだけでなく、小規模農家とパートナーシップを結び、彼らの生業の幅を広げる取り組みや、女性や子どもへの支援など、多角的に社会貢献を行っています。

小規模農家を訪問する前は、彼らの生活は非常に厳しく、貧困に苦しんでいるのではないかと考えていました。しかし実際に訪れてみると、確かに日本と比べて賃金が低かったり、設備が十分ではなかったりする部分はあるものの、何よりも印象的であったのは、彼らの労働の中に笑顔があったことでした。

このように、民間の現場で働くことによって初めて得られる視点や、理解できる現状、そして取り組みを体験できたことで、自分の将来の方向性が広がったと感じています。

また、私はハーブやスパイスについての知識は最低限しか持ち合わせていませんでしたが、それでも私にできることがありました。だからこそ、これからも自分が置かれた場所で、自分の持つ知識・スキル・経験をどう活かして会社や社会に貢献できるかを常に考えながら、キャリアを築いていきたいと考えます。

実習生 くろさわ さくらこ 黒澤 桜子

所属： 宇都宮大学 国際学部国際学科 2年(実習参加時)

実習先： ベトナム 国際開発救援財団(FIDR)

実習期間： 令和7年8月26日～9月17日

実習目的・実習内容

目的：

- 実習を通して自分の将来のキャリアを考える。
- 一つの組織に入り実際に働いてみることで、自分にできることは何なのか、どのように組織に貢献できるのかを知る。
- 言語や文化が違う人たちと一緒に働く際、良好な関係を築くためには何が大切なのかを学ぶ。
- 実際の現場をみて、またその現場に関わる方々に実際のお話を聞くことで、観光開発やNGO活動について学ぶ。

実習内容：

- ベトナム中部発展型農村総合開発プロジェクト EMMi のサポート業務(サンプル製品作成サポート、手工芸、食品加工)
- ベトナム少数民族地域活性化のための観光開発プロジェクトに含まれるベトナム中部少数民族ツアーへの参加



村の小学校訪問



ベトナム中部少数民族カヨン族の方と



少数民族ツアー

実習の成果

今回のインターンシップでは、私にとって大きな挑戦であった「一人で海外に渡航し生活する」という経験を通して、多くの学びと成長を得ることができた。初めは不安も大きかったが、自分のやりたいことを行動に移し、最終的に「自分を信じてやって良かった」と思える一連の体験を積むことができた。

現地での生活においては、言語や仕組みが分からない中でローカル店に入ることや外出することに恐怖心を抱いていた。しかし、誰かに頼ることはできない状況の中で、自ら食料を確保したり散策をしたりするうちに、一人であることが増えていった。また、ベトナム語の簡単な挨拶や単語を覚え、今後の学習のきっかけを得ることができた。さらに、日常的に英語でコミュニケーションを取る環境に慣れ、英語の「学問」ではなく「ツール」としての重要性を実感することができた。

生活の中で体調を崩すこともあったが、その経験を通して、自分の体に合わない食べ物や体の疲れの程度を理解し、休養の必要性や体調管理の方法について学ぶことができた。これは今後の海外生活や仕事においても大切な知見になると考えている。

実習においては、農村開発プロジェクトを通じて観光開発だけでなく、マーケティングの手法や商品開発のプロトコルについて学ぶことができた。これらの学びは、自分の将来を考える上で重要な基盤になると考えている。また、以前授業の一環としてスリランカを訪れた経験がありその際は複数人で行動したのが、今回は一人でコミュニティに入り込んだことで、自分が外国人としてどのように接してもらおうと嬉しいのかを実感することができた。その経験から、今後は大学の留学生やアルバイト先の外国人客に対して、自分がしてもらって嬉しかったような接し方を心がけたいと思うようになった。

さらに、少数民族ツアーでは日本から来た大学生や事務所の若いスタッフと交流する機会もあり、互いの経験や考えに触れる中で、自分自身も大学生生活や将来に向けて努力していこうという前向きな気持ちを持つことができた。

学んだこと

まず、インターンシップ全体を通して学んだことが三つある。

一つ目は、コミュニケーションにおいて一番大切なことは言語能力ではないということである。FIDR ベトナム事務所所長の大槻さんから、英語が流暢すぎると逆に聞き取りにくかったり、威圧感を感じてしまったりして怖がられてしまうというお話を伺った。場面によってはもちろん英語が堪能であることが必要とされるものの、普

段オフィスで働いているときは英語が完璧なことが一番必要とされるのではなく、話の一番核となる単語が即座に言えるかどうか、ジェスチャーをうまく使えるか、簡単でシンプルな表現を使えるかどうか、相手を思いやったコミュニケーションができるかどうかが大変であると思った。また、ベトナムの方の英語もアクセントの違いがあったり、あまり英語が得意でなかったり、相手の言っていることを聞き取って理解することが難しい中で、何を伝えようとしているのか推測する力も大変であると思った。

二つ目は、相手への敬意を示すためには当たり前だが常にできているかどうかが大変であるということである。例えば、きちんと挨拶をすること、相手の話をよく聞くこと、笑顔を忘れないこと、積極的に自分から行動すること、相手の行動をよく見て何をしてほしいのか考えることなどである。日本でも、ベトナムでも、世界中のどこにいても基本を徹底することが相手に良い印象を与えることに改めて気づかされた。

三つ目は、できないこと、自分の弱みがあることはマイナスなことばかりではないということである。英語に関してもそうであるが、むしろ弱みを見せたほうが親しみやすく、周りの人も協力しやすくと感じた。補い合うのがチームであり、その中で自分にできることを見つけて貢献できることが大切であると学んだ。

次に、FIDR のプロジェクトの一つである少数民族ツアーへの参加を通して学んだことが三つある。

一つ目は、観光開発とは新しいものを創り地域の魅力を創出するだけではなく、もともと存在していたが埋もれていた価値を再発見し、それを輝かせるという形もあるということである。ベトナムの少数民族はこれまで外部の人から「何もない」と思われ、当地人自身も少数民族であることを恥じていた。そのような状況に対して新しい施設などを建設するのではなく、「地域の人々が誇りに思う宝物を持ち寄ってほしい」という呼びかけから始まり、それらを組み合わせて少数民族ツアーをつくり上げていったのである。私はこれまで「開発」と聞くと、新しいものを地域に導入し、それを地元の人々が運営していくというイメージを抱いていた。しかし、もともとあったものをどのように光らせるかを地域住民とともに考え、最初から協働して創り上げていく方法があることを知り、新たな学びとなった。自らが大切にしてきたものが資源となり、誇りにつながることで、住民はより強い自信を持ち、内面から輝くことができる。この姿は非常に魅力的であり、私はこのような観光開発に携わりたいと考えるに至った。

二つ目は、ツアーとは主催者が一方的に提供するものではなく、参加者全員でつくり上げていくものであるということである。参加者が楽しそうに過ごせば過ごすほど、村の人々は当初のプランにはなかったものまで積極的に紹介してくれた。つまり、ツアー参加者が少数民族の可能性をいかに引き出せるかが重要であることを理解した。また、体験の場面で村の人々が先生になった際、FIDR のスタッフは観光客だけでなく村の人々にも盛んに声をかけ、「すごい」と称賛していた姿が印象的であった。これにより村の人々は自信を深め、ツアー全体の雰囲気もより良いものとなった。この経験から、ツアーは主催者のみならず参加者を含め、関わるすべての人々がより良いものにするために貢献する重要な役割を担っていることを学んだ。

三つ目は、観光において重要なのは体験の内容そのもの以上に、人との関わりであるということである。ツアーで行った伝統的なビーズアクセサリづくりやボーガン体験、ダンスといった活動自体もちろん楽しいものであった。しかし、それらは日本においても体験可能なものである。それにもかかわらず、このツアーを通して楽しさだけでなく、幸福感や満足感、さらには実家にいるような懐かしさを感じられたのは、村の人々との交流があったからであると考えられる。言葉が通じなくとも、第三者を介さずに村の人と一対一で直接教えてもらい、ともに体験することで、お金では測ることのできない価値が生まれることを学んだ。

将来への影響

今回のインターンシップでの体験は、自分のキャリアに大きな影響を与えるものとなった。私はもともと「観光」に興味を持っていたのだが、大学では観光に関する授業が少なく、観光開発とは実際にどのような活動を目指すのか具体的なイメージを持てずにいた。そのため、自分が本当に関わりたい分野なのか、あるいは想像と異なるのではないかと悩むことが多かった。しかし今回、観光開発のプロジェクトを間近で見学し、少数民族ツアーだけでなく、急速に発展を遂げているベトナムの観光開発についても学ぶことができた。これにより、やはり自分は観光開発をより深く学び、将来的に観光に関わる仕事に携わりたいという思いを強めるに至った。さらに、今回初めて海外の人々と共に働き、生活する機会を得たことで、自分に適した生活環境や海外で働くことの具体的なイメージを得ることができた。その中で、日本で暮らす良さも再認識するとともに、今後は海外と直接的に関わるキャリアを築いていきたいと考えるようになった。

実習生 とまへち 芭米地 みそら 美空

所 属： 宇都宮大学 国際学部国際学科 4年(実習参加時)

実 習 先： カンボジア KURATA PEPPER

実 習 期 間： 令和7年8月14日～8月29日

実習目的

実習テーマ：

異文化の中で“想い”を繋ぐ人づくりと発信

～地域と世界を舞台にする胡椒ビジネスに注目して～

目的：

- ・農業ビジネスをどのように国際展開させているのかを知る。
- ・日本人がどのように現地の人々と協力しながら経営しているのかを知る。
- ・メディアづくりに携わることで、日本とカンボジアの繋がりを発信する。

実習内容とその具体的なスケジュール：

14日 店舗で働くスタッフやインターン生との交流

15日 店舗での業務

16日～17日 カンボジア日本人商工会の方々とシェムリアップ研修への参加
アンコールクッキーやアンコールアイなどの訪問

19日 店舗で胡椒パッキング業務、訪問してきた山梨大学の教員と学生に商品の紹介

20日 店舗にてインタビューの企画、写真や動画の撮影

21日 将来の提携先 (Goel Community) への訪問

22日 Note の開設・投稿、JHP との交流

23日 商品開発の商談に参加、王立プノンペン大学の見学、インタビューの計画

24日 インタビュー実施、セールススタッフ業務

25日 店舗にて全体 MTG、午後は半休

26日 コクコン州の畑で作業

27日 Goel Community のプノンペン店舗での見学、支店の見学

28日 インタビュー記事の制作・投稿



インタビューに応じてくれたスタッフと



コクコン州の胡椒畑での収穫作業



店舗での接客の様子

実習の成果

最初の1週間ほどは、KURATA PEPPER や胡椒、カンボジアについて知ること注力していた。その後はnote のアカウントを開設し、インターン生として商品の紹介やスタッフへのインタビュー記事を投稿した。特にスタッフへのインタビューは日本語と英語で記事を投稿した。どのような想いで KURATA PEPPER で働いているのか、おすすめの商品や食べ方は何かなどをインタビューした。2言語で記事を投稿したことで、日本人だけでなく世界の人向けのメディアづくりができたのではないかと考える。また、倉田社長とも相談し、note をより多くの人に気軽に読んでもらうために真面目な内容の記事だけではなく個人的な出来事やカンボジアに対しての印象などについての記事を投稿した。カンボジア滞在中にとどめず帰国後も投稿し、9月3日時点で6つの記事を投稿し、全体ビューは730を超えることができた。帰国後も投稿し続ける予定である。

インタビューや記事投稿だけでなく動画作成にも挑戦したいと考えていたが、倉田社長と相談の結果、一時的に動画投稿用の YouTube アカウント等を開設したとしてもそれを継続できるのか、という話になり、断念した。結果的に動画作成には関わることができなかったが、メディアづくりを始めることだけでなく「継続すること」の重要性にも気づくことができる学びの機会となった。

学んだこと

今回の実習を通して学んだことや大切さを実感したことは主に3つある。

1つ目は、地域に根付いたビジネスをするためには地域の人々の主体的な参加が必要であることだ。KURATA PEPPER Co., Ltd.社長の倉田浩伸氏は、KURATA PEPPER をよりカンボジア密着型で且つ持続可能なビジネスにするために、経営をほとんどカンボジア人に任せていた。たしかに、国外から来た日本人によるトップダウン型のビジネスだったら、働く現地スタッフや顧客も「このビジネスを自分たちで発展させて将来を担うような産業にしよう」とは思わないだろう。自分が始めたビジネスだとしても、スタッフを心から信頼して経営を彼らに任せるといった姿勢が、持続可能なビジネスづくりに必要なのだと学んだ。

2つ目は言語についてである。英語を話すスタッフが販売員として常駐していたため、彼らとは英語でコミュニケーションをとれた。しかしパッキングや選別をおこなうスタッフはクメール語しか話さないため、常にノンバーバルコミュニケーションで意思疎通を図っていた。現地の言語ができなくても「意思疎通を図りたい」という気持ちを伝えることができれば心の繋がりが持てると実感したと同時に、やはり現地の言語を知らなくてはビジネスを広く知ってもらうときや仲間とより強い連帯感をもちたいときに困ると思った。矛盾ではあるが、ノンバーバルコミュニケーションの大切さと英語ではない現地語の知識の大切さを知った。

3つ目は、多くのコミュニティに参加することの大切さである。倉田社長は顔が広く、カンボジアに住む多くの日本人を紹介してくださった。日常から多くの人と繋がりを持っていることによって、ときに自分の仕事やキャリアに役立つ場面があるだろうから、私もより多くの人と繋がっていこうと思った。

将来への影響

カンボジアで様々なキャリアをもつ日本人と出会うことができた。例えば、大学卒業後すぐにタイで不動産の仕事をしてからカンボジアに移動してきた人や、日本語教師として今まで数か国で働いてきた人、「教育」という軸を持って教師やNPOスタッフとして働く人などがいた。日本にいれば大学卒業後は院進または就職というルートが王道でそれ以外はリスクを伴うと思われがちだが、そうではない道を選んでいる人とたくさん出会い、選択肢が広がったように思う。ある方に、「自分の軸となる分野を見つけること」をアドバイスいただいた。私は一応すでに一般企業に内定をいただいている、そこに就職するつもりではあるが、今回の実習を通して多くの選択肢を知ることができて、就職後のキャリアを考える上で貴重な学びになったと思う。

また、倉田社長の言葉を借りると「オタクになる」ことでいかに成長できるかを知ることができた。倉田社長はカンボジアに来てからすぐに胡椒ビジネスを軌道に乗せることができたわけではなく、お金を稼ぐために様々なアルバイトを経験したりビジネスパートナーが急に姿を消したりなどの経験があったそうだ。それでもここまで事業を発展させることができたのは、カンボジアや胡椒に対して熱中しているからだと思う。私も自分がオタクになれる分野を見つけてそれを極めていきたいと思った。

実習生 おおがき 大柿 みこと 心琴

所属： 宇都宮大学 国際学部国際学科 2年(実習参加時)

実習先： スリランカ セワランカ財団

実習期間： 令和7年8月28日～9月17日

実習目的

目的：

- ① 自分の知らない土地に行くことで異文化を経験すること
- ② スリランカ現地の状況を観察すること
- ③ これまで授業で学んできたことや自分の経験を活かしてスリランカで行われている活動に貢献すること

課題：

- ① 英語を用いたコミュニケーションを向上させる
- ② 海外で働くことの意味と自分が出来ることを再確認する
- ③ 自分の価値観の再構築



青年指導員との集合写真



ChatGPTの説明



ラインルームの見学

今回の実習で行ったスリランカは今まで私が渡航したことのあるような先進国の観光地ではなく、発展途上の国である。日本での日常生活とのギャップを感じつつも異文化に触れて理解することで自分の視野を広めたいと考えていた。また、想像していたスリランカと実際のスリランカの違いを体感することも目的であった。そして私が今までの授業や国際キャリア教育、**International Communication Seminar** で学んできたことを活かして実践することが目的でもあった。そしてスリランカでの出会いが私のキャリア形成に影響を及ぼすことを期待してこの実習に臨んだ。

実習の成果

今回の実習において私が立てたテーマは大方達成できたと自負している。青年指導員の方々と交流する中でスリランカの人々はじゃんけんを知らないのに気づいたことや、現地の結婚式に参加したことで、自分が今まで無意識に抱いていた当たり前という価値観は他の国では必ずしも共有されていないことが分かった。また、現地の人々の家で暮らしたことで日常生活の細部にまで異文化が根付いていることが体験できた。手食を通して食べ物の温度が熱すぎない温度に調整されていることに気が付くなど自分なりの発見もあった。現地のバスやトゥクトゥクの移動では交通の不便さを実感し、インフラの課題にも目を向けるきっかけとなった。フィールドワークや聞き取り調査では教育・水・ゴミなどのラインルーム周辺の問題について現地の声を集めることができた。しかし、私の英語力や事前知識の不足からあまり十分に質問出来ない箇所があったのでそれを今後の課題として受け止めている。国際キャリア教育や **International Communication Seminar** などのこれまでの授業で学んできた、グループで協力して課題を見つけ出し分担してプレゼンテーションを作る力は **Excel** のプレゼンテーションに活かすことができた。**ChatGPT** の説明資料の修正にも応用し、実践的なスキルとして定着させることができた。これまで学んできたことを今回の実習で応用することを目的としてこの実習に参加したが、むしろこの授業で得た経験を今後他の授業や研究活動に活かしたいと考えた。

また、海外で働くことの意味について深く考える機会となった。日本での常識が通用しない場面では臨機応変に対応する力や相手の文化へのリスペクトが求められる。問題を改善すべき点として捉えるのではなくその問題の背景にある事情を理解しようとする姿勢が重要であることが分かった。**Excel** や **ChatGPT** の使い方を現地の方々に教える役目を担うことで苦手意識のあった **Excel** を克服することができた。私の拙い英語でも相手に通じたときは言語の壁を乗り越えることができたことと実感出来て嬉しかった。また、相手の反応を見ながらプレゼンテーションをすることで相手に理解してもらえた時の喜びは教育の力を体感できた。

この様に実習を通して得た経験は知識の応用だけでなく、自分自身の成長にもつながる貴重な成果となった。

学んだこと

生活環境や教育課題に触れることで物事の考え方が大きく広がった。まず異文化を経験する中で常識が異なることが分かった。文化や生活基準が異なるため、私たちと豊かさや幸福の価値観が違うことを学んだ。ラインルームの居住環境や水の利用状況は決して良い物とは言えない。しかし、現地の人々に幸福かを尋ねたときに静かな環境で暮らせること、家族と過ごせること、人々と交流できることに幸せを感じていると答えた人が何人もいた。私たちが見ると物質的には不足していると感じてしまう環境でも現地の人が笑顔で生活している姿を見て幸福とは物質的な豊かさのみではないことを学んだ。また、スマートフォンの利用が多いことに驚かされた。SNS や ICT 技術にも触れる機会はあるもののインフラが整っていない面が多い暮らしにギャップを感じた。

また、英語でのプレゼンテーションや日常会話を通じて語学力だけではなく、コミュニケーションを取りたいという気持ちの重要性を学んだ。青年指導員の方々が私たちと交流する際の勢いのある話し方や明るい話し方を見て、私たちと話したいのだということがわかり嬉しくなった。英語力に自信がなくとも圧倒されずに表情やジェスチャーで思いを伝えようとする姿勢はこれからの国際交流に必要なスキルであると彼女たちから学んだ。街中では現地の方々が私たち外国人に興味を持ち好意的に話しかけてくれた。初対面にも関わらず困っている私たちを手伝ってくれた場面も多くあった。英語を用いたコミュニケーションの向上という目標を達成させるための非常に有益な学びであった。

この実習は座学では得られない学びが多かった。私の知識や経験を現地で養い、将来に活かすことで教育を通じた社会問題の解決に貢献する可能性を実感し、将来のキャリア形成に向けた意識が大きく変化した。

将来への影響

セワランカ財団にインターンシップへ行くことで私は教育問題への関心を高めることができた。私はラインルームで生活する人々と会話していく際に子供の教育に関して幾度か質問した。子供に安定した仕事、特に公務員になってほしいと願う人が多かった。一方で社会科見学のような機会がないため公務員と関わる機会が乏しいことや大学に行くための基礎学力が充分ではないことが分かった。子供にはいろいろな経験をして広い世界をもってほしいと願う大人が多かったが現状としては金銭的な問題から町を離れることが難しく、外の世界を知る機会が限られているという問題を抱えていることが分かった。また、現地では4人に1人がドロップアウトしてしまうという現状があることが明らかとなった。その背景には本人の学習意欲、金銭事情、保護者の出稼ぎなど様々な要因が複雑に絡み合っていることが分かった。アフタースクールプログラムの活動では現地の青年指導員の方々が手作りの勉強道具で子供たちの学習意欲を高めていた。行動経済学を利用してイベントや成功体験、仲間意識などを通じて学校に行きたくなる仕組みづくりをすることが必要だと思った。また、多様な大人と交流することで子供が将来の選択肢を広げられる環境づくりをする必要があると実感した。これらのことから私は子供の教育に興味を持ち、キャリアの視野に入れるようになった。

ドロップアウトや不登校はスリランカだけでなく近年日本でも深刻化している。不登校の小中学生の人数が増えているのだ。2024年には日本で小中学生の不登校人数が過去最多になり約34万人であった。彼らが勉強に興味を取り戻す方法、また自然に学校に行きたくなる取り組みについて考えたいと深く感じた。子供に寄り添って登校に関する悩み解消できるような取り組みやドロップアウトしてもやり直せるセーフティネットの制度を考えていきたいと思った。他にも、子供に広い世界を見せて将来の選択肢を広げる方法として様々な経験をすることや多くの人と触れ合うことが必要であると考え。ゴミ拾いのイベントや地域のイベントを開催することで子供たちに社会的な事象に関心を持たせ、当事者意識を育むことが重要だと考えているのでそのような企画づくりに携わりたい。

今回の実習では私にとって子供の教育について強い関心を持つ良い契機になった。今回の経験でスリランカ現地での教育を知ることでキャリアの方向性を明確にして教育を通して社会に貢献したいと強く思った。

実習生 おおた りゅうせい 太田 琉星

所属： 宇都宮大学 国際学部国際学科 3年(実習参加時)

実習先： スリランカ セワランカ財団

実習期間： 令和7年8月28日～9月19日

実習目的

実習目的：

- ・ 青年指導員と交流する/
- ・ 彼らが現在抱えている考えや気持ちを知る
- ・ 将来の目標や抱負について聞く
- ・ 彼らが地域社会で感じている課題を理解する
- ・ Instagram で発信する
- ・ 茶園での問題を自分の目で観察する
- ・ 行動経済学を用いて解決できる可能性のある課題を特定する
- ・ 行動経済学を導入する前後で茶園労働者にどのような変化があるのかをインタビューを通して理解する
- ・ 糸井川先生が実施するユース向けの行動経済学の授業に参加・補助し、学ぶ
- ・ シヴァ氏や他の方と行動経済学について議論し、現場でアイデアを出し合い、グループディスカッションを行う
- ・ オフィスでの業務に取り組む
- ・ アフタースクールプログラムに参加する
- ・ スポーツ活動を含め、人々と交流する



Newton の道端のごみ



ラインルールの住民へのインタビュー



青年指導員へのインタビュー



共同水栓を使う女性

実習の成果

行動経済学について青年指導員にプレゼンテーションを行った。最後にフィードバックを書いてもらったところ、多くの人が理解できたと答えてくれた。このプレゼンの準備にはかなりの時間をかけた。分かりやすくなるように絵をできるだけ使い、具体例も多く取り入れた。行動経済学は彼らにとって初めての内容だったので、基礎をしっかりと伝えることに集中した。また、人によっては英語があまり得意でない人もいたため、なるべく簡単な英語を使うようにした。こうした工夫が少しでも理解の助けになったのであれば、とても嬉しい。

アフタースクールプログラムの後、青年指導員や地域住民の方にその地域にどんな問題があるのかインタビューを行った。その際にメモなどを取りながら、後日糸井川先生とまとめた。実際には糸井川先生がグラフやエクセルを使いまとめてくださった。3つの農園でインタビューを行ったのだが、最初のほうは、あまり具体的な質問をすることはできなかったが、最後の農園ではなるべく詳細な質問を行い、どんな問題が農園にあるのかを理解できた。また青年指導員の方にプレゼンを行った際にも、報告としてどんな問題が上がったのか青年指導員に説明した。糸井川先生から送られてきた、グラフやエクセルを自分なりに英語に直して、報告をした。

Instagramを14投稿行った。スリランカの大使の方が私たちの投稿をみてくれてとてもうれしかった。いつから見てくれてたかはわからないが栗原先生から共有していただいたメッセージの日付を見ると最近のものだった。最近の投稿も見てくれていると思いこれまでやってきたことが少しでもこのプロジェクトの役に立てたならとてもうれしい。実習中はなるべく写真を撮るように意識し、文章内容はマネージャーが見ても、嫌がらないような文章を意識した。また最初の投稿ではストーリーにただ、投稿を宣伝するために行っていたが、ストーリーを見てくれた人が投稿に行ってくれるように途中から、ストーリーを見た人が興味を持ってくれるようなストーリーを作るように意識した。

学んだこと

フィールドワークやインタビューを通じて、Line room に住む人々が直面する問題を理解することができた。様々な課題があったが、大きく分けると「水の問題」「ごみの問題」「道や家の問題」の3つにまとめら

れる。その中でも特に印象的だったのはごみの問題だ。彼らにはリサイクルという概念がなく、ごみを道端に捨てるのが当たり前になっていることに強い驚きを覚えた。環境問題への意識はほとんどなく、まず衣食住の確保が優先されているため、環境は後回しにされている。私は景観が悪くなる以外に「なぜ道端にごみを捨ててはいけないのか」をうまく説明できず、その難しさを実感した。だからこそ、この地域では行動経済学的なアプローチが有効だと感じた。水の問題については地域ごとに差があった。私が訪れた Newton では、上流地域では共同水栓を使い、飲み水と生活用水が分けられていた。しかし下流地域では両者が区別されておらず、水は非常に汚れていた。この体験を通して日本の水環境の便利さを改めて理解すると同時に、こうした課題を解決するために自分に何ができるかを考えるようになった。交通に関しては特に Newton が大変で、3つの農園で一番険しい道だった。そのため、病院や買い物に行くのも一苦労でそれがかかり問題だなと学んだ。彼らの生活の一部ではあると思う青年指導員とともにフィールドワークを行うことで、生の声を聴くことができた。現地の人々との対話を通じて「なぜ問題が起きているのか」「なぜ改善が難しいのか」を理解し、住民の小さな声を拾い上げる大切さを実感した。なぜなら、課題の背景には、一人ひとりの生活上の困難や思いが積み重なっており、それを見過ごしてしまう現地の人々にとって実際に役立つ解決策につながらないからだ。その経験から、国際協力において「当事者の視点」を持つことの重要性を学んだ。さらに、この経験を通して、単に課題を指摘するだけではなく、人々の暮らしや価値観に寄り添いながら、どのような方法なら実行可能で、かつ持続的に続けられるのかを考えることが、国際協力において不可欠であると強く感じた。

さらに、糸井川先生や栗原先生との行動経済学に関するミーティングでも印象に残る話があった。それはモチベーションの維持についてだ。私は「この地域の人々が持続的に発展するためにどうすれば働き続けられるのか」と疑問を抱いていたが、糸井川先生から「インスタグラムを活用する方法」を伺い、驚いた。青年指導員の活動をインスタグラムに投稿し、私たちが「いいね」を押すことでモチベーションにつながるというのだ。実際、私自身も実習中にアカウントを作り、「いいね」がつくと嬉しくなり、次も頑張ろうという気持ちになった。この仕組みを活かせば、モチベーションを継続できるのではないかと納得し、その考えを青年指導員の人々とも共有した。

将来への影響

私はこの実習を通して将来国際協力に関わる仕事に就きたいという気持ちが強くなった。この実習を受ける前は国際協力に興味がある程度だったが、実際に Line room に住む人たちの生活の状況や青年指導員との交流、Sevalanka の人たちと一緒に行動することで、困っている人たちを助けられるような仕事に就きたいと考えるようになり、自分に何ができるかも改めて考えるようになった。

今回の実習を通して、人の顔が見える支援の大切さに気づいた。これまでは青年指導員の方々と直接話したことはなく、写真でしか姿を知ることがなかった。しかし実際に彼らと対話し、困っていることを聞いたり、文化を共有したり、一緒に食事をしたりする中で、次第に距離が縮まっていった。さらに、プレゼン行い、Line room を案内してもらうことで、彼らを「支援の対象」ではなく「同じ目標に向かって努力する仲間」と認識できるようになった。

その経験を通して、支援とは単なる一方的な行為ではなく、互いに協力しながら関係を築いていくものだと実感した。彼らと触れ合いながら活動したことで、私自身も達成感や充実感を味わい、今後も国際協力の道を進みたいという気持ちがより一層強くなった。

私はこの実習を通して改めてこういった人の役に立つ仕事、特に生活の面で支えることの意義を実感すると同時に、同じ目標に向かって頑張る仲間がいることの素晴らしさを感じた。これが私にとって大きなモチベーションとなり、今後のキャリアを考える上での原動力になっていくのではないかと考えている。

将来は、今回学んだ「人の顔が見える支援」や「仲間と協力し合う姿勢」を大切にしながら、国際協力の現場で人々の暮らしをより良くする仕事に携わりたい。単に援助するのではなく、現地の人々と共に考え、共に行動し、持続的に変化を生み出せるような取り組みに関わりたいと思う。

実習生 ^{たちばな} 立花 ひまる

所属： 宇都宮大学 国際学部国際学科 4年(実習参加時)

実習先： スリランカ セワランカ財団

実習期間： 令和7年8月29日～9月16日

実習目的

実習目的：

- ・ 支援者としての姿勢を学ぶ(テーマ)
- ・ 海外 NGO で草の根活動に関わり、社会問題の実態を学ぶ
- ・ 海外生活の経験を増やす

実習内容

- ・ After-school program opening ceremony への参加
- ・ ラインルームの調査
- ・ 幼稚園見学
- ・ 青年指導員へのインタビュー、交流
- ・ 青年指導員に向けたプレゼンテーション

実習の成果

始めはラインルームの調査、After-school program opening ceremony への参加を中心に行ったため、茶園の実態や取り組みを間近で見て学ぶことが出来た。Opening ceremony の後に青年指導員の方や茶園に住む方へインタビューをすることが多かったが、最初は何を聞けばよいかわからなかった。しかし何が問題なのかしっかりと理解した後はどのような質問をするべきなのか分かり、現地の人々が困窮している点へのさらなる理解に繋がった。

また、プレゼンテーションでは行動経済学から見たサポートの仕方、インスタグラム、パワーポイント、Chat GPT、Excel の使い方を発表した。二回同じ内容のプレゼンテーションを行い、毎度フィードバックをしてもらおうと、「理解できた」「ぜひ使ってみよう」という内容のものが多かった。よって、今回の実習でこのプレゼンテーションの意義を特に感じる事ができた。

海外の人がいるということだけでもかなり珍しがられたように感じた。そのため、憶測にはなってしまうが、国際交流をすることによって私たちのみならず現地の人々の異文化理解へのアプローチになっているのではないだろうか。

学んだこと

数年前に、マラウイで青年海外協力隊として活動していた長井優希乃さんという方の文章を読んでいた中で「貧困や不便さと不幸せはイコールではない」「マラウイの人々は幸せそうだった」という旨の文章を読んだことがあった。当時は単純に興味本位で読んでいたが、今でも思い出すほど印象に残っている。スリランカ滞在中はよくその言葉がリマインドされた。確かにスリランカは日本よりも発展途上であり、実際に生活していて不快に思うこともよくあった。例えば、お風呂やトイレの使い方や使用状況、道路にもゴミは当たり前で溜まっていたりどこからか臭いが漂っていたり衛生環境が充分ではなかった。また交通面では、交通事故に遭うのではないかと瞬間がいくつもあり、経験として乗せてくれたバスは人口密度が非常に大きい且つ道が常に曲がりくねっており、体調不良が悪化してしまった。このような状況を日本では体験したことが無く、途中から慣れてきた部分はあったものの、不便さや不快さを感じていたことは確かだった。しかしこれがスリランカでの日常であり、バスに乗っていても他の乗客は何食わぬ顔をしていたり笑顔だったりした。またホストファミリーの夫婦は「色々な場所に行ったがここが一番平和だ」と言っていた。加えて、茶園のゴミの管理の問題について話し合っていたときには、「ゴミを決まったところに捨てる」という私達には当たり前の概念が現地の人々にはないという意見が出た。

これらから、生活した実感としてやはり日本とスリランカ間は異文化であるということ学んだ。生活が異なると、それに伴って感覚、価値観も異なってくる。それが長い間根付いているものとなると、共存する



アフタースクールプログラム



オープニングセレモニーの様子



幼稚園訪問



ラインルームの調査

際に折り合いをつけるのが難しいのではないだろうか。近年日本でもグローバル化が進み多文化共生へ向けた取り組みは様々であるが、自ら海外で生活してみることで、共生への姿勢や考え方を身に付けることができると考える。

このような経験を通して、「幸せや豊かさとは何か」という疑問を持った。その答えを出すのは未だ難しい。しかし、自分が置かれている状況下で満足しているという感覚が必要なのではないだろうか。

将来への影響

現時点で将来のキャリアで決まっていることは、臨床心理士の資格を取り心理職に就くことだ。具体的には子どもに関わる仕事や、児童養護施設等の児童福祉施設での勤務も考えている。今回のキャリア実習は心理職との直接的な関係はないかもしれないが、現地で社会課題へアプローチする支援者という立場としては共通しているのではないかと思う。

スリランカの現地では、セワランカ財団の方々をはじめ、幼稚園の先生、学校の先生などからお話を伺う機会があった。彼女たちの共通点は、仕事を楽しんでいることだった。セワランカ財団の Siva さんから朝から晩まで多忙であること、休日がほぼないこと、常に業務を抱えていることを話していただく中で、「でも面白い」と笑顔で答えてくださったことが印象的だった。また、幼稚園の先生に質問をしたときは「大変なことはない」と答えており、学校の先生は「生徒みんな可愛いでしょ」とおっしゃっていた。もちろん私達の見えないところで様々な問題があると思うが、仕事を楽しんでいるのは確かだと思った。また、青年指導員の方が作った教材を拝見した際に、とても精巧な教材だったため大変だったのではないかと聞くと、「そんな大変じゃない」とあっけらかんとした様子だった。教材をどのように使うかを説明してくれているときも、感動する私を見て嬉しそうで、誇らしげな表情を見せてくれた。

仕事をするとすると、賃金を稼ぐという目的に縛られて楽しむことを忘れがちになってしまう。また社会課題と直接関係している仕事となると、向き合いたくないような、いたたまれない感情になりがちで、自分の生活丸ごと揺さぶられてしまうことも多い。それが将来心理職に就くとなるとかなり懸念点であり、アルバイトでも実際に感情が大きく動いてしまうこともあった。しかし、スリランカで出会った人々のようにまずは自分が楽しむ、豊かであることを忘れないようにしたい。

実習生 はすい 蓮井 なのか 菜乃花

所属： 宇都宮大学 国際学部国際学科 2年(実習参加時)

実習先： スリランカ セワランカ財団

実習期間： 令和7年9月1日～9月17日

実習目的

私は将来、国際ジャーナリストや国際協力の現場で活躍することを目指している。これまで、UU-TEA の活動や海外フィールドワーク演習Ⅰ・Ⅱで国際協力について学び、スリランカの学生と協力して調査・討論を行った。また茶園の現場では、ラインルールの所有権問題や女性の社会進出といった課題に直面し、国際協力の複雑さを

実感した。この実習では、プロジェクトのモニタリングや広報補佐に関わり、自身の取材・発信力を生かして貢献したいと考えていた。また、英語を使用するため英語四技能の向上や、異文化コミュニケーション力の向上を図ること、さらに、茶園が抱える課題へのアプローチ方法を学ぶとともに、現場で働く方々の経験を伺い、自らのキャリア形成に役立てたいと考えていた。



行動経済学に関するミーティング



スライド作成について説明する様子



オープニングセレモニーへ参加

実習の成果

実習内容： JICA の草の根協力支援型プロジェクト『教育環境改善を通じた紅茶農園コミュニティ・リーダー育成事業』のカウンターパートである、スリランカの教育省の元で活動するセワランカ財団の元、インターンとして活動する。

具体的には、プロジェクトのアフタースクールプログラムの開会式や行動経済学の活用方法についての会議や議論への参加、またユースファシリテーターへのインタビューを通して居住環境や課題を調査した。さらに、IT技術に関するプレゼンテーションの作成と実施、必要物品の購入を行った。ラインルールや関係者宅、幼稚園、小学校を訪問し、現地の状況を記録した。最後に日報および最終報告書を作成し、セワランカへのフィードバックを提出した。このような貴重な経験の中で、自分なりに考えながら実習に取り組むことで、様々な成果を得ることができた。

まずは、英語能力の向上である。実習開始前から現地に到着後、すぐに英語が話せるよう、渡航前に HPAIR というハーバード大学主催の東京大学で行われた国際会議に参加することにより、意図的に英語を話す機会をつつたため、比較的すぐ英語を話す環境に順応することができた。渡航直後は言いたいことが上手く英語で表現できず、言葉に詰まることが多々あったが、帰国直前には簡単な単語で言い回したり、相手のリアクションを見ながら双方向でのコミュニケーションを重視することを意識することができた。

次に、なんでも挑戦してみるというチャレンジ精神である。私は元々保守的な性格ということもあり、新しいもの・ことに挑戦してみることに對して多少の恐怖を抱いており、特に異国の地で不安定な中挑戦してみることにためらいを感じていた。そんな中、元宇都宮大学生であり現協力隊員の方から、「安全な道を渡ることも悪くないが、挑戦できる環境があるなら無駄にしない方がいい、今が自分の世界を広げる絶好の機会」と助言をいただいた。それから、一見、辛そうだったり味の予想ができない食べ物をまずは一口食べてみることに、積極的にユースファシリテーターという、これからプロジェクトで関わっていくメンバーに話しかけること、意見や文化の衝突を恐れず自分の意見を表明することなど、様々なことにチャレンジすることができた。もちろん失敗はつきものだったが、挑戦できたということが帰国後も大きな自信へとつながった。

また、学術的な学びとして、国際協力や国際開発について、現場のリアルを通じて学びを深めることができた。今まで情報を文字で追うことが限界だったが、実際に茶園を訪れ、五感をフル活用して情報を得るだけでなく、その情報で今までの疑問を解決し、新たな疑問を生み出すことができた。特に、卒論の大まかキーワードや方向性が自分の中で少しずつだが見えてきたことが大きいのではないかと考える。これは渡航前に特に苦悩していたことであったため、「ジャーナリズム」や「国際開発」、「スリランカの茶園」「平和学」などのキーワードが全てつながるようなアイデアが浮かび、専攻分野も固まったことにより、これからの履修にもつながるのではないかと考える。

さらに、JICA プロジェクトに関わる UUE メンバーとして、実習中から帰国後もユースファシリテーターと WhatsApp を介して連絡を取り合うことができていることである。ユースファシリテーターはこれから三つの対象地域ごとに分かれ、UU-TEA メンバーと WhatsApp を介して交流していくことになるが、その際の懸念点は一度も会ったことがない、環境も生き立ちも大きく異なる人々がどのように交流するかということであると考えていた。そのため、帰国後はユースファシリテーターと UU-TEA メンバーの架け橋のような存在になるべく、特にユースファシリテーターとの交流に重点を置いていた。実習中に積極的に連絡を取り合い、会った際には必ずより多くのユースに話しかけることを意識した結果、何人かのユースに名前を覚えてもらい、個人的に WhatsApp で連絡をとり続けることに成功した。この後 UU-TEA メンバーとの交流やユースへのインタビューを予定しているため、彼女たちと交流することが大変楽しみであり、現地で直接関わっているプロジェクト関係者から直接話を聞く機会をこれからも大切にしたい。

学んだこと

この実習では、普段の講義では得ることのできない大変貴重な体験や想像もしていなかった発見があった。

その中でも、特に印象に残って考察したこととして、セワランカ財団が関わっている JICA プロジェクトについてである。実際にラインルームを訪問したり、ユースファシリテーターへインタビューを行った中から見えてくるのは、ユースが抱えている「茶園を抜け出したい」という思いと、しかしながら「現実味がない」という儂い絶望感であった。幼稚園児などは歌手や警察官などのそれぞれの夢を存分に語っているが、日本人と同じように成長して行くにつれ、実現可能性を探りながら夢を語るようになっていた。そのため、ほとんどのユースが茶園を出てコロンボや海外に行きたいと話していた。しかしなぜかその夢はどこか曖昧で、夢を語っても実現性が薄いかのように力強さがなかったことがとても印象に残っている。ユースの中には既に結婚している方もおり、その方は旦那が茶園で従事しているため、茶園を出ることは諦め、ここでどのように多く稼げるか考えていると話していた。その話を聞いたとき、結婚して一生茶園で生活する未来、よくて出稼ぎで海外へ赴くが完全な脱出には至れないという状況がとても重く感じられた。茶園の中には最低限、周辺で生活が完結するように診療所や寺院があり、スリランカの一般社会から隔離されている。このような社会的構造が相まって、プロジェクトの目標である、ロールモデルとなるような人物が出てくるのかということに対して不安を抱いた。また、ユースは「とにかく茶園から出たい」「出て良い暮らしをし、幸せになりたい」と話していたが、茶園を出ることが幸せに直結する訳ではないのでは、と考えてしまった。ハッピースレイブではないが、茶園を出た後の幸せを私たちは確約できない。茶園を出たい、と思うのは、周りの大人が重労働低賃金で働いている様子や、彼女たちが働いて得るはずだった給料をエステートマネージャーが利用し贅沢している様子を見ていれば当然である。しかし、茶園の外には同じように困難が広がっており、それはたとえ先進国であっても同じである。もちろん彼女たちが出たいと考えるならその考えを尊重し、このプロジェクトへ貢献したいと考えていたが、今いる場所や働いている茶園の価値に気づいてほしい、誇れる仕事にゆくゆくはなつて欲しいとも考えていた。結局私たちができることは、プロジェクトを通じて彼女たちに選択肢を与えることだけではないか。よって、キャリア実習を通して、プロジェクトの中の一つの道筋の限界点を見た。

将来への影響

今回の実習を経て、数多くのことを学び、そしてその学びは必ず将来につながるような有益なものばかりであった。

まず、国際 NGO として任地で働くことの解像度が圧倒的に上がったため、国際 NGO として働くことへの興味が増幅したことである。将来のキャリアに関しては現在二年生ということもあり、広く様々な業界を見て決定していきたいと考えていたため、以前から興味があった国際 NGO で働くということはどういうことかを見て学ぶことができた点大きいと考える。さらに興味が増したため、キャリアの候補として考えたい。しかしながら、やはり自分は国際 NGO の最前線には向かないのかもしれない、と同時に実感した。環境適応能力の低さによる体調不良が目立ったためである。また、インタビューしたときに実感したことなのだが、自身が最前線に立ちプロジェクトを実施することより、どちらかという現地地で起こっていること、行われている出来事を調べて伝えることの方に心が向いたため、マスコミや広報など、メディア関係のキャリアをメインに検討したいと考えた。

さらに、国際協力や国際開発という分野も本格的に学修したいと考えた。渡航前から元々興味があった分野であったが、平和学や平和構築などにも関心を持っていたため、帰国後の二年後期からは様々な分野の講義を履修し、より視野を広げてキャリアに役立てたいと考えるようになった。

令和7年度 国際キャリア教育プログラム 報告書

協力者一覧

- 主催： 大学コンソーシアムとちぎ、宇都宮大学
後援： 宇都宮大学国際学部同窓会、(公社)栃木県経済同友会、(公財)栃木県国際交流協会、
NPO 法人 宇都宮市国際交流協会、JICA 筑波センター
協賛： (公財)あしぎん国際交流財団
特別協力： 宇都宮市創造都市研究センター

執筆・編集担当

宇都宮大学 国際学部 「令和7年度 国際キャリア教育運営委員会」

- | | |
|----------|--------------|
| 国際学部長 | 中村 真 |
| 教授 | 吉田 一彦 (委員長) |
| 教授 | 高橋 若菜 (副委員長) |
| 准教授 | 栗原 俊輔 (副委員長) |
| 准教授 | スエヨシ・アナ |
| 准教授 | 槇野 佳奈子 |
| 助教 | 申 惠媛 |
| 助教 | スギット アルジョン |
| 助教 | 李 亜姣 |
| コーディネーター | 佐藤 裕香 |

発行月： 令和8(2026)年3月

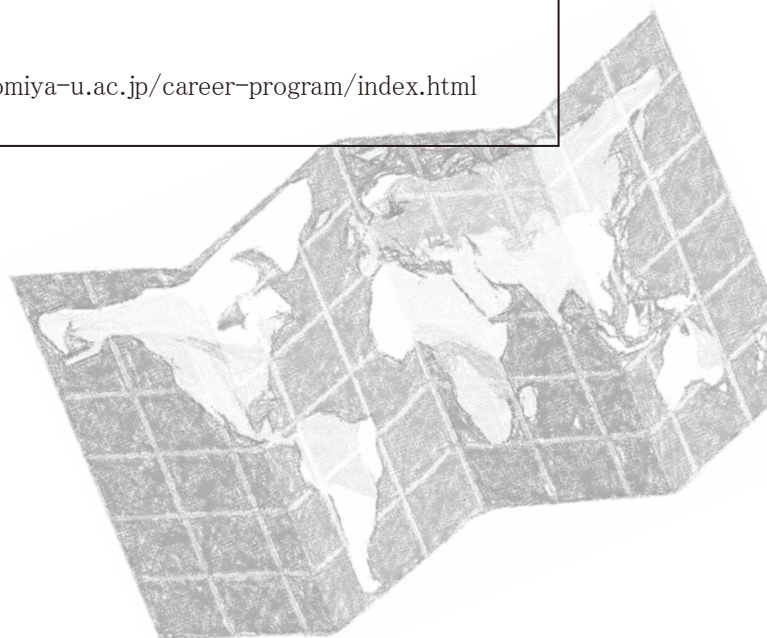
発行者： 宇都宮大学 国際学部

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町 350

TEL 028-649-5172

Email kokuca@a.utsunomiya-u.ac.jp

Website <https://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/index.html>





宇都宮大学
UTSUNOMIYA UNIVERSITY